

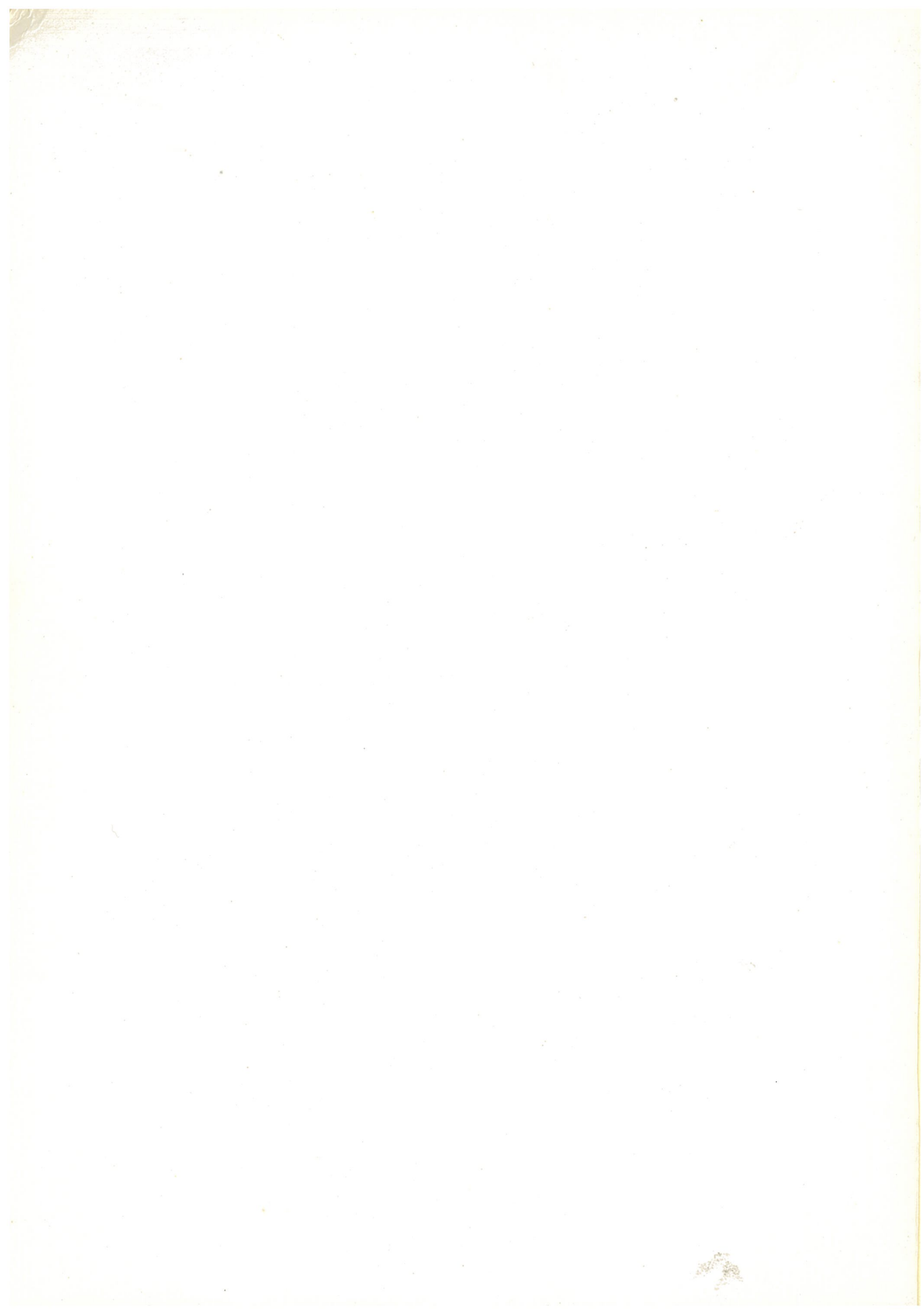
如来寺跡

宇土半島基部古墳群分布調査報告（Ⅲ）

宇土市埋蔵文化財調査報告書第9集

1984

熊本県宇土市教育委員会



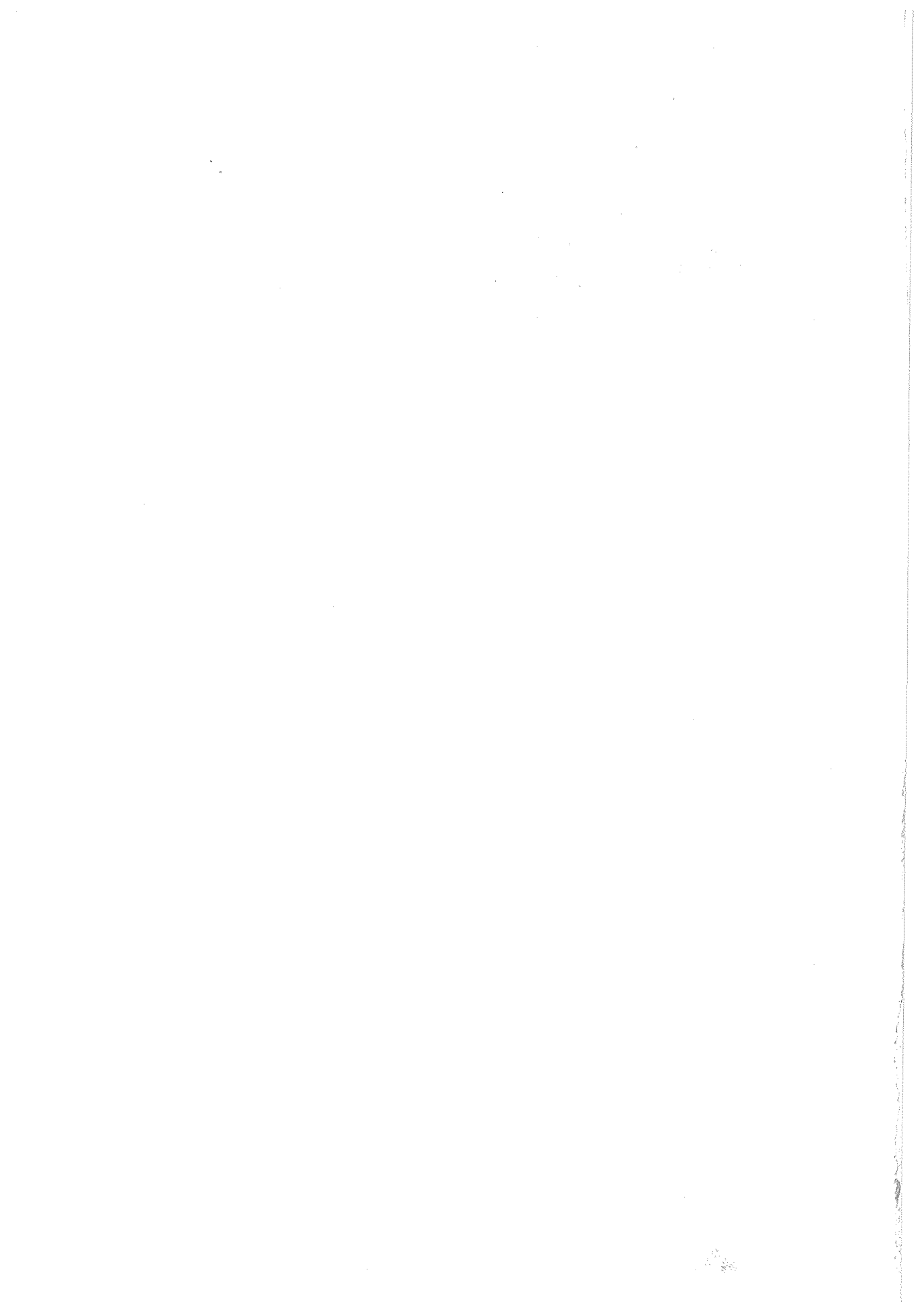
如來寺跡

宇土半島基部古墳群分布調査報告（Ⅲ）

宇土市埋蔵文化財調査報告書第9集

1984

熊本県宇土市教育委員会





口絵写真：如来寺釈迦如来坐像
(宇土市岩古曾町上古閑)
五十嵐千彦 氏 撮影

序

宇土市の東端に位置する花園町には数多くの遺跡があり、本市の中でも有数の文化財の宝庫として知られているところでもあります。雁回山の南麓に位置し、おそらく人々が生活を営む上で最適の場所であったからだといえましょう。

しかし、この地域に存する文化財については、これまであまり調査が実施されたことはなく、その実体はあまり明らかではありませんでした。今回、国、および県の補助を得てこの地域の遺跡分布調査と如来寺跡の一部、およびその周辺部の発掘調査を実施し、本書に収録したような貴重な成果を得ることができました。

本書が、文化財の保護・活用ならびに学術研究の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査に際して御協力いただきました関係各位に対して衷心より謝意を表します。

昭和59年3月

宇土市教育委員会

教育長 船田 至

例 言

1. 本書は、宇土市教育委員会が昭和58年度の国庫補助事業として実施した如来寺跡によらいじの調査報告書である。
2. 本事業は、宇土半島基部古墳群分布調査の一環として行なった。表題は、如来寺に関する遺構・遺物の出土が多くを占めるので、如来寺跡とし、副題を宇土半島基部古墳群分布調査（Ⅲ）とした。
3. 蔵骨器内火葬人骨の鑑定を北條暉幸産業医科大学教授に依頼したところ、本人骨とあわせて宇土郡不知火町浦上字迫出土蔵骨器内の火葬人骨についての玉稿をもいただくことができたので、併せて付論として掲載した。
4. 本文第2図は、宇土市平面図17（2,500分の1）、三日地区区画整理一般計画平面図（1,000分の1）、松橋町管内図（10,000分の1）の合成。第27図は、宇土市管内図と松橋町管内図を合成した。図版1は、大阪写真測量所の提供による。
5. 遺構・遺物の実測、製図及び写真撮影は、熊本商科大学学生の援助を受け、木下洋介、古城史雄が行なった。実測図で用いたレベルは海拔標高である。
7. 本書の執筆は、第1章高木・木下第2章高木第3章高木・木下・古城第4章高木・木下が行ない文末に明記した。史料編の校訂は高木が行なった。編集は執筆者全員による。
8. 題字は、如来寺住職菩提哲哉氏の揮毫による。
9. 出土遺物、その他関係資料については、宇土市教育委員会が保管している。

本文目次

第1章 序 説	1
1 はじめに	1
2 調査の経過	1
3 調査の組織	2
第2章 立地と環境	3
第3章 調査の記録	7
1 調査地区	7
2 遺 構	7
小 結	20
3 遺 物	21
小 結	32
4 周辺地域分布調査	33
如来寺の歴史	45
第4章 総 括	57
付 論	
1 熊本県宇土市花園町三日字大門出土蔵骨器内火葬人骨	61
2 熊本県宇土郡不知火町大字浦上字迫出土蔵骨器内火葬人骨	62

挿 図 目 次

第1図 位置図(1/50000)	5	第15図 T-7トレンチ遺物出土状態(1/20)	20
第2図 トレンチ配置図①(1/7500)	8	第16図 出土遺物実測図(瓦類)(1/4)	23
第3図 トレンチ配置図②(1/800)	8	第17図 出土遺物実測図(瓦類)(1/4)	24
第4図 T-5トレンチ土層断面図(1/80)	9	第18図 出土遺物実測図(土師器)(1/3)	25
第5図 5区遺構配置図(1/80)	9	第19図 出土遺物実測図(須恵器)(1/3)	26
第6図 SB-01実測図(1/100)	11	第20図 出土遺物実測図(播鉢)(1/3)	27
第7図 SB-02実測図(1/100)	12	第21図 出土遺物実測図(火鉢)(1/4)	28
第8図 土墳墓配置図(1/100)	12	第22図 出土遺物実測図(瓦器類)(1/3)	28
第9図 土墳墓実測図(1/30)	13	第23図 出土遺物実測図(陶器類)(1/3)	29
第10図 土墳墓実測図(1/30)	14	第24図 出土遺物実測図(陶磁器類)(1/3)	30
第11図 土墳墓実測図(1/30)	16	第25図 出土遺物実測図(砥石)(1/3)	31
第12図 土墳墓土層断面図(1/30)	17	第26図 出土遺物実測図(鉄製品)(1/3)	32
第13図 獣骨出土状態実測図(1/10)	18	第27図 関連地名・字名位置図(1/10000)	34
第14図 6区検出土墳墓実測図(1/30)	19	第28図 檜崎古墳墳丘測量図(1/1000)	35

第29図	女夫塚(男塚)古墳墳丘測量図(1/1000)	36
第30図	蔵骨器蓋略図	37
第31図	蔵骨器出土位置図(1/60000)	37
第32図	周辺地域分布調査関連遺物実測図(1/3)	38
第33図	宇土郡三角町波多字陳の内出土蔵骨器実測図(1/4)	39

第34図	宝塔塔身実測図(1/20)	39
第35図	宝塔拓影(1/3)	40
第36図	台座実測図(1/20)	41
第37図	三日天満宮厨子形石造物実測図(1/20)	41
第38図	三日六地藏実測図(1/30)	43

目 次

第1表	各トレンチの概要	7
第2表	S B-01柱穴一覧表	10
第3表	土壙墓一覧表	18
第4表	出土遺物(瓦類)観察表	48
第5表	出土遺物(土師器)観察表	50
第6表	出土遺物(須恵器)観察表	50

第7表	出土遺物(揺鉢)観察表	52
第8表	出土遺物(火鉢)観察表	53
第9表	出土遺物(陶器)観察表	53
第10表	出土遺物(陶磁器)観察表	54
第11表	出土遺物(石製品)観察表	55
第12表	周辺地域分布調査関連遺物観察表	55

図 版 目 次

図版1	如来寺跡空中写真
図版2	5区全景
図版3上	S B-01
下	S B-01
図版4右	遺物出土状態
左	遺物出土状態
図版5	S B-01 P i t 群
図版6上	S B-02
下	土壙墓検出状態
図版7	S K-01、S K-02、S K-03
図版8	S K-04、S K-05、S K-06、S K-07
図版9	S K-08、S K-09、S K-10、S K-11
図版10	土壙墓埋土断面
図版11	T-7 トレンチ遺物出土状態、6区S K-12、S K-13、S K-12馬歯出土状態
図版12	出土遺物(瓦)
図版13	出土遺物(瓦類、土師器、須恵器)

図版14	出土遺物(須恵器、揺鉢、火鉢類)
図版15	出土遺物(陶磁器・石製品・鉄製品)
図版16(右上)	檜崎古墳
(右下)	鬼の窟古墳
(左上)	女夫塚古墳(男塚)
(左下)	女夫塚古墳(女塚)
図版17(左上)	宝塔
(右上)	台座
(左下)	三日天満宮厨子形石造物
(右下)	銘文
図版18(左上)	三日六地藏
(右上)	古保山六地藏龕部
(左下)	如来寺厨子形石造物
(右下)	三日板碑
図版19	周辺地域分布調査関連遺物
図版20	1 阿弥陀如来坐像(宇土市岩古曾町上古閑、如来寺所在)
2	釈迦如来坐像
3	薬師如来坐像

第 1 章 序 説

1. はじめに

昭和56年度から実施している宇土半島基部古墳群分布調査も、今年で3年目を迎えることになる。初年度は宇土市恵塚町字仮又に存する仮又古墳の墳丘確認調査を実施し、57年度は上綱田町字城に存する城古墳群の確認調査を行なった。その成果は既に『仮又古墳—宇土半島基部古墳群分布調査報告Ⅰ—』・『田平城跡—宇土半島基部古墳群分布調査報告Ⅱ—』としてそれぞれ報告済みである。

今年度の調査対象地である花園町付近には、櫛崎古墳（前方後円墳）・女夫塚古墳（前方後円墳・円墳）・鬼の窟古墳（円墳？）をはじめとして、通称「塚」や中世寺院址（如来寺・報恩寺）・中近世石造物などが存在する。この花園町三日地区の字中島・大門に農業構造改善事業に伴う区画整理が実施されることになり、その遺跡確認調査と試掘調査を実施した。

調査は、この付近一帯の分布調査と塚・寺院址の一部の発掘調査を実施し、併せて石造物調査も行なった。その成果は次節以下に示すとおりであるが、発掘では古墳時代に属する遺物は検出されたもののその時期の遺構は検出できなかった。しかし、中世寺院址の一部とみられる掘立柱建物址、中世末～近世前半に属するとみられる土壙墓群が検出でき、当地における中世遺構の実体の一部を明らかにすることができた。

2. 調査の経過

調査は、昭和58年5月2日に開始し、同年8月31日までの4ヶ月を費した。初日から5月8日まで調査予定地の踏査、調査器材等の搬入を行なう。5月9日からT-1トレンチの発掘作業を開始する。以後T-2、T-3、T-4トレンチの発掘を行なうが遺構の検出はない。この間、六地蔵の実測、蔵骨器出土地の踏査を行う。7月1日、T-5トレンチを設定し、掘り下げを行なう。後日、地山を掘り込んだ数個のピットを確認。7月14日から20日までT-6、T-7、T-8トレンチの発掘作業を行ない、25日からは、各トレンチで遺構を検出したものについて調査区を拡張する。8月2日からは5区の調査に主力をおく。10基の土壙墓、2棟の建物跡を検出する。8月22日から31日まで遺構の実測、写真撮影等を行ない発掘作業は無事終了した。また、3月13日から17日までは、寒風のなか周辺地域の分布調査を行なった。

調査は多方面より協力を得、無事に終わることができた。地元作業員の方々をはじめ、調査関係者に対し心から感謝の意を表したい。

3. 調査の組織 (順不同、敬称略)

調査主体 宇土市教育委員会 教 育 長 船田 至

社会教育課長 本郷 裕幸

文化振興係長 一 宗雄

文化振興係主事 高木 恭二 (調査担当—文献・周辺)

同 木下 洋介 (調査担当—発掘・周辺)

指導助言 北條暉幸 (産業医科大学教授)、井上正 (宇土市文化財保護審議委員)、佐藤峯南

松倉源雄 (大慈寺住職)、菩提哲哉 (如来寺住職)、錦井徳之 (報恩寺住職)

隈 昭志 (熊本県教育庁文化課)、村井真輝 (同)、河北 毅 (同)

藤本勇治 (三角町教育委員会)、小田原弘則 (松橋町教育委員会)

豊崎晃一 (城南町歴史民俗資料館)、清田純一 (同)

平山修一 (宇土市教育委員会)

調査協力 古城史雄、揚村浩之、河上正二、平木和子、八木稔、前田哲男

福田博之、谷口 茂、元松茂樹、橋本重信、中山景雄

松尾政義、上田晃子、上田キヨコ

木下俊恵、木下春千代、石村洋子、竹下真由美

曹洞宗務庁広報室、宇土市役所耕地課、大阪写真測量所、森下建設

(高木・木下)

第 2 章 立地と環境

1. はじめに

調査対象となった地区は、熊本平野と八代平野を遮るかのよう^{がんかいざん}に位置する雁回山（別名、木原山。標高 314.4 m）の南麓にあたる。行政上は熊本県宇土市に属し、花園町三日の字中島・大門・大曾に跨る。この花園町三日は宇土市の東端に位置し、南は下益城郡松橋町、東は同郡城南町、北は同郡富合町とそれぞれ接している。

雁回山は中世代末、白亜紀後期に属するもので礫岩を主体とし、泥岩・砂岩などを互層に含む。そのため、緩斜面地や山麓には礫岩などを含み赤褐色を帯びた土壌が堆積している。この山は、標高 100 m より以上になると急峻な崖となっているが、それより以下は傾斜も緩やかなスロープを保ちながら沖積平野に続く。

現在までのところこの南側斜面地の花園町三日地区において遺跡が確認されているのは標高 40m より低いところであり、この地区の現存集落（26～35m の範囲に限られる。）とほぼ重なることになる。この地域における遺跡については第 3 章 4 で詳しくふれているのでここではふれないこととし、やや視野を広げて雁回山を中心とした熊本平野南縁部と八代平野北端部に挟まれた地域から、宇土半島基部にかけての一带の地域の歴史的環境について述べることにする。

なお、当該地域において知られている遺跡はかなりの数にのぼるため、ここでは古墳時代から中世に限定してふれる。

2. 古墳時代

宇土半島基部一帯は、県下でも有数な前方後円墳の集中する地域でありその数は 12 基を数える。熊本県で確認されている前方後円墳の総数は約 60 基^(註 1)であり、その約 1/5 がこの地域に集中することになる。しかも、12 基のうちの 6 基（弁天山・スリバチ山・迫の上・城ノ越・向野田・御手水）が前期、2 基が中期、残りの 4 基が後期に属すると考えられる。前期前方後円墳の集中度からいえば、九州では有数な地域のひとつにあげられよう。

中期に 2 基（天神山・楯崎）という数はやや少なすぎる感があるが、この時期に属する円墳・石棺などはかなり知られている。しかも天神山古墳が全長 110m をはかる県下では最大級の前方後円墳でありながら、これにつづく楯崎古墳が全長 42m という極めて対照的なあり方を示すことからみても、前方後円墳造営に何らかの大きな変化があったのではないかと考えられる。

後期になると4基（国越・松橋大塚・仁王塚・女夫塚）になるが、この時期に属する円墳もかなりの数にのぼるのでその内容は必ずしも弱体化しているわけではない。この地域において前方後円墳が造られなくなるのは6世紀中葉～後半の頃であろうとみられ、仁王塚古墳や女夫塚古墳がそれに該当するであろう。

前方後円墳消滅後は巨石横穴式石室の円墳が造られるようになり、その中には玄室の内壁に線刻で船を描いたものがある。これは宇土半島基部の特に西側丘陵縁辺に特徴的な現象であり、その数は8基（梅崎・城塚・東畑・仮又・古城・塚原栗崎1号・桂原・桂原2号）にも及び、時期的には6世紀後半から7世紀前半にかけての頃と考えてよい。しかし、同時期の横穴式石室の中には必ずしも線刻が施されないものもあって、半島基部の東側丘陵部、即ち、雁回山側の地域には現在までのところ1例もみつかっていない。^(註2)

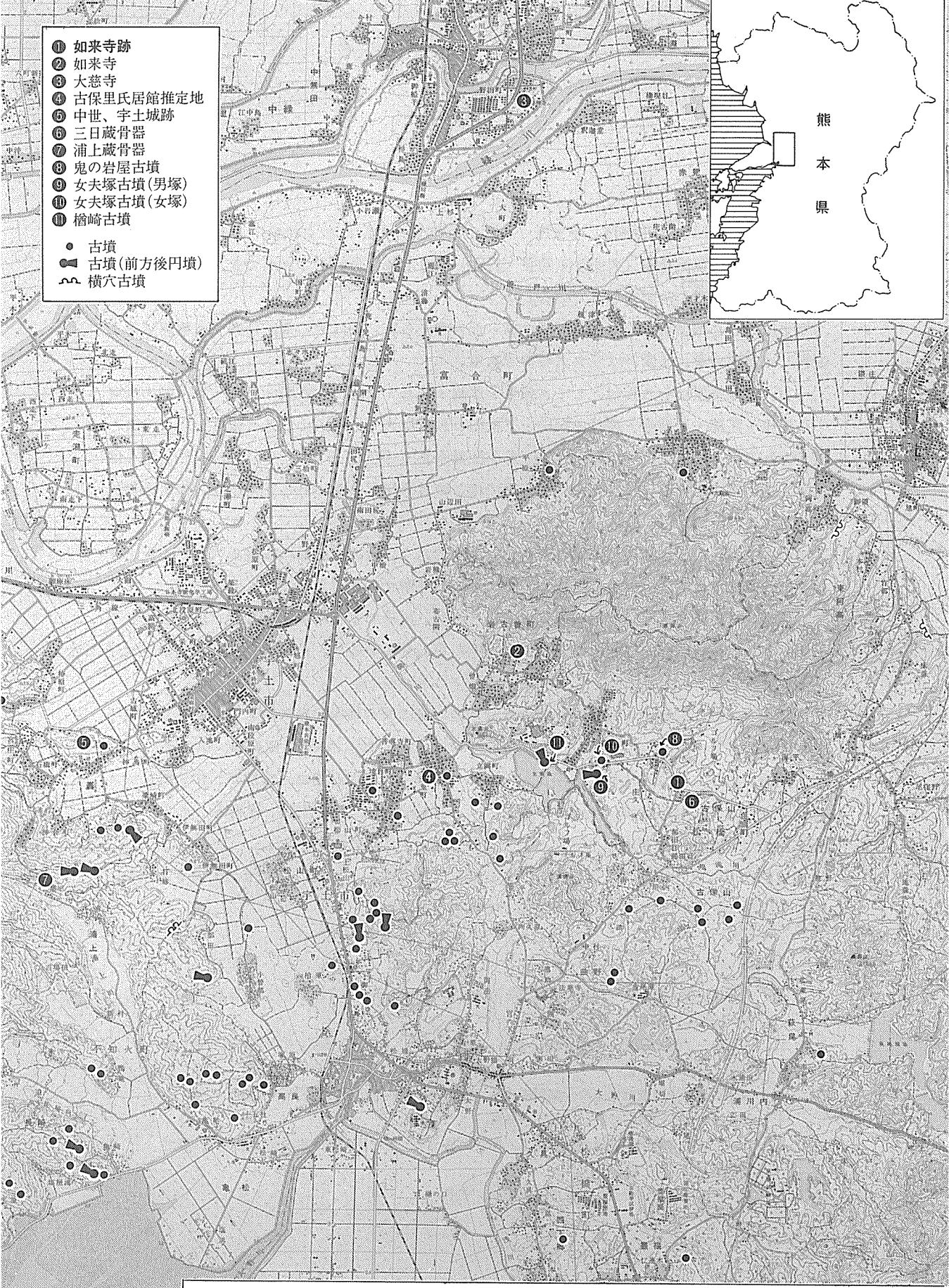
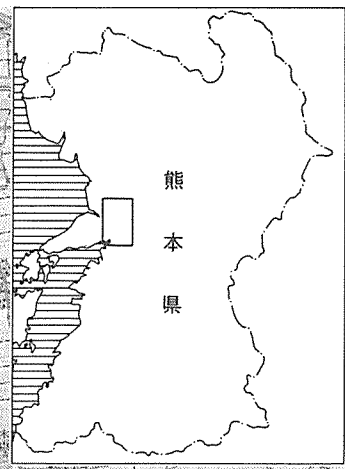
古墳時代における集落跡の調査は皆無であり、その実体は殆ど明らかになっていないが数箇所遺跡が知られている。そのうち、内容も豊で比較的長期に亘って集落が営まれていたと考えられるのは宇土城遺跡と境目遺跡の2箇所だけである。

3. 古 代

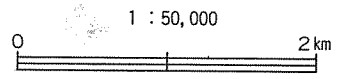
古墳時代にこの地域が有力であったことは否定すべくもないことであるが、それにつづく時代はあまり顕著でなかったようである。古墳時代末期の墓制となる横穴古墳は、この地域では殆どみられなくなり、飛鳥・白鳳期に属する瓦も未検出である。しかし、奈良時代の段階になると宇土市の東部から松橋町北部にかけての地域において、いくつかの特筆すべき遺物が確認されている。ちなみに、この松橋町北部は現在では下益城郡の一部となっており、既に中世段階において益城郡の豊田庄に包括されることになったところではあるが、古代においては宇土郡の一部であり、以下に述べる諸遺物も旧宇土郡の範囲内に含まれるものであったとみてよい。

宇土市境目町所在の境目西原遺跡からは奈良・平安時代に属する多量の土器等が検出され、その中に大理石製と思われる丸鞆が1点あった。しかも下益城郡松橋町の寺尾遺跡からは青銅製帯金具（鈔帯）^(註3)が出土し、これらが郡司などの官人が身につけるものであるだけに発見された意義は大きい。寺院址としては同じく松橋町古保山に古保山麿寺跡があり、そこには肥後国分寺（熊本市出水一丁目所在）創建時と同タイプの文様瓦が出土している。^(註4)しかし、宇土郡家の所在地、さらには宇土郡四郷（諫染・櫻井・林原・大宅）の比定も完全には明らかになっていない現状では、今後に期待せざるを得ないであろう。ただ、ここでとりあげた境目・寺尾・古保山の3遺跡が、いずれも旧宇土郡の東端に位置しているのは、当時のこの郡の中心地がこの付近に存在していたことを暗示しており、それが当時の官道に近い位置にあることと一致するのは偶然ではあるまい。

- ⑪ 如来寺跡
 - ⑫ 如来寺
 - ⑬ 大慈寺
 - ⑭ 古保里氏居館推定地
 - ⑮ 中世、宇土城跡
 - ⑯ 三日蔵骨器
 - ⑰ 浦上蔵骨器
 - ⑱ 鬼の岩屋古墳
 - ⑲ 女夫塚古墳(男塚)
 - ⑲ 女夫塚古墳(女塚)
 - ⑲ 檜崎古墳
- 古墳
 - ◐ 古墳(前方後円墳)
 - 〰 横穴古墳



第1図 位置図 (国土地理院発行の宇土・松橋) (1:25,000) を使用。



4. 中 世

中世前期における宇土郡は、宇土庄（承久3年初見—1221）と古保里庄（元亨元年 初見—1321）、それに郡浦社領（久安6年初見—1150）の3地域に分けることができ、その領村は既に『新撰事蹟通考』^(註5)に記載されている。

宇土庄の中心地は現在の宮庄町付近にあったと考えられ、城はその東に位置する西岡（第1図⑤）に比定でき、庄園神は三宮大明神である。

一方、古保里庄はその領村として古保里・立岡・三日・佐野・上古閑・曾畑・布古閑・松原・小松原・江部・善導寺・境目・松山・下松山の14村があり、その中心地は現在の古保里町と考えられる。そこには、土塁や空濠のような跡があり居館址と考えてもよからう（第1図④）。庄園神は松山の両神宮であり、伝承ではこの古保里町の東にある花園山を古保里氏の居城の跡というが定かではない。

この古保里庄の内に如来寺創建の地があったのであり、後世の記録に古保里村にあったとする見解は適当でなく、古保里庄内の一画にあったと理解すべきである。

古保里氏は、康元元年（1256）と文永6年（1269）にその存在が確認でき、古保里庄は元亨元年（1321）以降、延文5年（1360）まで文献に現われているが、正平11年（1356）に宇土庄地頭職宇土老岐守の領地となり、宇土氏の支配下におかれた。

寺院としては、如来寺・報恩寺が建立される地に既に天台系寺院が存在していたと思われるし、その他にも天台宗寺院として宇土郡には、神山に光園寺、神原に極楽寺、小曾部に妙法寺、松橋に地福寺、高良に極楽寺があったという。浄土宗では石橋に三宝院が、伊津野に西光院があった。禅曹洞宗は如来寺が最初であり、同じ系統をひく曹洞宗の報恩寺、宮庄に法泉寺、松原に西安寺、里浦に修月寺などが相次いで開かれている。^(註6)

宇土郡内ではないが、如来寺を開いた寒徹義尹は弘安元年（1278）に河尻で大慈寺を開き、そこが以後の肥後における曹洞宗寺院の一大拠点となった。

（高木）

註

1. 富樫卯三郎、平山修一、高木恭二「熊本県前方後円墳地名表」『肥後考古学会誌』創刊号、1981年、熊本。
2. 平山修一「仮又古墳—宇土半島基部古墳群分布調査報告1—」『宇土市埋蔵文化財調査報告書』第6集、1982年、宇土。
3. 高谷和生「寺尾遺跡出土の青銅製帯金具」『肥後考古』第2号、1982年、熊本。
4. 松本雅明ほか『城南町史』1965年、城南。
5. 八木田政名『新撰事蹟通考』卷之二、郷荘沿革（下、『肥後文献叢書』第三卷所収、歴史図書社、1910年、東京。）
6. 井上正ほか『宇土市史』宇土市、1960年、宇土。

第 3 章 調査の記録

1. 調査地区

今回の如来寺跡の調査は、寺院の中心と推定される地域の周辺 9 箇所にトレンチを設定し発掘を行い各トレンチで遺構が認められたものについては必要に応じて拡張した。遺構の確認及び拡張したトレンチは T-5、T-6 トレンチでそれぞれ調査地を 5 区、6 区とした。5 区では掘立柱建物跡 2 棟、土墳墓 10 基を検出、6 区では土墳墓 2 基を検出、うち 1 基には馬歯が遺存していた。

また、その他のトレンチについては、田畑の開墾時にすでに地山まで削られているものと思われ、遺構らしきものの検出はなかった。

各トレンチの概要については、第 1 表に示すとおりである。

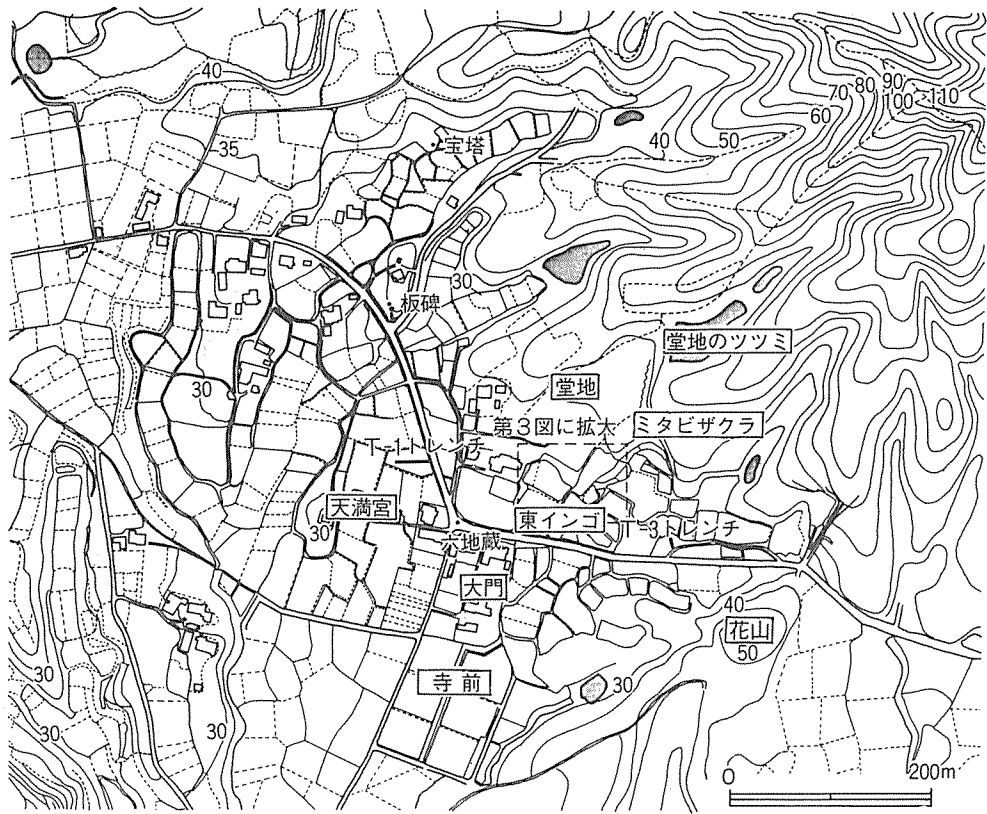
調査地	所在地	概 要	遺 物
T-1	宇土市花園町三日 字中島 2323	現況は水田。耕作土をはぐとトレンチの東側から中央にかけてはすぐ地山に達する。西側では、耕作土と地山の間に遺物を含む層があったが遺構の検出はなかった。	須恵器
T-2	〃 字大門 2463	調査前は水田耕作も行なわれていたようで、トレンチの西側崖面近くはかなりの湿地である。開田時に地山まで削られたものと思われ、耕作土をはぐとすぐ荒れた地山面に達した。	
T-3	〃 字大門 2444	地元民から塚（ツカ）と呼ばれていたが、その存在を示すものはなかった。	
T-4	〃 字中島 2382	近世以降の通路と思われる掘り込みを確認。	瓦・瓦質土器・砥石
T-5 (5 区)	〃 字大門 2479	掘立柱建物跡 2、土墳墓 10 基を検出。	土師器・須恵器・瓦質土器・瓦・青磁・鉄製金具
T-6 (6 区)	〃 字大門 2483	土墳墓 2 基を検出。	
T-7	〃 字中島 2371	水田の南側法面に火鉢が立った状態で検出された。東西に長く延びたトレンチでは遺構・遺物の検出はなかった。	火鉢
T-8	〃 字中島 2361	遺構の検出はなかった。	須恵器
T-9	〃 字中島 2361	湧水がはげしく遺構の検出は出来なかった。	

第 1 表 各トレンチの概要

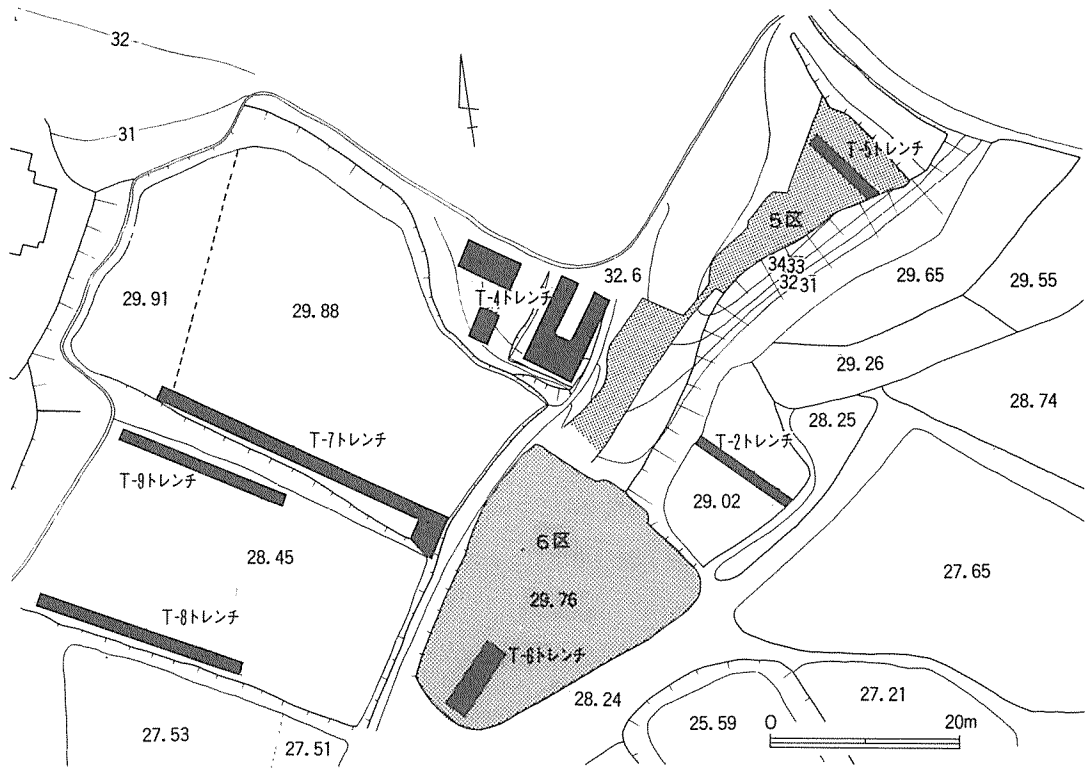
2. 遺 構

5 区

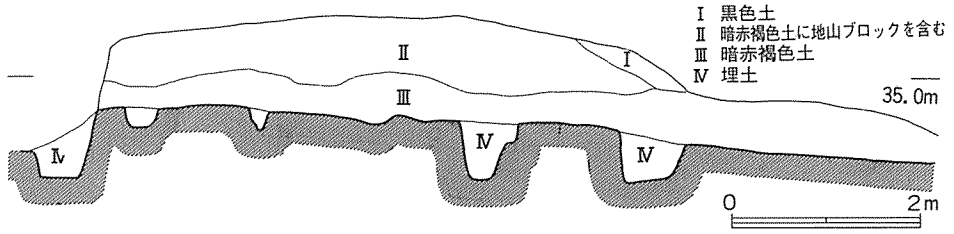
調査地は、寺院の中心と推定される地域の東側に位置する。調査区の周囲は削られており、2 m 程盛り上がった地形を呈していた。トレンチ設定の起因となった寺院に伴う土塁の存在



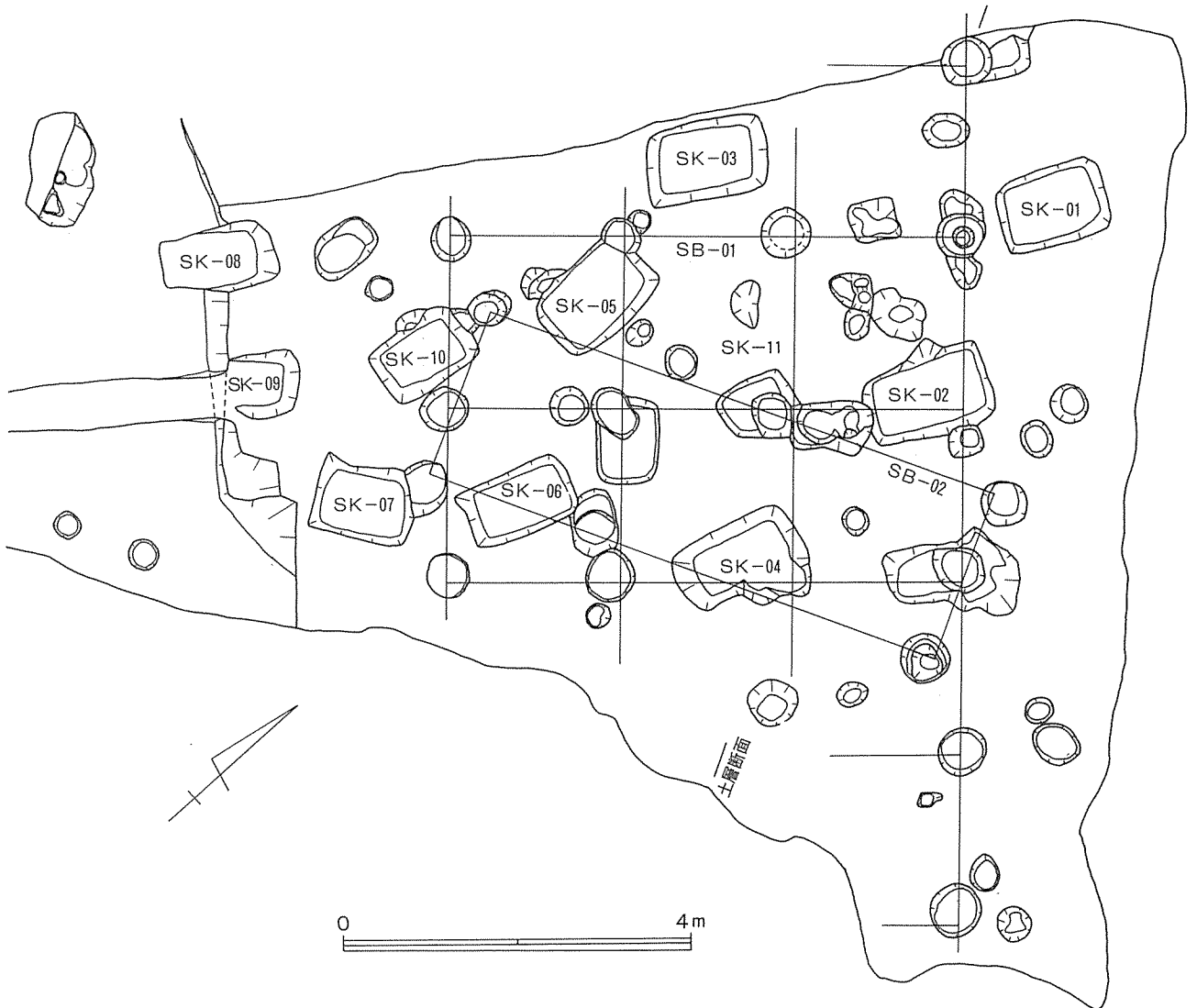
第 2 図 トレンチ配置図① (1/7500)



第 3 図 トレンチ配置図② (1/800)



第 4 図 T-5 トレンチ土層断面図 (1/80)



第 5 図 5区遺構配置図 (1/80)

は、調査区西側の削られた面での土層観察の所見より考えられていた。そのためT-5トレンチは、直交する東西方向に長さ9m、幅1mの大きさで設定し、さらに詳しい土層の観察を行なった。土層断面の層序は、上からI表土層（黒色土）、II盛土層（暗赤褐色土に地山ブロックを含む）、III旧表土層（暗赤褐色土）、地山、の順になっていてII層の盛土については、調査区西側の開墾削平時に排土として盛り上げられていたことが判った。また、地山面で遺構の存在を確認したので全域を拡張し調査を行なった。検出した遺構は以下のとおりである。

掘立柱建物跡

調査区の全域にピットが検出され、土墳墓との切り合いによって半壊、消滅しているのがあるが2棟を復することが出来た。

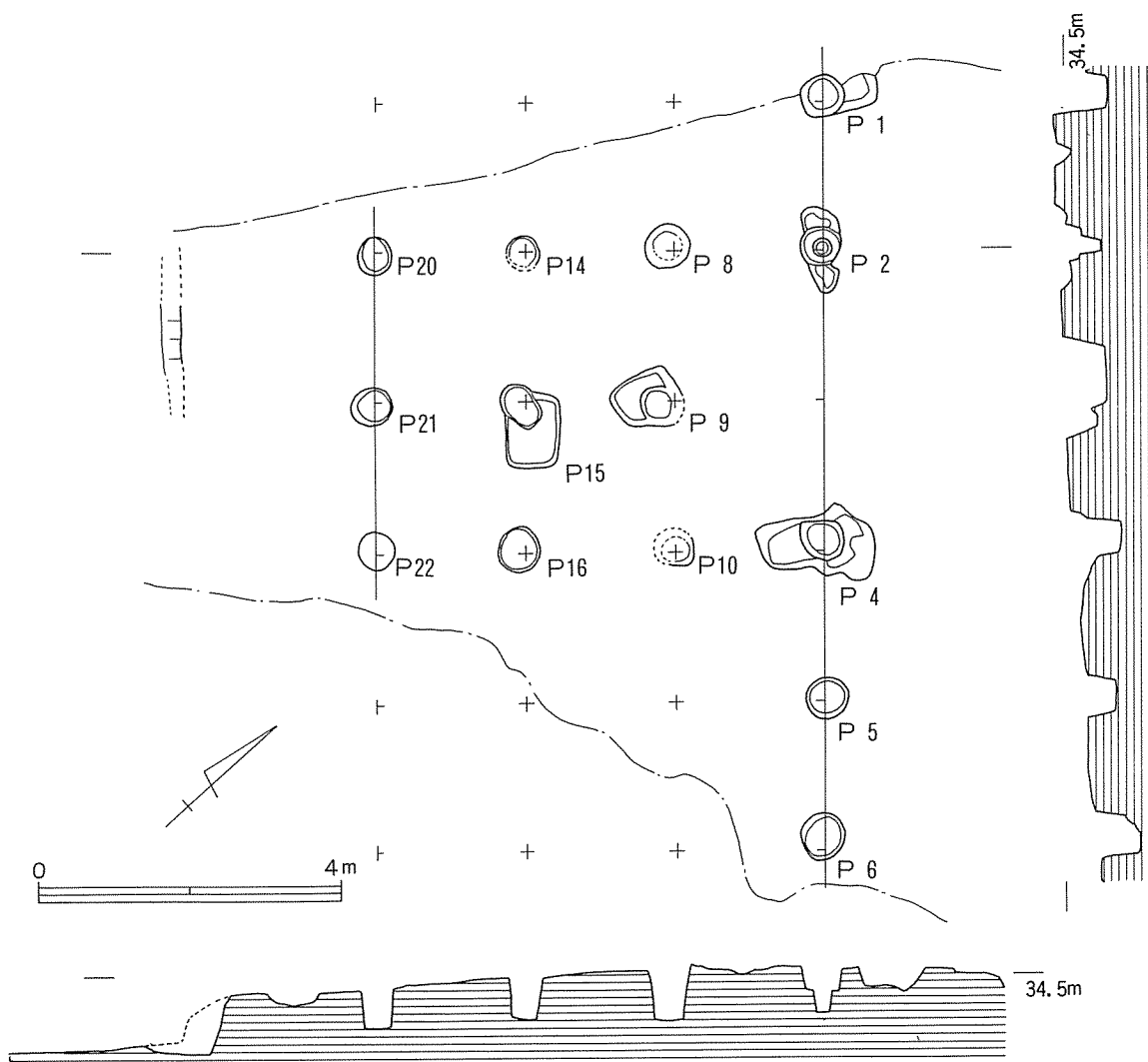
1号掘立柱建物跡（SB-01）（第6図）

SB-01は発掘区の全域に広がり、主軸をN-42°-Wに向ける総柱の建物である。桁行は両側を削平されているので限定されるが調査区内で5間を確認。9.92mを測る。また梁行は3間5.94mを測り、柱は1間が約2mの方眼に規則正しく並ぶ。検出した13個の柱穴はすべて円形で直径45~63cm、深さ36~73cmを測る。P1、P2、P4、P9、P15には主軸方向あるいは直角の位置に長方形や不整形の掘り込みが付く。

また、柱穴群の南にはSK-08、09に切られた高さ約70cmほどの段差が桁行と平行な位置にあり、削り出しの基壇の存在が考えられる。基壇状の法面下からは、地山面から少し浮いた状態で瓦片、磚（第17図-13）、土師器皿（第18図-25）が出土。P8の埋土上面からは、磚（第17図-15）、土師器皿（第18図-22、23）が出土した。

P-1 58 39 73 33.92 北側に掘り込み	P-2 59(25)47(21) 63 33.98 東西に掘り込み	P-3 ----- 33.94+α SK-02に切られ消滅	P-4 54 46 62 33.79 不整形な掘り込み	P-5 58 48 39 33.82	P-6 63 53 57 33.53 出土遺物土師器片
	P-8 61 40 66 33.88 出土遺物15・22・23	P-9 46 40 50 33.97 西側に掘り込み	P-10 ----- 40 33.87 大部分をSK-04に切られている	P-11 確認出来ず	
	P-14 46 40 56 33.90 部SK-05に切られる	P-15 45 31 58 33.82 東側に長方形の掘り込み	P-16 63 55 51 33.85 出土遺物31		
	P-20 52 46 43 33.90	P-21 57 45 47 33.85 出土遺物土師器片	P-22 51 47 36 33.84 出土遺物鉄釘		
					Pit番号 長径・短径 cm 深さ cm 底面標高 m 備考

第2表 SB-01柱穴一覧表



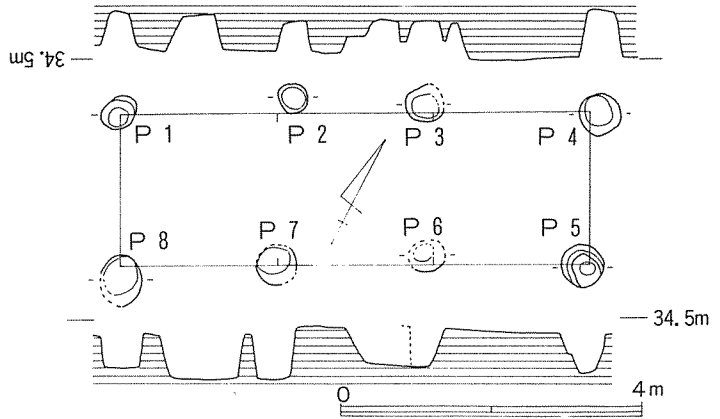
第 6 図 SB-01実測図 (1/100)

2号掘立柱建物跡(SB-02) (第7図)

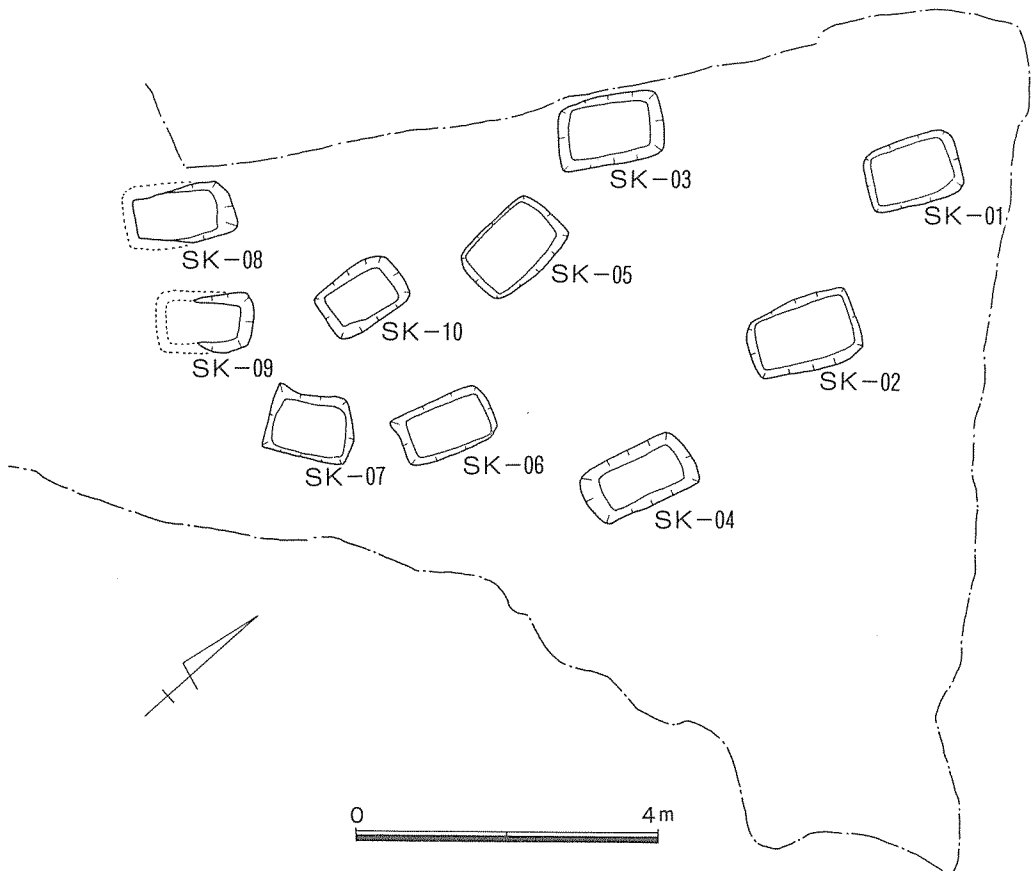
SB-02は、SB-01を斜に切る。3間×1間の建物跡である。主軸の方向はN-64°-Eにとり桁行6.22m、梁行2.04m、1間約2.05mである。検出した8個の柱穴はすべて円形で直径44~70cm、深さ38~63cmを測る。柱穴の並びは不規則である。

土壙墓群 (第8図)

5区では、土壙墓が10基検出された。検出された土壙墓は3号が木棺をもつが、他は素掘りの土壙墓であった。



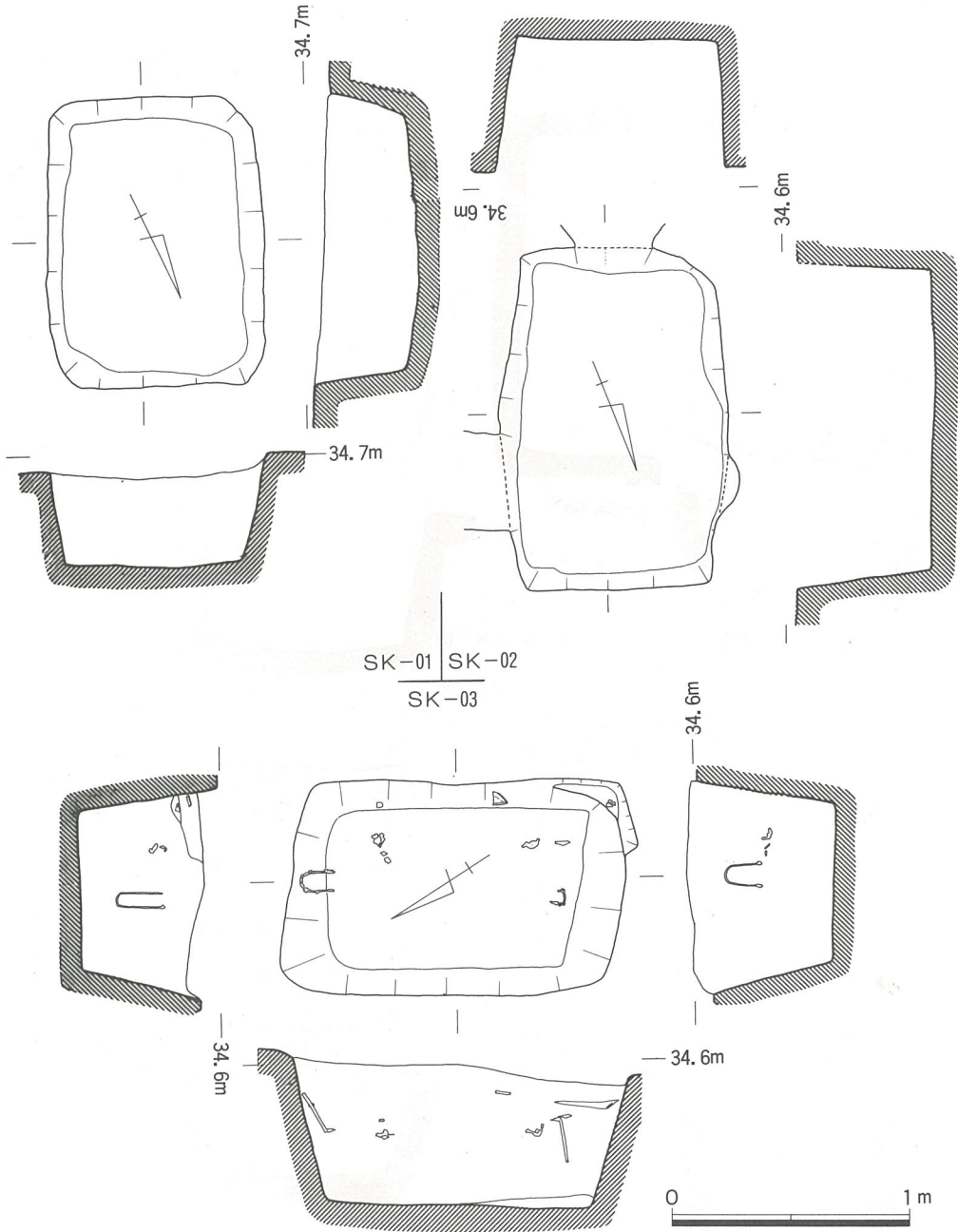
第7図 SB-02実測図 (1/100)



第8図 土壙墓配置図 (1/100)

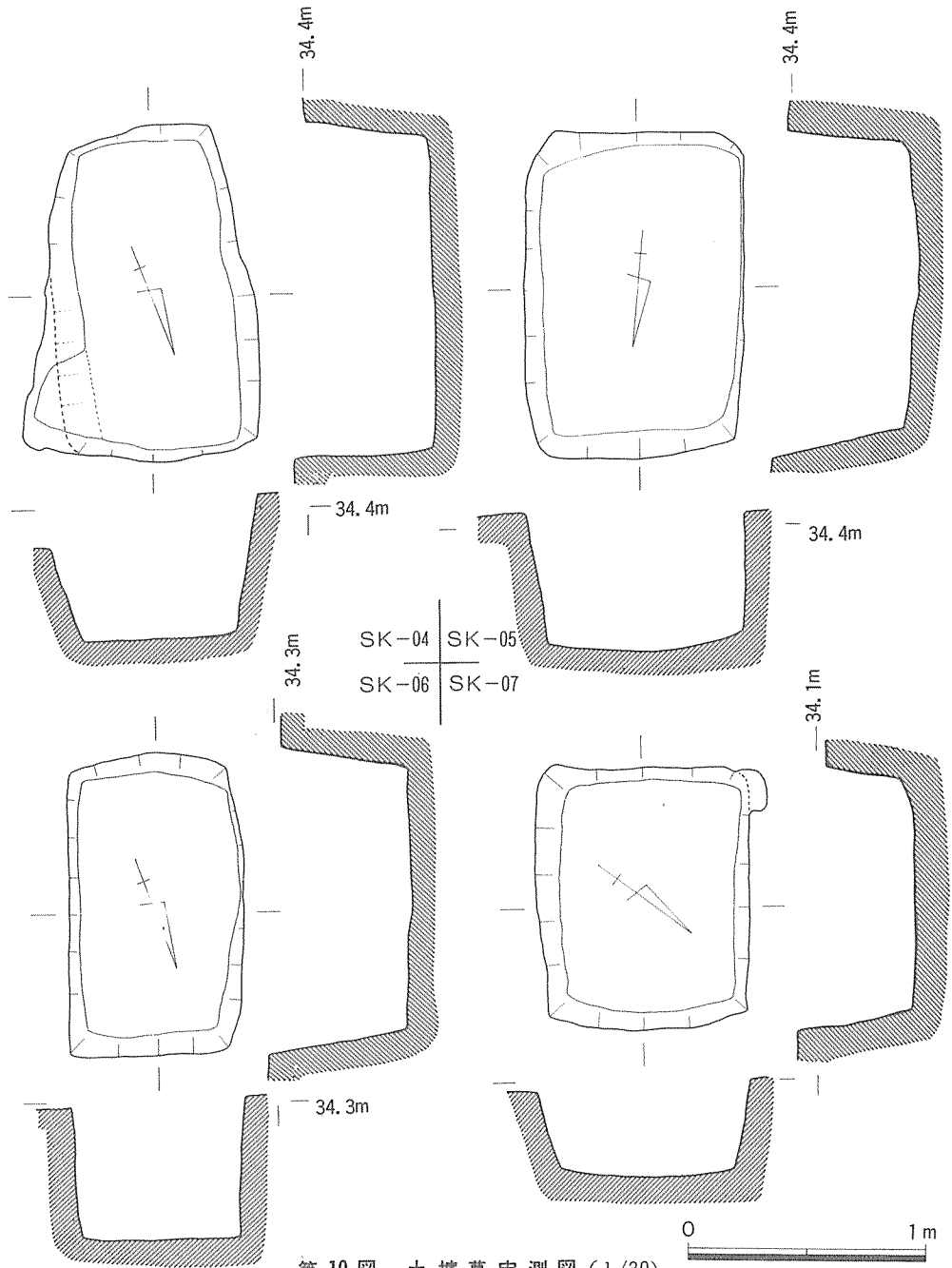
1号土墳墓 (SK-01) (第9図)

SK-01は、調査区内で最も北側に位置するものである。主軸を $N-25^{\circ}-E$ に向けた長さ 123cm 、幅 91cm 、深さ 46cm の大きさの隅丸長方形をしている。土墳内の床面は、ほぼ平坦であ



第9図 土墳墓実測図 (1/30)

り、壁面は垂直に近くなっている。土壙墓の埋土（第12図）は、床面に北側で厚さ約17cmを測る暗赤褐色土が南にうすく広がっていて、上層は、埋葬時に埋戻されたと思われる赤褐色土に地山ブロックを含んだ土で土壙内が完全に埋っている。



第10図 土壙墓実測図(1/30)

2号土壙墓 (SK-02) (第9図)

SK-02はSK-01の南に位置するものである。土壙墓は主軸をN-21°-Eに向け、長さ137cm、幅96cm、深さ56cmを測り、長方形を呈する。土壙内の床面は水平で平坦である。壁面は、垂直に掘り込んでいる。SB-01のP3を完全に切っている。SK-04、06と平行な位置関係にある。床からは瓦片が出土した。

埋土(第12図)の南側は樹根等により不規則になっているが、基本的にはSK-01同様北側から暗赤褐色土が流れ込み、上層に含まれる地山ブロックの形状によって3層に分けた。しかし基本的には一層とみなすことができよう。

3号土壙墓 (SK-03) (第9図)

SK-03は、調査区の西側に位置するもので、木棺を埋納する土壙墓である。主軸をN-32°-Eに向けた長さ141cm、幅89cm、深さ58cmの大きさで平面形は長方形を呈する。床面は平坦で壁は垂直に近く掘られている。土壙内には木棺の存在を示す木片の付着した鉄製金具が出土した。金具の位置から木棺の大きさを推定すれば長さ97cm、幅約40cm、高さ35~40cm程度と考えられる。木板の組合せ方向は判らないが、身と上蓋の開閉には2箇所に蝶番金具を付け、身の小口にはU字形の金具、隅にはL字型の薄い金具を角釘で留めている。

人骨の痕跡を検出することはできなかったが木棺の大きさから成人の屈葬と推定できよう。

4号土壙墓 (SK-04) (第10図)

SK-04は、土壙墓群の最も東よりにあり、土壙墓は主軸をN-21°-Eに向けた長さ141cm、幅86cm、深さ60cmの大きさの長方形を呈する。床面は平坦であり、壁は垂直に近い。

SK-02、06と平行である。樹根が土壙内いっばいに広がっており埋土の状態は不明である。

5号土壙墓 (SK-05) (第10図)

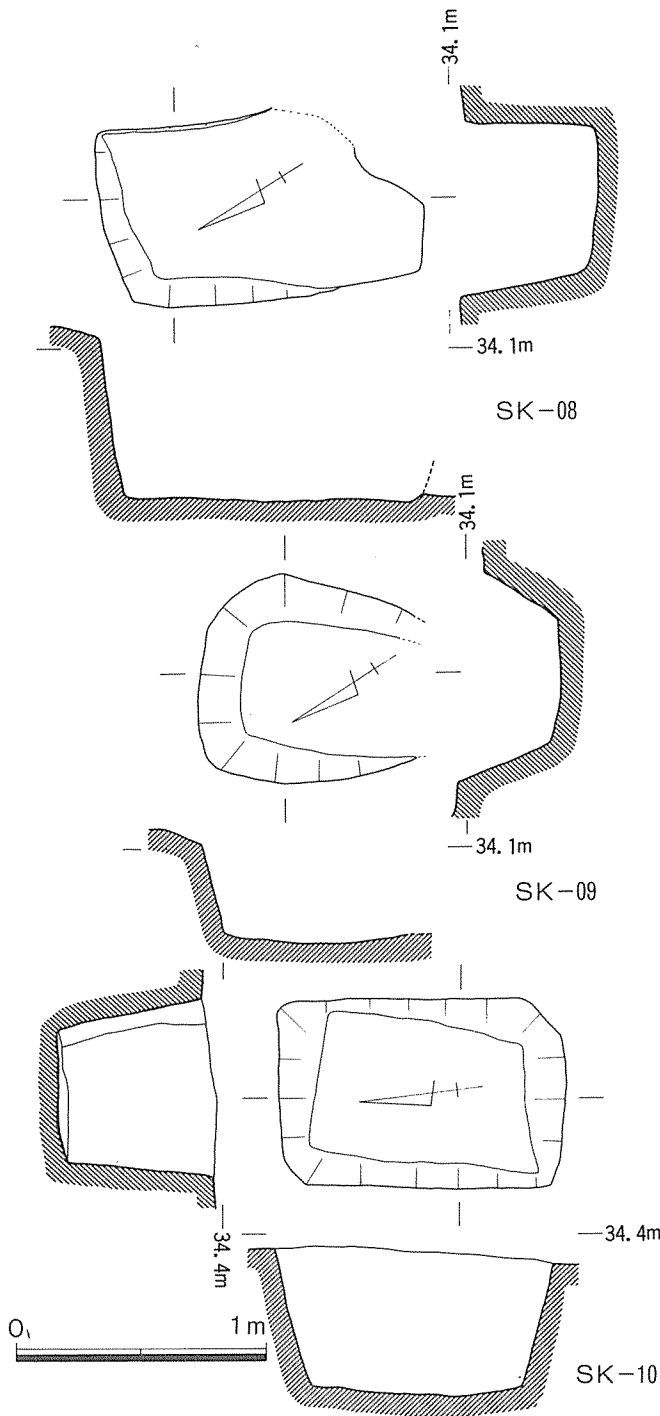
SK-05は、土壙墓群の中央に位置する。主軸をN-6°-Wにとる土壙墓でほぼ隅丸長方形のプランを呈する。長さ138cm、幅92cm、深さ58cmを測る。土壙墓中主軸が最も西に傾いている。

埋土(第12図)は南北両側から地山土が急傾斜で流れ込んでおり、中央部分には暗褐色土に地山ブロックを含む埋土が覆っている。土層断面の観察から木棺の可能性も残る。

6号土壙墓 (SK-06) (第10図)

SK-06は土壙墓群の東よりに位置するものである。土壙墓は主軸をN-20°-Eにとり、プランは長方形を呈する。床面はほぼ平坦で壁はほとんど垂直である。

埋土(第12図)の下層は、暗赤褐色土に地山ブロックを含んだ層、上層は暗赤褐色土である。北側床面近くには、頭骨と思われる骨粉としまりのない部分があるので頭位は北と推定される。



第 11 図 土墳墓実測図 (1/30)

7号土墳墓 (SK-07) (第10図)

SK-07は、SK-06の南に隣接する。土墳は主軸をN-53°-Eに向けた長さ111cm、幅30cm、深さ48cmを測る。プランは、正方形に近い長方形を呈しており、床面は平坦で壁は垂直に近く掘られている。

埋土(第12図)は砂粒混りの暗褐色土が南側から流れ込み、つぎに暗赤褐色土に地山ブロックを含んだ層が北側から流れ込んでいる。さらに上層には、暗赤褐色土、暗褐色土が堆積している。

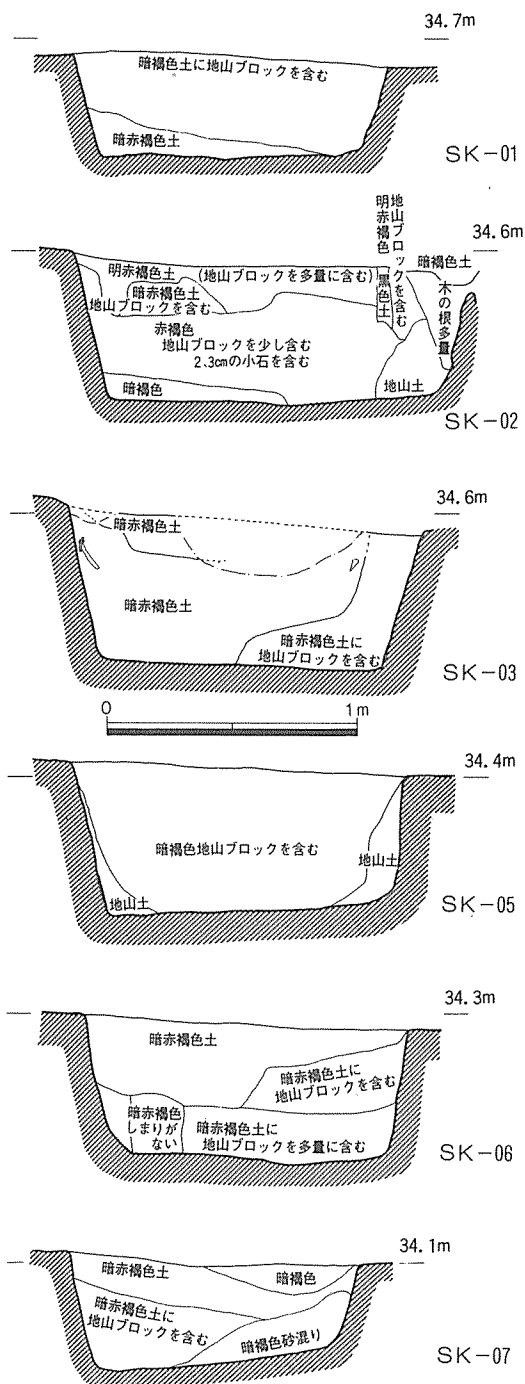
SK-06同様、北側には頭位を示す骨粉と人頭大のしまりのない部分を確認出来た。

8号土墳墓 (SK-08) (第11図)

SK-08は、調査区の南に位置するものである。土墳墓は主軸をN-32°-Eに向けた長さ140cm、幅70cm、深さ65cmの大きさの狭長な長方形を呈する。床面は平坦で水平。壁は、ほとんど垂直に掘り込んでいる。SK-03、09と平行である。

9号土墳墓 (SK-09) (第11図)

SK-09は、SK-08に平行し、主軸はN-32°-Eに向けている。プランは隅丸長方形を呈している。検出面の地山に掘り込まれた部分が少ないので大きさは明らかではなく、幅は84cm、深さ38cm+αを測る。壁は斜に掘り込んでいる。



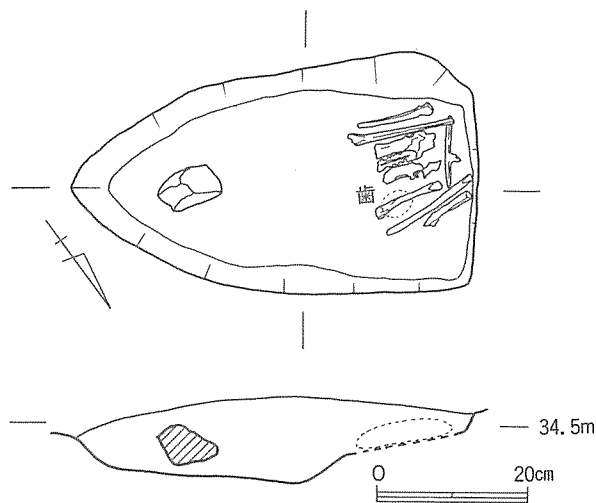
第 12 図 土墳墓土層断面図 (1/30)

10号土墳墓 (SK-10) (第11図)

SK-10は、SK-05~09に囲まれている。主軸はN-7°-Eに向け、長さ115cm、幅71cm、深さ61cmを測る。平面プランは長方形を呈するが床面の形はやや歪んでいる。床は平坦であり、壁はやや斜に掘り込んでいる。

11号土墳墓 (SK-11) (第13図)

SK-03の東側に、舟形に浅く掘られた土壇がある。長径54cm短径32cmを測る。北側に中型動物と思われる骨格が遺存する。



第 13 図 SK-11 獣骨出土状態実測図 (1/10)

土 壙 名	平 面 形	長 さ cm	幅 cm	深 さ cm	床面の長さ cm	床面幅 cm	主軸の方向	遺 物
SK-01	隅丸長方形	123	91	46	106	74	N-25°-E	
SK-02	長 方 形	137	96	56	125	85	N-21°-E	瓦 片
SK-03	長 方 形	141	89	58	110	66	N-32°-E	鉄製金具
SK-04	長 方 形	141	86	60	130	63	N-21°-E	
SK-05	隅丸長方形	138	92	58	120	82	N-6°-W	
SK-06	長 方 形	128	73	59	109	66	N-20°-E	
SK-07	長 方 形	111	90	48	97	71	N-53°-E	
SK-08	長 方 形	140	70	65	115	58	N-32°-E	
SK-09	隅丸長方形	88 + α	84	38 + α	—	50	N-32°-E	
SK-10	長 方 形	115	71	61	84	52	N-7°-E	

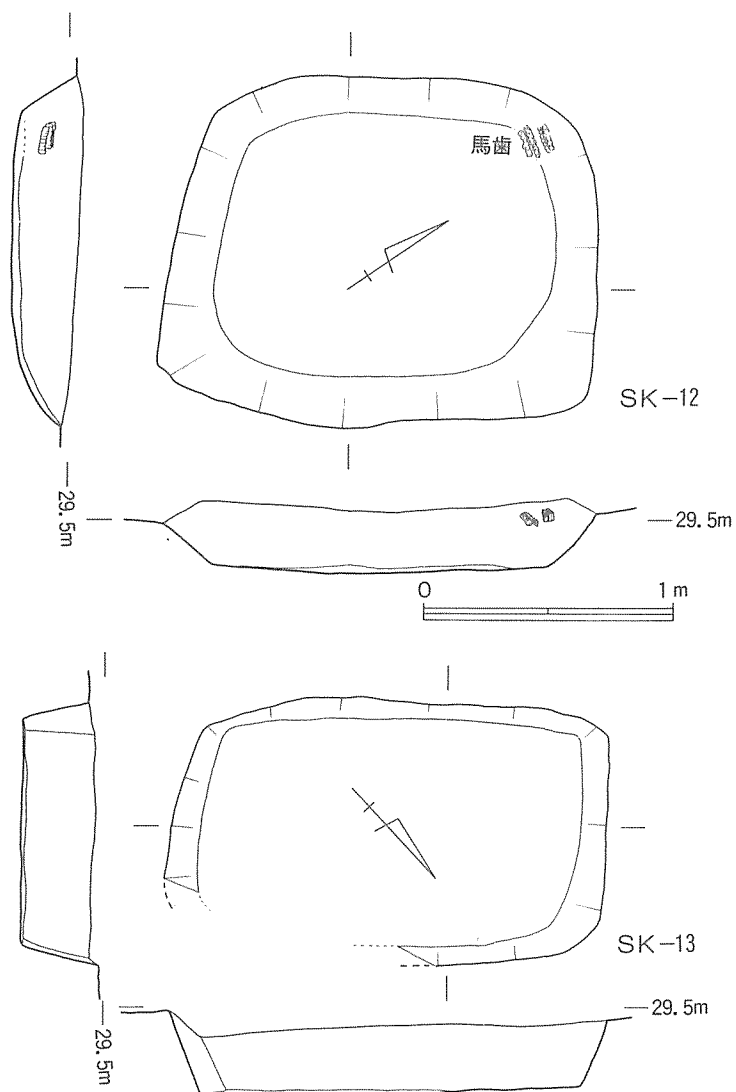
第 3 表 土 壙 墓 一 覧 表

6 区

巾2 m、長さ7 mのトレンチを設定したところ2基の土壙墓が検出されたので、ほぼ全域を調査対象地とした。

12号土壙墓（SK-12）（第14図）

SK-12は、SK-13の北に位置するものである。主軸をN-34°-Eに向けた長さ172cm、幅141cm、深さ29cmの大きさの隅丸長方形を呈する。土壙内の床面は皿状に掘られている。土



第14図 6区検出土壙墓実測図（1/30）

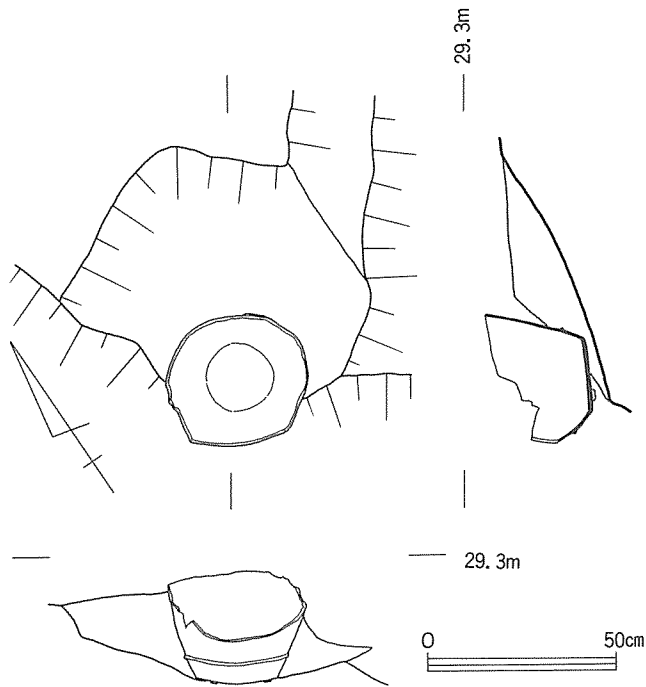
墳の北側隅には馬歯が検出された。

13号土墳墓（SK-13）（第14図）

T-6 トレンチの断面に掘り込みを確認したのでその一部を欠く、SK-13は、主軸をN-42°-Wに向け、長さ174cm、幅104cm、深さ32cmを測る。プランは長方形を呈する。床面は水平で平坦。壁面は、やや斜めに直線的に掘られている。主軸は、SK-12と直角の位置にある。

T-7 トレンチ（第15図）

水田2枚の境界崖面に火舎が立った状態で出土した。草根等により土層の観察は出来なかったが近くまで攪乱を受けているようで近世陶磁器が出土している。火舎そのものは中世のものと考えられるが後世に何らかの形で今の状態になった可能性が強い。



第15図 T-7 トレンチ遺物出土状態実測図（1/20）

小 結

SB-01について

はじめに瓦の使用について考えてみたい。SB-01に伴ない数点の瓦が出土したが、柱穴は素掘りで、瓦の出土量も少ないので、本遺構の上屋根が瓦葺とは考えにくく、他の建物（寺院

の中心部の建物)からの流れ込みとするのが妥当であろう。

如来寺の伽藍は調査区西側の字中島2372番地を中心に施されていたものと考えられ、SB-01は、その最も東側にあり、現地形で想定できる伽藍中心線に対して直交する位置にある。

史料には如来寺の具体的な伽藍配置を示す記録がないが、「國郡一統志」「肥後國誌」のなかに、七堂伽藍大成と表わされており、寺院としての各建物が成立していたと考えられる。禅宗では、各建物の名称は山門、仏殿、東司、西浄、僧堂、庫裡、方丈などと呼ばれ、その配置には一応の規則性がある。山門を入ると右側の回廊は中途から北折し庫裡に接し、さらに回廊は西折し仏殿に至るが、SB-01は庫裡から仏殿に至る回廊周辺に位置するものと想定できる。

調査では桁行の両方向は削平されており検出することができなかったがさらに延びることも考えられるので平面プランからみれば回廊の一部であった可能性がある。また、基礎や屋根の状態からは、回廊に平行な位置にある雑舎と考えられる。

土壙墓群について

5区検出の10基の土壙墓は、調査区の西側がすでに削平されており土壙墓全体の広がりを知ることが出来ないが、群の東側を形成するものであろう。

各土壙墓に規則正しい方向性は認められないが、平面形は基本的に長方形を呈するものである。法量についてもさほど大きなちがいはない。また、たがいに切り合うこともなく、ある程度の距離を保っているなどこの土壙墓群はある時期の短い期間に造営されたものであることが推察出来る。

ところで年代のきめてとなる副葬品の出土がなく、SK-03から木棺に付けた金具が出土しているが、今のところ類例を知らず年代決定要素に欠ける。またSK-02埋土中から瓦片が出土しているので大まかな上限を如来寺移転後に、下限を、この付近で墓標が一般化する江戸時代前半頃と考えることができる。

3. 遺物

瓦類 (第16・17図、第4表、図版12・13)

今回の調査時に出土及び表採した瓦の総数は71点になる。その出土地点はT-4トレンチ、5区、字中島2372番採集と分けられるが、大きくみると寺院の中心と推定される地域に集中していることが判る。

如来寺に関する瓦の種類は、平瓦、丸瓦、伏間瓦、塼がある。その他の瓦として取り上げた目板瓦、軒平瓦は近世以降のものと考えられるので別項目とした。

平瓦 (1・2)

平瓦の24点はそのほとんどが破片であるため長さ、幅の明確なものはなく、法量については厚みが1.4~2.2cmとかなりのバラツキがあることが判る。成形、調整方法はすべてに共通している。弧深は1.7~2.0cmを測り浅くはなく、側縁は垂直に切り落としている。糸切り痕は認められない。両面に離れ砂がわずかに付着する。凹面はていねいなナデを施し円滑に仕上げている。また凸面は荒く部分的に板ナデが施されているものもある。胎土は精緻であるが石英微砂粒を多く含んでいる。焼成は不良で土師質に近く、須恵質は一点もない。色調は灰白色、浅黄燈色系を示す。

丸瓦 (3~10)

総個体数26点を数える。すべてが破片で長さ、幅は明確ではないが、成形手法等により2種に分けられる。

I類(3~6)丸瓦の大部分をしめる。筒部の厚さは1.9~2.3cm、推定径13cm、玉縁長5cmを測る。凸面は、縄目タタキの後、縦方向の板状ナデで全面の調整を施している。凹面は細かい布目痕を残し、側辺には1.8~2.4cmの深い面取りを行ない、先端部にも深い面取りを施している。胎土は緻密で白色砂を含む、焼成の良好なものは灰色・青灰色をなし、不良なものは灰白色、黄橙色を呈する。

II類(7~10)ごく小さな破片である。成形手法の特徴は、先端・側辺が直角に切られており、面取りは施されていない。凸面は格子目タタキ痕を残すものやていねいなナデを施すものもある。凹面においてもていねいなナデ又は板ナデを施す。胎土は、緻密で、焼成は須恵質である。色調は灰色系を呈する。厚さはやや薄く、1.5~2.1cmを測る。

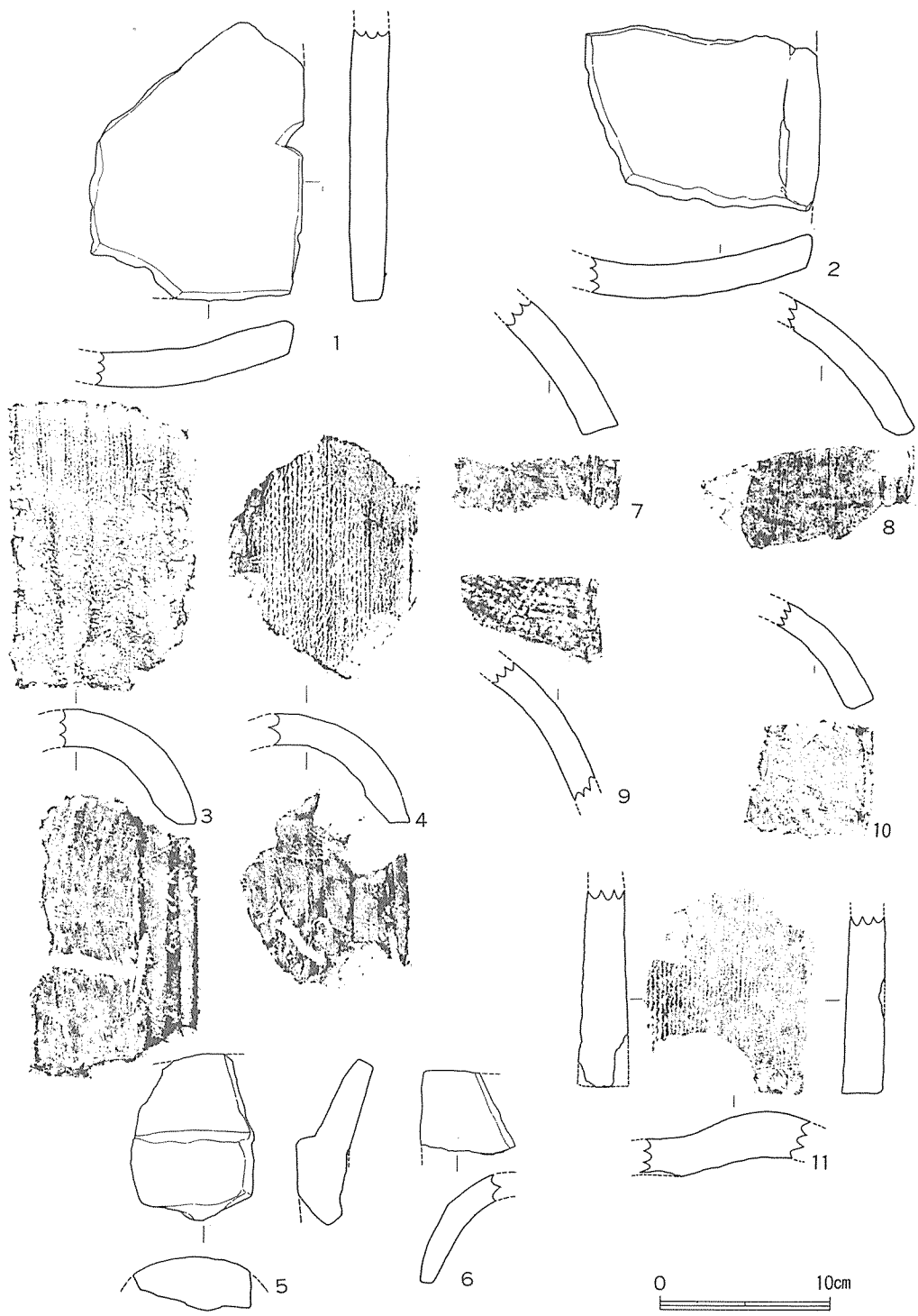
以上、丸瓦については2種類に分け、さらに細分することも可能と考えられるが、資料数が少ないので今回はこれ以上の分類は行なわなかった。

伏間瓦 (11)

1点のみの出土である。丸瓦の両側に平瓦部を接合させた型をなす伏間瓦の部分である。平瓦部の厚さは2.2cm、丸瓦部は2.4cmを測り、丸瓦部から平瓦部にかけてはなめらかに変位している。側辺にヘラによって丁寧な面取りが施されている。平瓦部には細かな布目痕、丸瓦部には縄目タタキ痕が残る。裏面の調整は施されず離れ砂が付着している。色調は、にぶい橙を呈する。焼成は土師質である。

塼 (12~16)

総数5個を数える。これらはいずれも破片で完形品は1点もなく、全体の大きさは不明である。塼は焼成、厚さからみて、2種に分けられる。



第 16 图 出土遺物実測図(瓦類) (1/4)

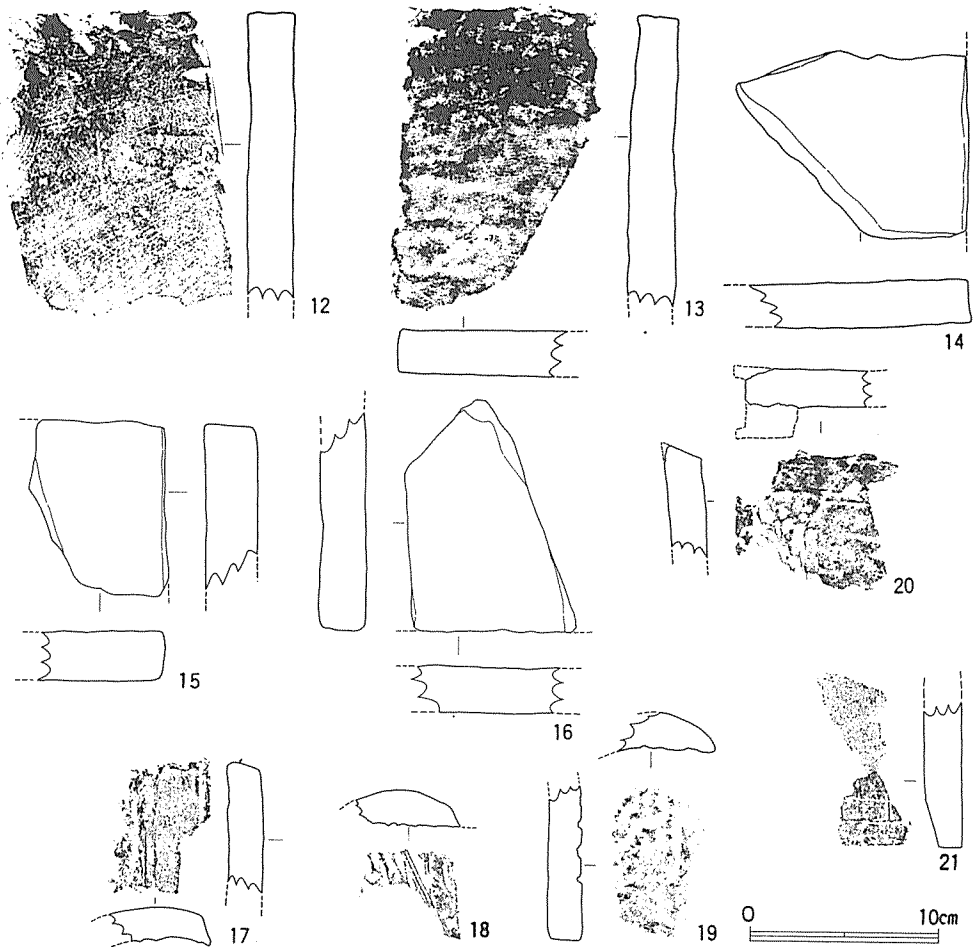
I類 (12・13) 厚さ2.2cm・2.3cmを測り、色調はにぶい黄橙色系である。磚の側辺は直角に切り落とし断面は長方形を呈すると考えられる。また、表面には糸切りの痕跡が残り、裏面はナデ調整を施している。II類に比較すると硬質で重い。

II類 (14~16) I類に比較し、焼成があまりよくなく器面が荒れている。色調は、オリブ黒色系をなし、厚さは2.4~2.6cmを測り厚手である。

その他の瓦 (17~21)

近世以降の瓦と考えられるもので、17~19は目板瓦の丸瓦状の部分で貼付のための刺突を残す。20は表面が黒灰色を呈するいぶし瓦である。

(木下)

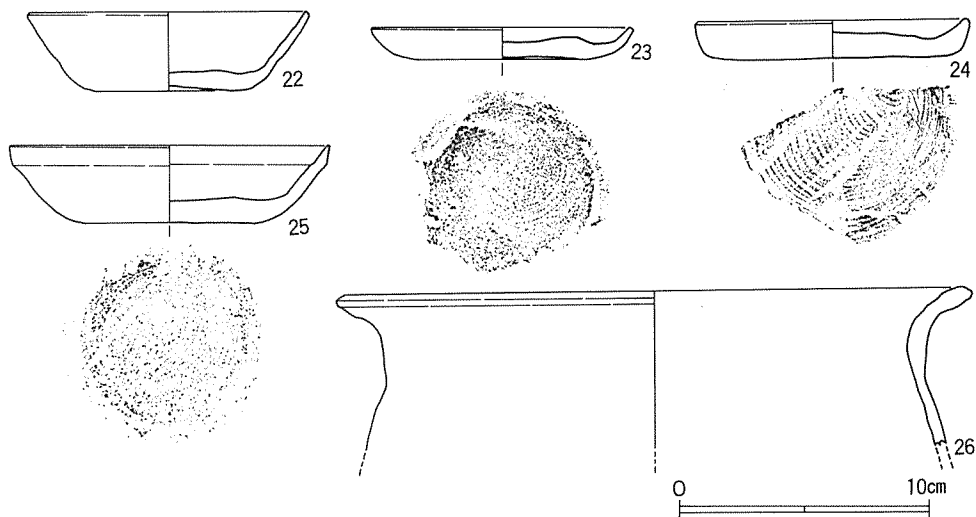


第 17 図 出土遺物実測図 (瓦類) (1 / 4)

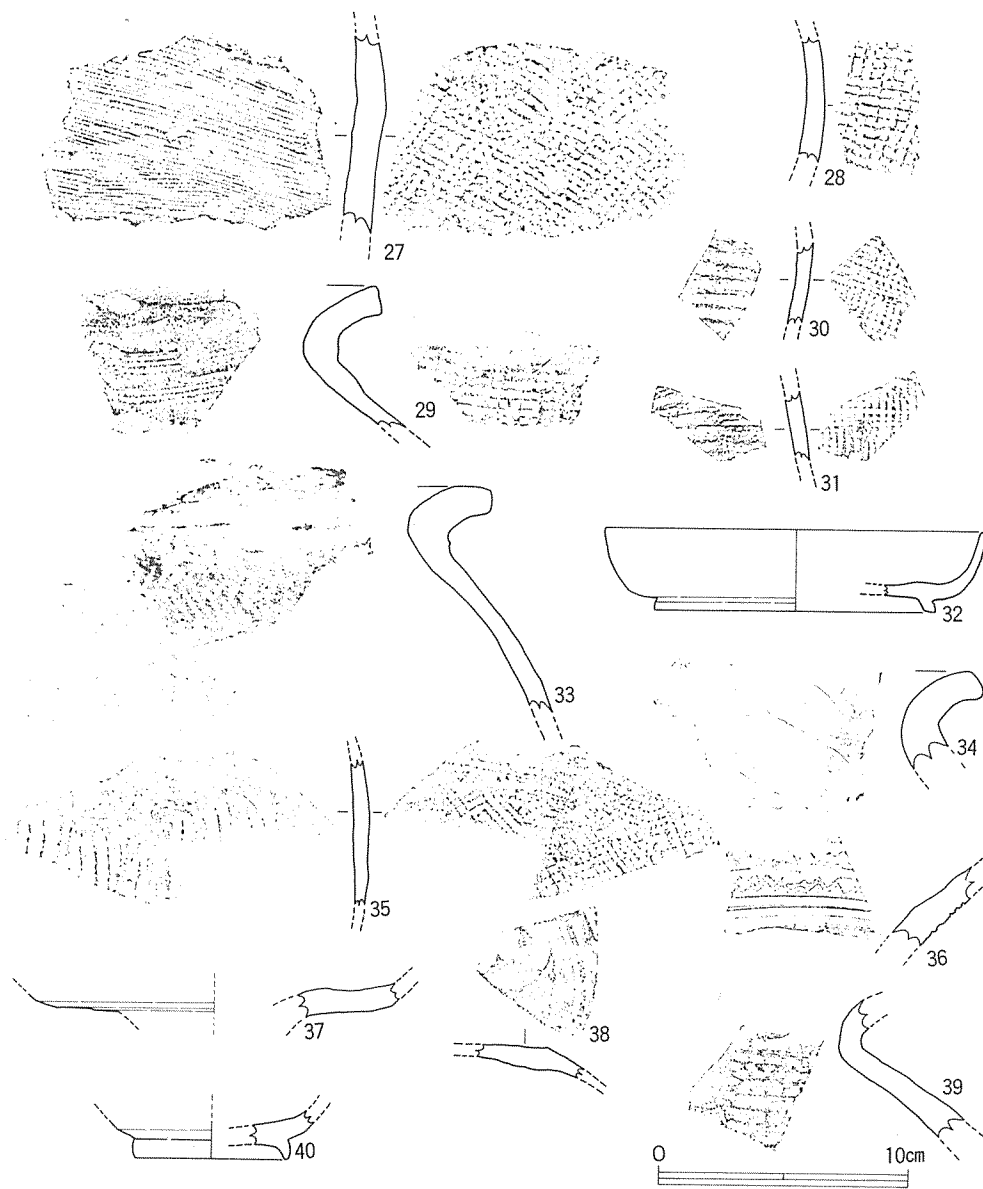
土 器 (第18~22図、第5~8表、図版13・14)

土師器は口縁部を大きく開いた甕が1点あるほか、土師器皿・坏が4点あるにすぎない。23・24の2点は口縁部の立ちあがり極めて少ないもので、24は底部に板目を残す。22・25は立ちあがり少なからずあって坏として分類した。手法的には24に残された底部切りはなし痕からみてもそれが古い様相を示し、22・25が遅れるであろう。とはいえ、23には板目がみられないところからこの2点は板目をもつもの一群では後出するものであろう。

須恵器には口縁部に櫛描き波状文をつけた大甕の破片と、口縁部を大きく外反させ胴部に格子目叩きや綾杉状に叩きをつけた甕29・33・34・39と、おそらくその胴部と考えられる27・28・30・31・35の9点。それに坏(32・40)、蓋(38)、高坏(37)などがある。27・28・29・33・34・39は鎌倉時代、30・31・35はそれよりやや遡る可能性がある。32・40はそれよりさらに遡って8・9世紀代、36・37・38はさらに古く古墳時代後期に位置づけできよう。同じ須恵質のものには擂鉢の一群もある。擂鉢に特有なカキ目を施す前に、その地文としてヨコないしはナナメ方向にハケ目を施すものが大半で、カキ目は10~11本であり地文としてのハケ目は内面のほとんどになされ、これには必ず外面もタテ方向のハケ目があるが、これはその上を意識的にナゲ消す。地文としてのハケ目を施さないものは41・43のふたつであって、これは瓦器に近い焼成。そして外面にもハケ目はみられず無地のままであり、前のグループと明確な相違を示す。42・44~47は鎌倉時代後期、41・43は室町時代の所産であろう。



第18図 出土遺物実測図(土師器) (1/3)

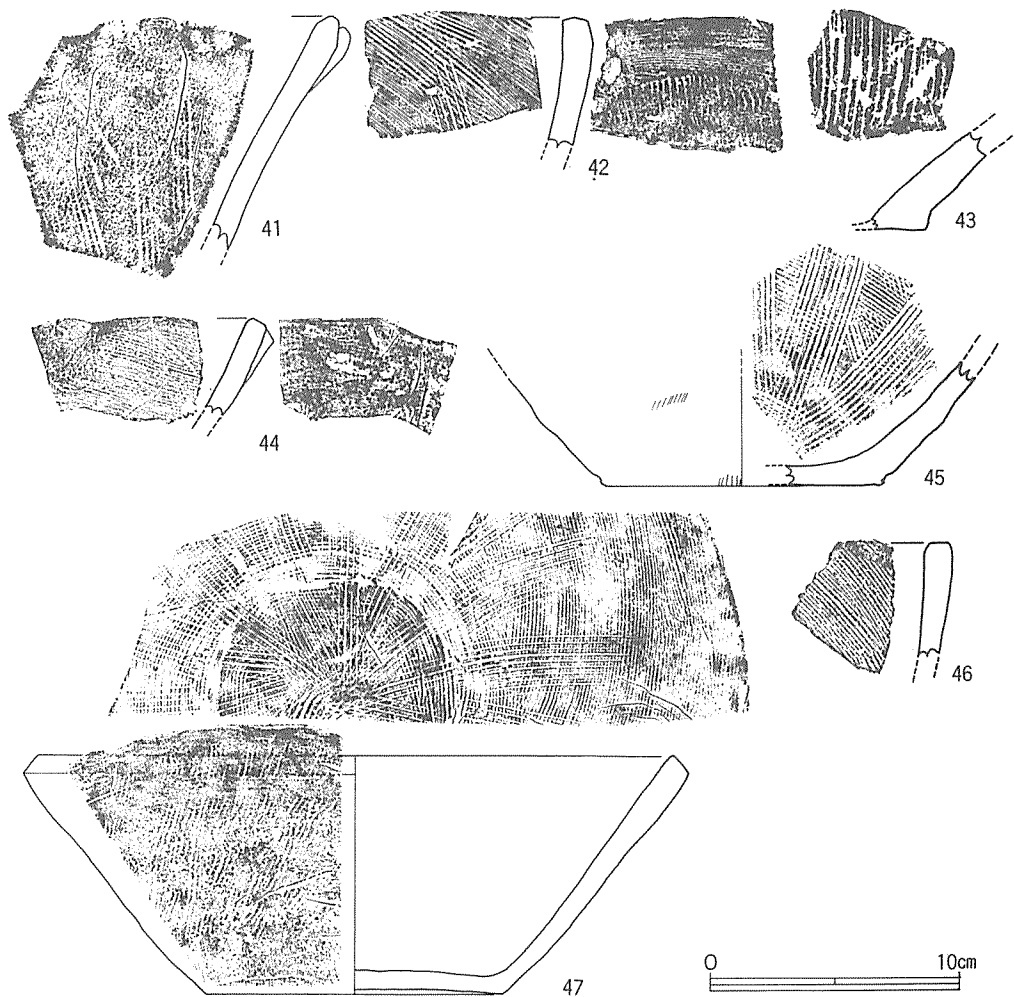


第 19 図 出土遺物実測図 (須恵器) (1 / 3)

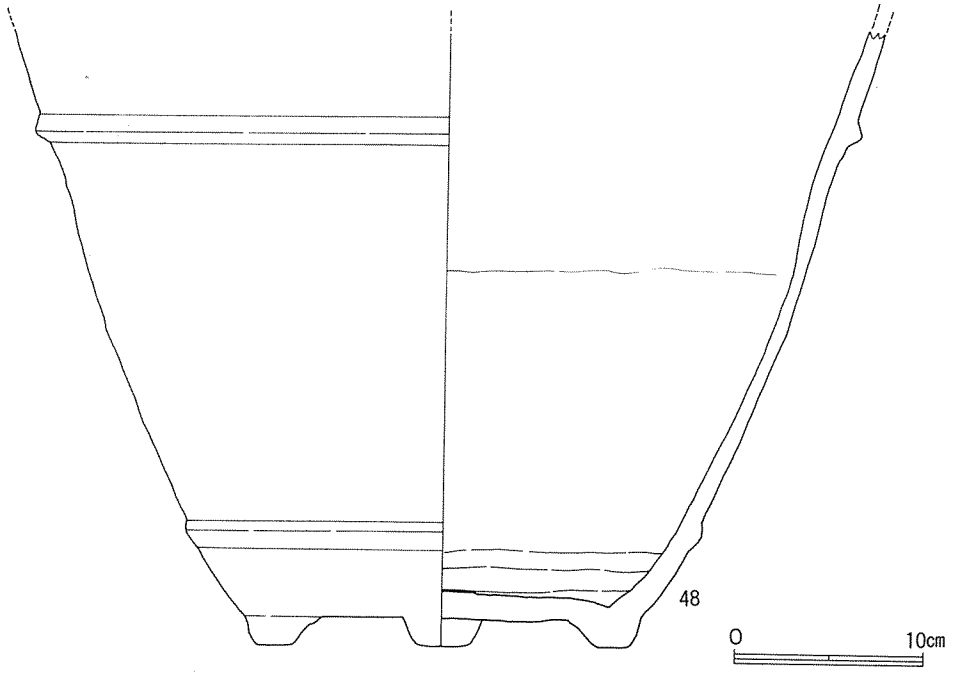
瓦器としては火鉢（火舎）があり、48は上端部を欠き、49・50は口縁部から胴部にかけての部分であって刻印をもつ。52も火鉢の一部とみられるが明らかではない。53は羽釜口縁部の把手の部分である。

陶磁器（第23・24図、第9・10表、図版15）

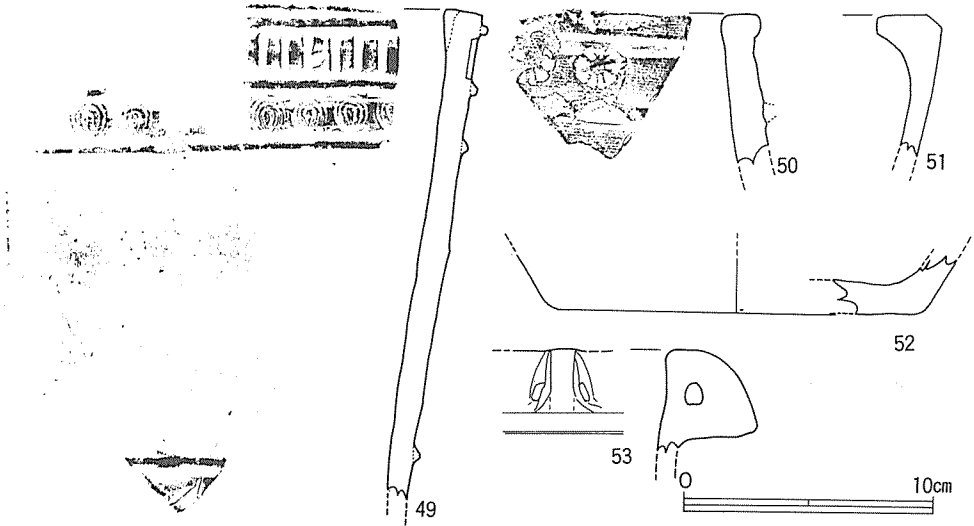
陶器として中世まで遡り得ると考えられるのは56だけであり、おそらく常滑焼の破片であろう。それ以外の54・55・57～60・62は近世後半以降の所産であり、58は灯明につかわれたもの。



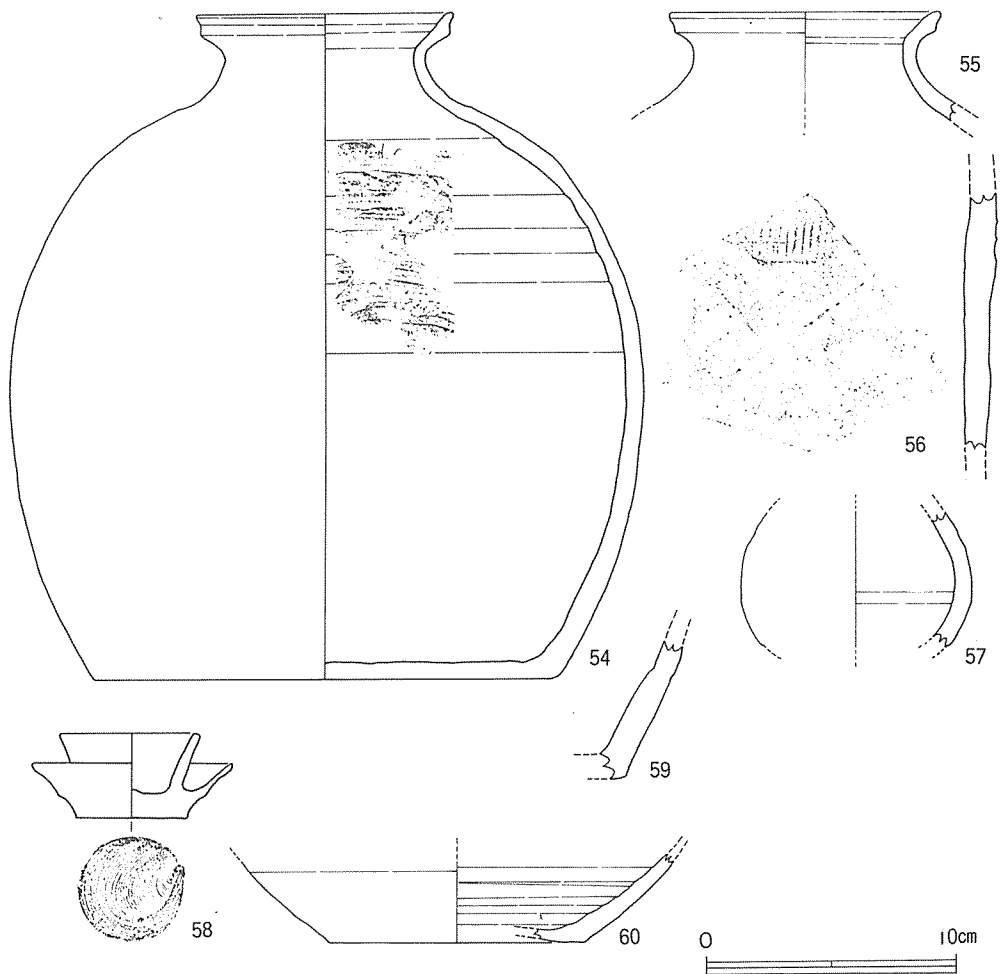
第 20 図 出土遺物実測図（播鉢）（1 / 3）



第 21 図 出土遺物実測図 (火鉢) (1 / 4)



第 22 図 出土遺物実測図 (瓦器類) (1 / 3)



第 23 図 出土遺物実測図(陶器類) (1/3)

磁器には中国宋代に属すると思われる青磁(61・64・65)と、近世中頃とみられる肥前系染付(63)がある。61には龍泉窯に特有な鎬蓮弁をもち、64は身こみに「福」の刻字がある。

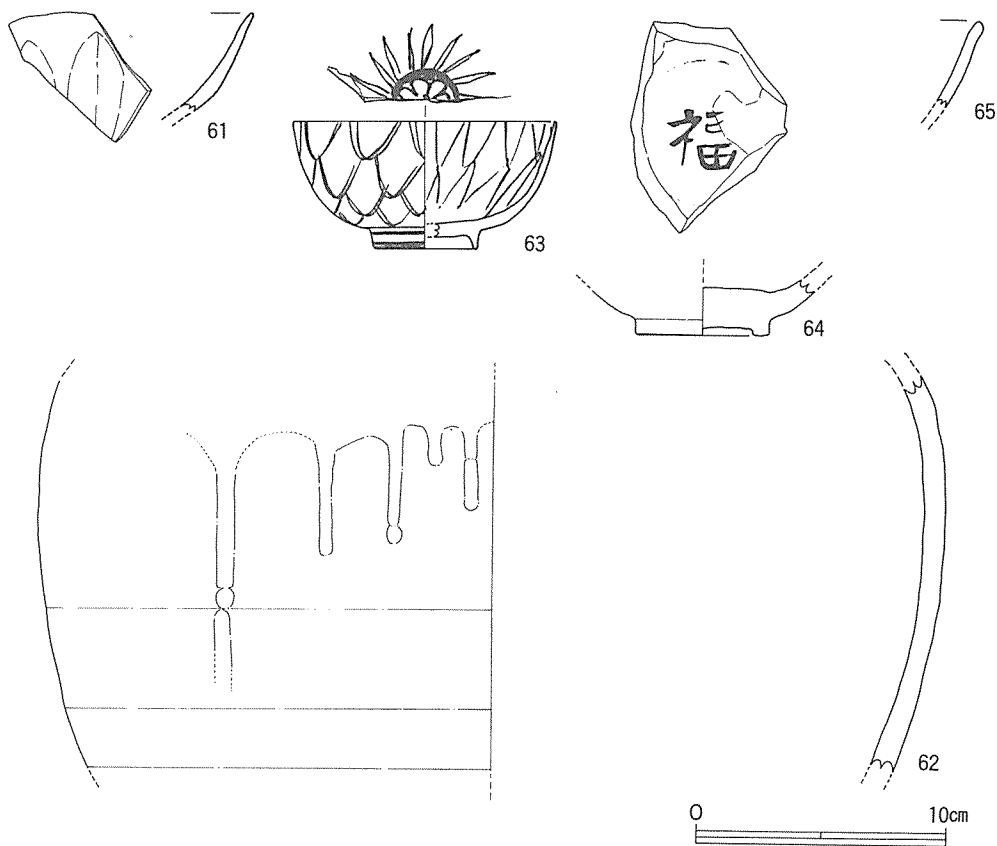
石製品 (第25図、第11表、図版15)

砥石 2 点がある。かなり使用されたために砥面は大きくカーブをしているが、石材は異なる。66は砂岩、67は陶石。

(高木)

鉄製品 (第26図、図版15)

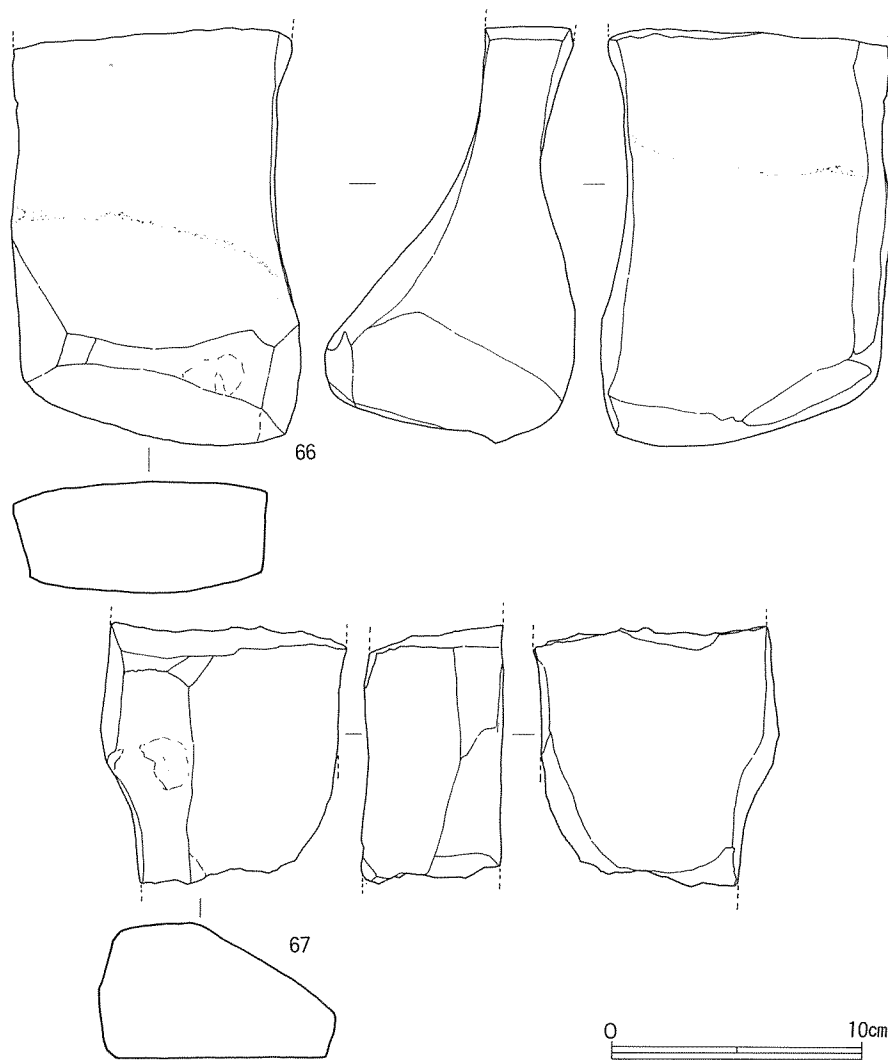
68・69は、運搬のさい吊金具として使用されたものである。棺身小口の両端に、直接打ちこ



第 24 図 出土遺物実測図（陶磁器類）（1/3）

んでとりつけていたものと考えられる。この製品は吊具として使用される部位と打ちこみに使用される部位の二つを組み合わせてなっている。吊具として使用される部位は、U字形を呈し、68で長さ21cm、幅5.5cm、断面は長方形で、1×0.2cm程である。69は長さ20.3cm、幅5.2cm、断面1×0.2cm程で長方形を呈す。両者とも不整形の飾りをつける。個数および配置は不規則である。他方、打ちこみに使用される部位は、平面は三角形を呈し、68で長さ2.5cm、幅は尖端で0.2cm、上部で1cm、厚さ0.2cm。69で長さ3cm、幅は、尖端で0.2cm、上部で1.2cm、厚さ0.5cmを測る。なお69では尖端部が0.5cm程折れ曲られているので、現長は2.5cmである。またU字状金具と打ちこみ部との結合部は、可動式となる。

70・71は、身と蓋の蝶番としての機能を有するものである。肘壺は平面が三角形を呈し、上部は、環状に折りまげ輪をつくる。上面に飾りを配す。70は長さ3.7cm、幅は尖端で0.2cm、上部で0.5cm、厚さ0.2cm、輪の直径0.7cmを測る。肘金は、肘壺に差しこむもので、平面形は全体としては「L」字形を呈する。軸は断面四角形で、長さは、70・71とも約5cmを測る。打ち

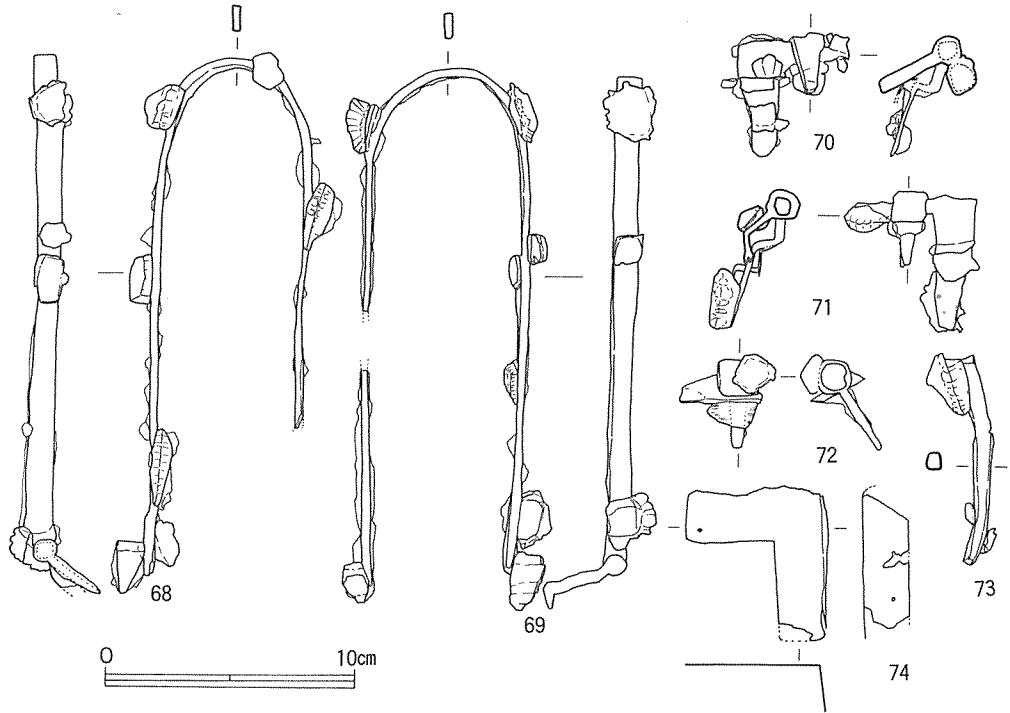


第 25 図 出土遺物実測図（砥石）（1/3）

こむ部位は、平面は三角形を呈し、断面は \sphericalangle 形をなす。70で長さ4.6cm、幅は尖端部で0.5cm、上部で1.5cm、厚さ尖端部で0.2cm。71は長さ5.3cm、幅は尖端部で0.6cm、上部で1.6cm、厚さ尖端部で0.1cm。飾りのつけ方は不規則である。木片の付着著しい。

72は、平面は三角形を呈し、上部は環状に折り曲げ輪をつくる。長さ4.2cm、幅は尖端で0.3cm、上部で0.7cm、厚さ0.3cm、輪の直径1.2cmを測る。木片の付着が顕著である。73とともに錠として使用されたものと思われる。73は、長さ8.4cm、幅0.6cm、厚さ0.7cmを測る。

74は、木棺隅角に補強のために取り付けられるもので平面は \sphericalangle 字形を呈す。幅約2cm、厚さ0.1cmを測る。また釘穴が観察される。使用された釘は角釘であった。（古城）



第 26 図 出土遺物実測図（鉄製品）（1/3）

小 結

以上述べてきたとおり、出土した遺物の量もそれほど多くはない。しかも、明確に遺構に伴って出土したものもごく僅かであって、遺構の年代を推し量るにはやや材料不足といわざるを得ないであろう。時期的には最も多いのはやはり鎌倉時代のものであって、如来寺創建期ないしはそれに近い段階のものとみることに無理はない。

瓦の出土量も少なく、製作工程等を考えるには統計上無理があるので、各瓦の技法上の特徴についてみてみたい。

平瓦の側辺部が垂直に切り落されていることは型台上で作られた1枚作りであることを示し、表面（凹面側）だけが平滑に調整されているのは調整工程で粘土板を凹形型台上で作られたことを物語る。

丸瓦は、2種類に分けたが、I・II類とも粘土帯を巻きつけたうえから、タタキを施したことが判る。II類は側端面に分割断面を残しており、I類は内面側辺に大きな面取りが施されていて、手法上II類が先行するものと考えられよう。そこでII類を如来寺創建時あるいはこれに近い時期、I類をII類以後、下限をいぶし瓦の出現する安土桃山時代以前と考えられよう。他

種の瓦とのセット関係は不明であり、細かい時期を判断するには資料が非常に少なく、他遺跡との比較や、生産地である関係瓦窯の発見は今後の課題である。

各土器の年代的位置づけについては上文において既に見てきたところではあるが、ここでは須恵器に限定してその手法上の相違点を問題として取りあげてみたい。

格子目叩きを外面に施す須恵器甕の大半は内面には横方向のハケでなでられており、このパターンが主流のようである。外面格子目叩きで内面に青海波文を施すものも1点みられるが、むしろこれは手法的には古いものであろう。九州で唯一確認されている中世窯跡としての熊本県荒尾市樺万丈窯跡において、外面格子目で内面ヨコハケ目の甕が検出されており、それに平行する段階のものとみられる。

同じく須恵器のなかで擂鉢の技法にも注意しておく必要がある。これには地に横ハケを施し、その上からカキ目をつけるものと、地には特に何も施さずカキ目だけをつけるものがある。平安時代後期に既に出現している捏鉢に、いわゆるカキ目を施したものが擂鉢であって、その初期のものは鎌倉時代に出現している。地文としてハケ目を施さなくなるのがそれから後のいつであったかは明らかにされていないが、戦国期にそれがみられるところから、その時期は13・14世紀の頃と考えられる。

須恵器甕と擂鉢が、甕では外面叩きで内面ヨコハケ、擂鉢では外面をタテハケのあとナデ消し、内面はヨコハケ地文の上にカキ目をつけたものが主流を占めるものであることは一応確認しておく必要がある。強いていえば、ふたつの器形にみられるこのような手法が如来寺創建期の頃（13世紀後半）に存する可能性は極めて高い。

SK—03出土の鉄製品は1個の木棺に付けられた金具である。小口の中央には竿を通して墓所に運ぶ運搬の具としてU字形の金具を付け、側辺には蓋が自由に開閉出来るように蝶番を設け、これらには菊型の飾りを不規則に付けている。また身の隅部は鉄板を細工して補強している点など各所にすぐれた木棺の様相を示す。

ところで、このような金具は近年まで箆筒長持に見ることが出来たが、木棺に付けたものについては類例を見いだすことが出来ず、時期的な考察が出来ないまま今後の課題として残った。

最後に、SK—03の被葬者は、他の土壙墓と比較して経済力に富んだ人の墓と考えられよう。また、位置的にも墓域の中心にあることを付け加えておきたい。

(高木・木下)

4. 周辺地域分布調査

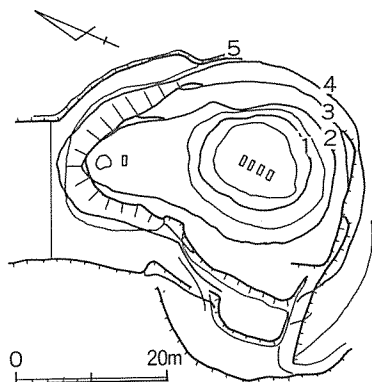
調査は、前節で述べた発掘調査の外に周辺部における分布調査も行なった。周知の遺跡としては古墳や中世遺跡・中世石造物などが知られており、調査の主眼をそれらに置くことにした。その成果は次に述べるごとくであり、位置関係を第27図に示す。

古墳時代

檜崎古墳

丘陵先端を利用してつくられた小型の前方後円墳であり、推定全長42m、後円部径21m、同高さ3m、前方部幅15m、同高さ2mをはかる。花園町字檜崎に位置し、主軸は北北東―南々西を向き、後円部に4基、前方部に1基の埋葬施設を持つ。後円部のそれは、家形石棺・舟形石棺・家形石棺・石蓋土壙の4基並列であり、前方部の1基は箱式石棺である。

大正10年10月に調査が行なわれ、その折に直刀・鉄鏃が出土している。家形石棺2基と前方部の箱式石棺は組みあわせ式で、舟形石棺は蓋・身それぞれ一石刳抜式となっており棺身底は



第28図 檜崎古墳墳丘測量図
(1/1000)

U字形のカーブをなすが、内底は矩形に刳り抜き、棺蓋の形状ともあわせ家形石棺的要素をもつ。^(註2)棺身内の両長側辺に3個と2個の刀掛状突起をつくり出す。

最も早く埋葬されたのは舟形石棺か石蓋土壙であろうが、家形石棺・箱式石棺の年代もさほど隔たりはないであろう。この古墳の上限を5世紀中葉の頃に位置づけておきたい。

女夫塚古墳（男塚）

下益城郡松橋町古保山字女夫塚に位置する前方後円墳であり、主軸は北東―南西をさす。土取りによって後円部の殆どが失なわれているため、その規模を詳かにし得ないが、推定全長46m、同じく後円部径26m、同高さ5m、前方部幅24m、同高さ5.5mをはかる。^(註3)

後円部に阿蘇凝灰岩がいくつか露出しており、そこに横穴式石室が築かれていたことを暗示する。以前、墳丘から須恵器が採集されたことがあり、6世紀中葉～後半に位置づけできよう。

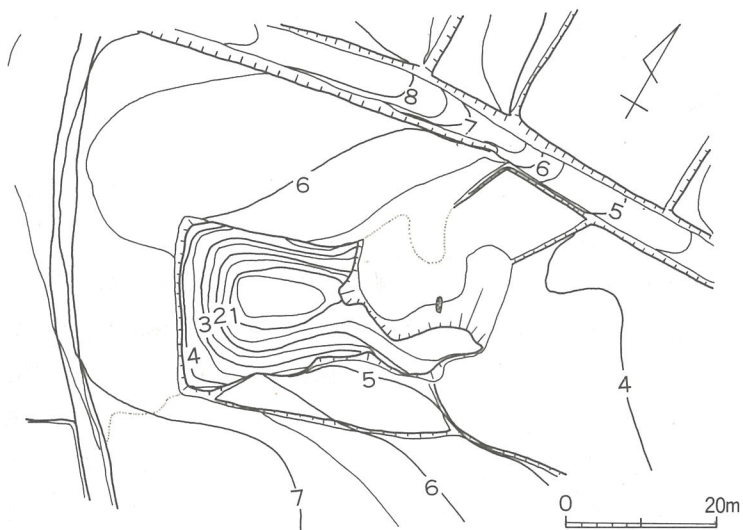
女夫塚古墳（女塚）

前記男塚古墳とは行政区画の上からは異にし、宇土市花園町字西原に該当するが実際には僅かに100mを隔てるのみであり、本来は対をなして認識されていたものである。ここも墳丘の中心部分が採土によって大きく損なわれているが、現況で東西20m、南北10.5mをはかり、もともと径20m以上有したと考えられる円墳である。高さは現況で3mをはかり、当地方に存する円墳のうちでは大きい方の部類に属する。

内部主体や出土品等については明らかでないが、今回の踏査によって墳丘の一面から縄文晩期に属する刻目突帯文土器の口縁部小片（第32図75）をはじめとして、甕と思われる須恵器胴部片なども採取されている（76・77）。従来、この古墳の年代的位置づけについては全く不明であったが、男塚古墳とほぼ近い時期のものであることが推測できるようになった。

鬼の窟古墳

宇土市花園町字大曾に位置し、南北方向に主軸をもった横穴式石室が開口する。石室内には多量の土砂や天井石・側石等が入りこんでおり高さは不明であるが、石室規模を知ることが可能である。それによれば、石室の総全長は5.4mあって、玄室の長さが3



第29図 女夫塚(男塚)古墳墳丘測量図(1/1000)

m、幅2~1.65m、袖部はわずか0.1mの突出ながら両袖をなし、その幅は1.1m、長さ1.2mをはかる。羨道部の長さは1.2mで幅も同じく1.2m。

天井石は3石が現存し、石室用材は殆どが礫岩であって、一部、安山岩も含む。封土の大半は流出し規模の詳細を明らかにし得ないのは惜しまれるが、現状での地形観察から径12m、高さ3m以上はあったものと推測される。女夫塚古墳(男塚・女塚)に続く時期の所産とみられ、6世紀後半~末頃に位置づけできようか。

ゴルフ場内遺跡

花園町三日の集落北側で、雁回山の南側斜面地にゴルフ場があって大幅な地形改変が行なわれている。このゴルフ場の拡張工事(宇土ゴルフ倶楽部)が昭和51年に行なわれ、その事前の遺跡所在分布調査を昭和51年1月22日に実施した。その折に古墳のマウンドと思われる高まりが2・3箇所確認され、発掘調査の必要性が生じた。ところがゴルフ場は発掘調査を実施することなく工事を完了させてしまったため、この古墳(?)の実体は明らかにされることがないまま闇に葬られてしまったのである。

その工事が完了して後、このゴルフ場内より甕の胴部と思われる須恵器片(第32図79)が採取され、それが古墳であった可能性が極めて高くなった。(高木)

古 代

蔵 骨 器(第32図82、第12表、図版19)

発掘調査期間中に、土地所有者からの連絡によって蔵骨器の所在が明らかになった。出土地は、宇土市の最東端、下益城郡松橋町との境界近くの宇土市花園町三日字大門2535番地であ

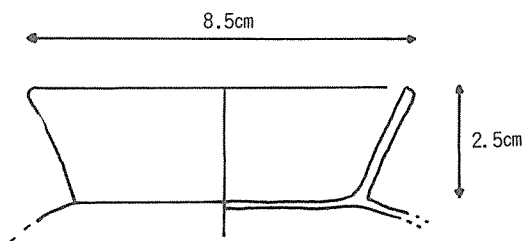
る。現地は標高50m程の丘陵で、大規模な採土中に発見され、長期間放置してあったらしく、出土箇所や出土状態については不明である。

蔵骨器の身は、高さ19.7cm、最大径22.4cm、口径12.3cm、高台径12.7cmを測る。形態上の特徴は、口縁部が薄く短かく立ち上がりわずかに外反し、口唇部は丸くおさめている。器壁は、底部に向うほど厚くなっており、全体的に均整のとれた壺形をなす。高台は小さく貼り付け、わずかに外へ張り出す。外面の調整はヨコナデを施し、底部近くはヘラケズリを行なっている。また、内面上位はヨコナデ、中位から下位にかけてはタテ方向のナデを施している。焼成は良好、明るい灰色を呈する須恵器である。胎土は精緻である。

蓋は、土師器の坏である。整理中に盗難にあったので詳しい観察は出来ない。蓋は高台部分のみを利用し上端部を打ちかいたもので、高台径8.5cm、高さ2.5cmを測る。器壁は全体的に薄い(第30図)。

蔵骨器内には、火葬の成人骨一体分が納められていた(付論1参照)。

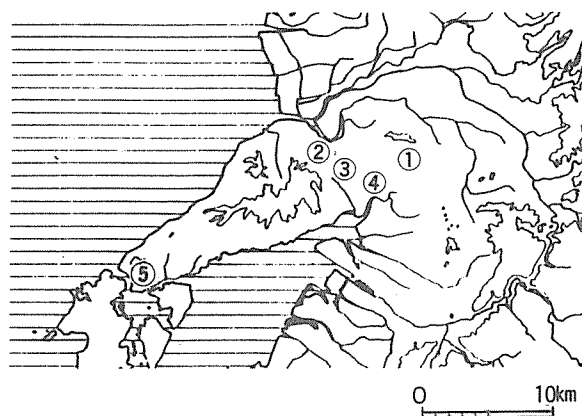
蔵骨器の時期は、身の特徴から平安時代前期に比定できよう。



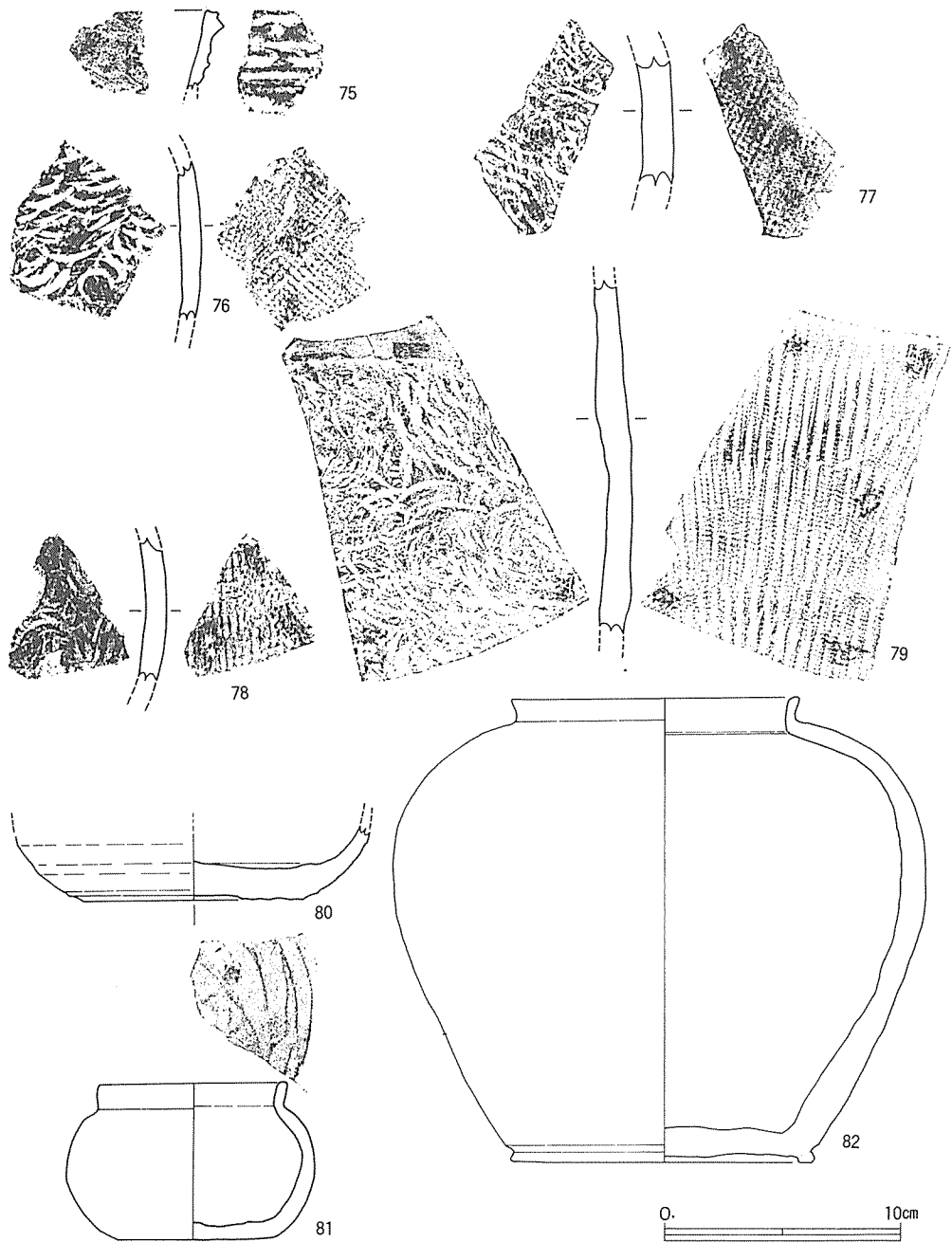
第30図 蔵骨器蓋略図

宇土半島出土蔵骨器一覧(第31図)

- ① 宇土市花園町三日字大門2535番
 - ② 宇土市恵塚町仮又
 - ③ 宇土郡不知火町大字浦上字迫1032番
 - ④ 宇土郡不知火町小曾部字南請
 - ⑤ 宇土郡三角町波多字陳の内 756番
- (第33図) (木下)



第31図 蔵骨器出土位置図(1/60,000)



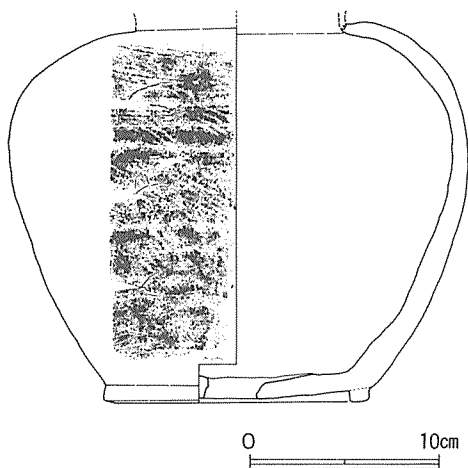
第 32 図 周辺地域分布調査関連遺物実測図 (1 / 3)

中世・近世

宝 塔 (第34・35図)

花園町大字大曾にある宝塔塔身は、宇土市指定の有形文化財となっており早くから注目されていたものである。

断面が隅丸長方形をなし円柱状の有頸瓶形を呈するが、その上・下端部に台座と笠部を合わせるための柄を造り出している。柄を含めた総高は69cmであり、柄を除いた塔身部の高さは52cm。塔身中央の四面には、蓮台上に円形をつくり出し、そこに梵字を表わす。この梵字の刻まれた円形部には4箇所とも黄褐色の顔料が付着しており、本来は金箔を意図して塗布されていたものであろう。その上部には銘を入れるための長方形区画を造り出す。銘文と梵字(種子)は次のとおりである。



第 33 図 宇土郡三角町波多字陳の内出土蔵骨器実測図 (1/4)

色の顔料が付着しており、本来は金箔を意図して塗布されていたものであろう。その上部には銘を入れるための長方形区画を造り出す。銘文と梵字(種子)は次のとおりである。

寂	生	是	諸
滅	滅	生	行
為	滅	滅	無
楽	己	法	常

是	盡	何	三
誰	地	処	界
圓	没	疊	無
寂	跡	石	法

中	仲	二	曆
旬	春	年	仁

之	師	願
塔	姑	阿



(蓮台)



(蓮台)



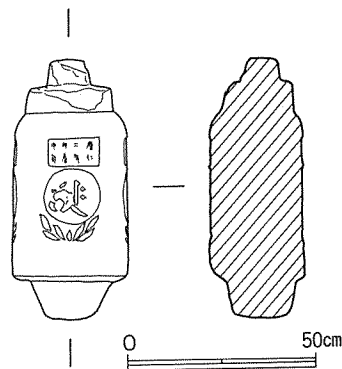
(蓮台)



(蓮台)

暦仁2年(1239)といえ、如来寺創建より30年も前であり、如来寺建立以前にこの付近に別の寺があった可能性を示し、この銘文にみえる願阿師姑が尼僧を意味することが明らかにされている。^(註4) 種子は、宝幢・天鼓雷音・無量寿・大日であり、これが胎藏界四仏を表わしているとみることが許されよう。そうであれば、開敷華王(ア)のかわりに胎藏界の中心である大日如来を表現していることになる。

この宝塔塔身は、蓮弁を表現した六角形の台座の中央



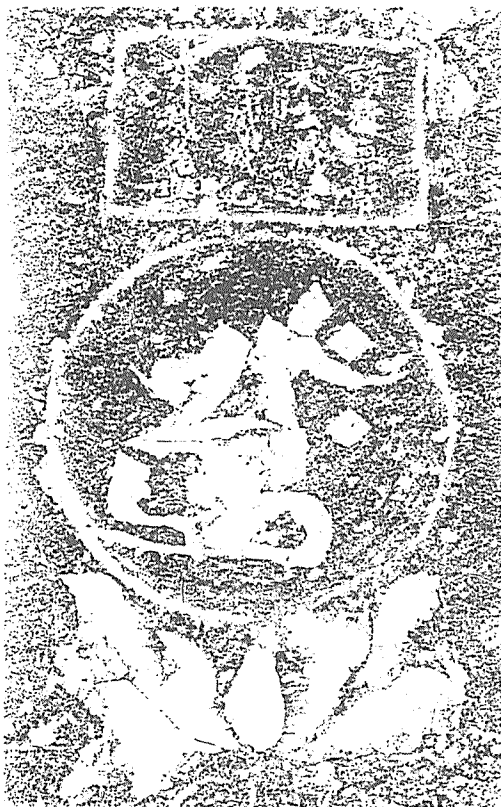
第 34 図 宝塔塔身実測図 (1/20)



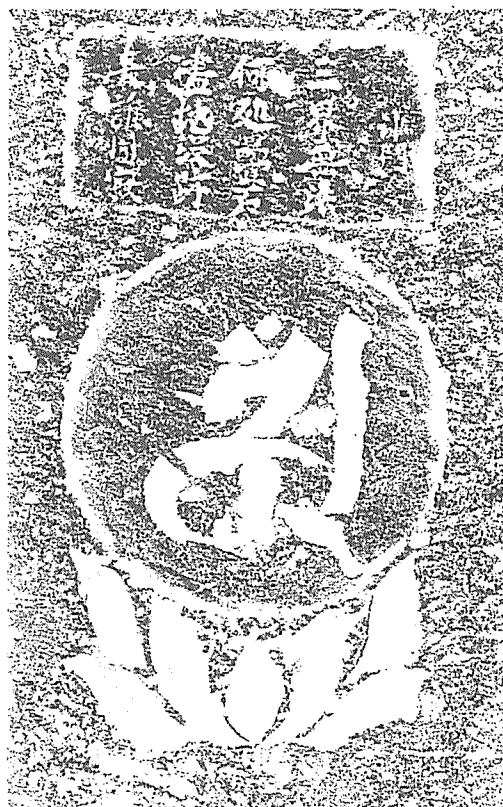
2



1



4

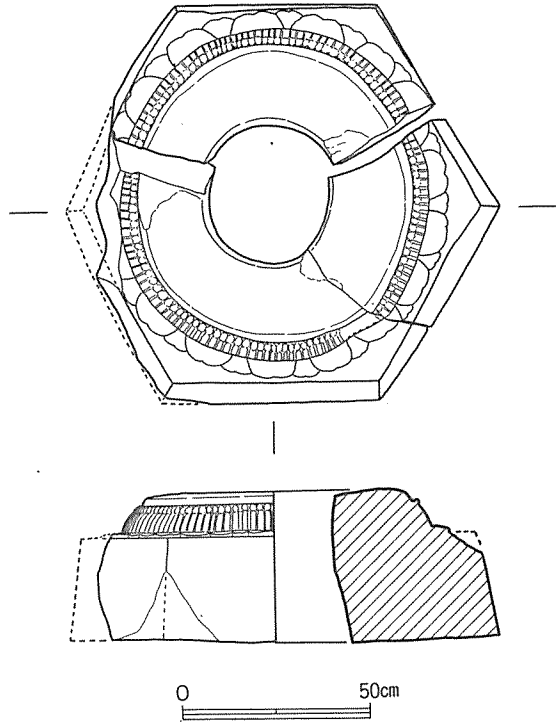


3

第 35 圖 宝 塔 拓 影 (1/3)

部に塔身下半部をさしこんだ状態で立てられている。この台座は、一辺が55~60cm、幅105cm、最大幅120cmで高さが28cmの六角形をなし、その上面から中央の円形突出部にかけて間弁を持った蓮弁が16個刻出される。花卉には明確な稜線はみられず、やや簡略化されている。

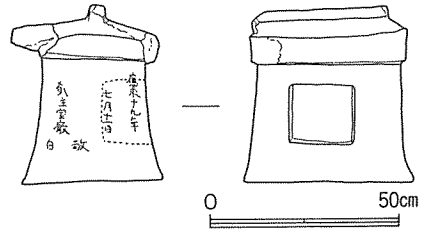
形状からみても、この台座が宝塔と組みあわせるものとは考えられない。この種の蓮弁をもった台座は何種類かの石造物にみられるものであるが、無縫塔の一部である可能性が最も高い。現在の如来寺（上古閑）には、三日の如来寺跡から運ばれたと思われる石造物がいくつかあり、無縫塔もそれに含まれている。今後、如来寺の石造物調査に期待されるところである。



第 36 図 台座実測図 (1/20)

厨子形石造物 (第37図)

花園町三日字中島にあった天満宮の一画に、一石の阿蘇凝灰岩を厨子形に加工し、その中央を幅17cm、高さ15.5cm、奥行13cm割り抜いた石造物が置かれていた。燈籠に用いられたものであろう。石造物全体の高さは47cm、幅45cm、奥行40cmあって、その左側面に下のような応永19年（1412）の銘がある。



第 37 図 三日天満宮厨子形石造物実測図 (1/20)

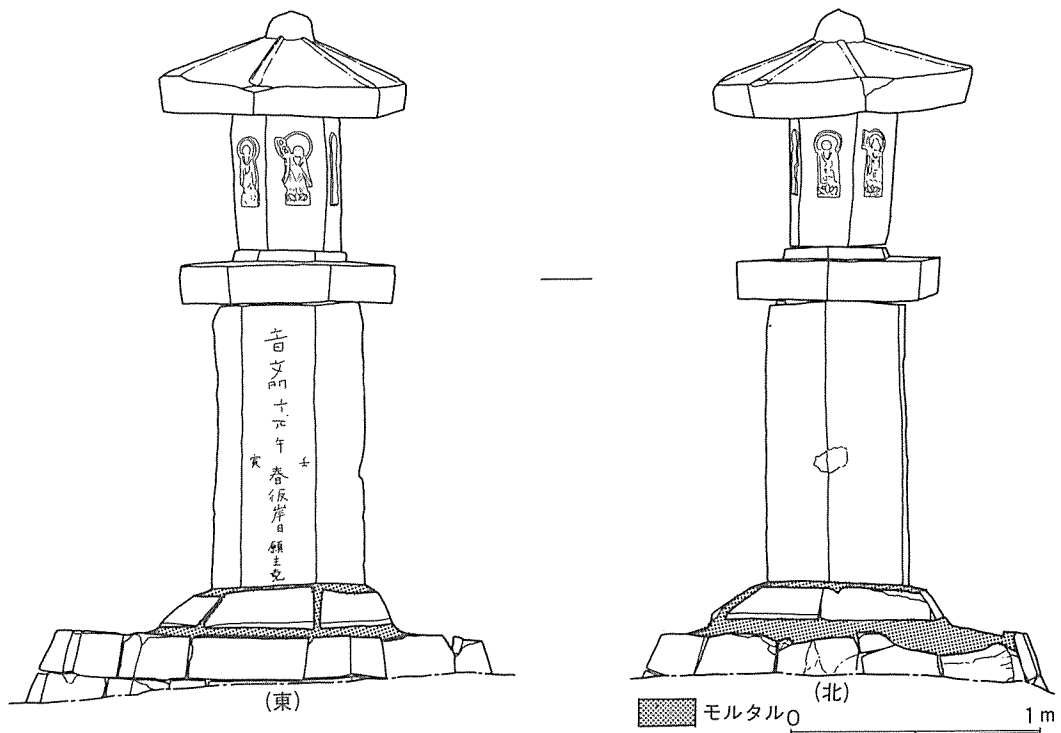
願 主 宝 巖 白 敬	應 永 十 九 年 七 月 十 一 日
-----------------------------	--

この銘は現在の如来寺（宇土市岩古曾町上古閑—後述）所在の同種品と同じ日付・書体を示しており、両者は同一人物（宝巖）によって如来寺に寄進されたものと考えられる。もとは三日の如来寺（花園町字中島）境内に対であったものが、一方は上古閑の如来寺へ移し、他方は地元の天満宮へ持ち運ばれたものであろう。

れた紀年は共に宝永4年(1707)7月再興であって、それが江戸中期につくりかえられたことを示す。宝永の紀年だけが後世の追刻である可能性もなくはないが、龕部の地蔵尊立像は像のみを浮き出させ、そのまわりを一段低くして面取りしている。その手法や笠の上につく請花と宝珠は簡略化されており、それらが江戸期の作であることを特徴づけ、追刻ではなく造り替えられたとみた方がよからう。

踏査期間中に、古保山に六地藏残欠があるとの情報を得たので確認したところ、そこには高さ48cm、最大幅45cm、最少幅38cmの六角形をなす阿蘇凝灰岩製の龕部のみが置かれていた(図版18)。龕部の6面には縦33cm、横15.5cmにそれぞれ区画をつくってその中を1段掘りくぼめ、その中央に地蔵尊立像を浮き彫りにする。そしてこの区画の上部にはいずれも円形内に梵字を表わしており、戦国期の作風を示しているが地蔵の顔部や錫杖、梵字などに剝落がみられる。

この松橋町古保山字虎御前の龕部が、あるいは、とり替えられた三日六地藏のそれであったと考えることは無理であろうか。つまり、もともとは三日六地藏の龕部であったものが、剝落などで傷みがはげしくなったところから宝永4年に龕部と笠を取り替えられ、それが何らかの事情で龕部のみが現在地(500m南)に移されたとみるわけである。笠の所在については明らかではない。古保山六地藏の横には五輪塔残欠がいくつかあり、付近に、永禄10年(1567)在銘の板碑が存するのみである。なお、この板碑は現在地の東北東の山中から移したものである。



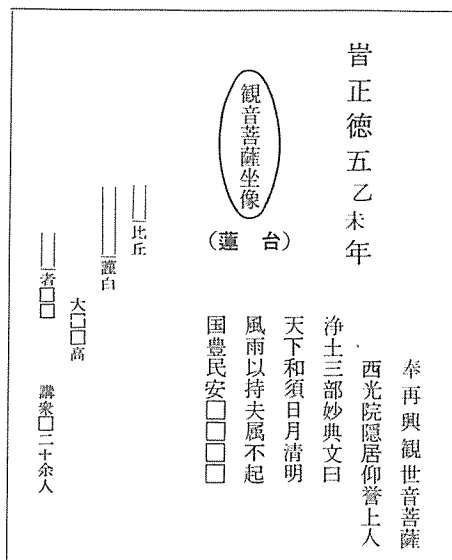
第 38 図 三日六地藏実測図 (1/30)

板 碑

花園町字中島に板碑を納めた小さなお堂がある。板碑は阿蘇凝灰岩製で、表面の風化が甚だしく拓本を取ることは不可能な状態であるが、銘を読むことはできた。板碑中央の上部には坐像が蓮台の上に描かれ、その右側に紀年、下部に願文が刻まれている。字の大きさの違いや文意から右に掲げる銘のうち大きい方は追刻である可能性もある。なお、この板碑に現われる西光院隠居仰誉上人は、前出の三日六地藏を再興した比丘仰誉上人と同一人であり、8年後にこの板碑にみえ、その折には隠居となっていたことがわかる。

仰誉残智和尚は宇土の西光院（浄土宗）の21代住職であり、天和2年（1682）から貞享・元禄の頃にかけて住持しており、現在の不知火町小曾部にある能因法師の歌碑を再建したことでよく知られ、その他にもいくつかの石造物建立に関係している。

三日の板碑銘は右のとおりである。



如 来 寺

宇土市岩古曾町字上古閑に存する如来寺は、永正元年（1504）に三日から移転してきたものであり、それから以降、現在までこの地にあったのである。

ここには三日から移転するときや、その後持ち運んできたと思われる彫刻品や石製品がいくつかあるので、以下にとりあげてみたい。^(註5)

木造釈迦如来坐像（鎌倉時代。正元2年正月10日建立銘）

木造阿弥陀如来坐像（鎌倉時代。台座に寛政11年10月銘）

木造薬師如来坐像（鎌倉時代）

木造韋駄天立像（桃山時代）

木造寒徹義尹像（南北朝時代）

木造素妙尼像（南北朝時代）

木造東州至遠仏鑑禅師像（室町時代。応永7年10月5日開眼銘）

木造男神倚像5体（いずれも室町時代）

木造狛犬（室町時代末期）

伝、古保里越前守墓一多重塔二層分・宝篋印塔二個・方形台座・内削りのある五輪塔水輪？等の寄せ物。

伝、寒徹義尹墓一無縫塔・五輪塔水輪・宝篋印塔・方形台座 等の寄せ物。（墓石保護のための粹石に寛政9年4月21日再建銘）。

厨子形石造物（応永19年7月11日銘）

歴代住職・看坊墓

周辺地名

花園町三日の如来寺跡周辺にはいくつかの石造物が残存し、それらが寺に関係するものであることを推測せしめている。しかも現存する字名やそれ以外の俗称にもこれに関係すると考えられるものがいくつかあり、聞き取りなどによって第2図・第27図に記すような地名が存することが判った。

如来寺の歴史

如来寺の歴史について語るにはそれが当地に開かれるようになった経緯から述べなければならぬが、それにふれる前にこの地域における仏教的形跡について簡記しておく必要がある。

古代における寺院としては、如来寺跡から南々西約1kmの位置に古保山廃寺跡がある。採集された瓦に肥後国分寺跡の瓦と類似した文様瓦があって奈良時代に属することが明らかであり宇土郡寺に比定しようという見解もある。

天台宗系の寺院として宇土郡では光園寺・妙法寺・地福寺・極楽寺、それにこの花園町付近にも佐野寺というのがあった。文暦2年(1235)3月に佐野寺院主僧俊慶謹言…と見え、その四至は次のとおりであるが、その明確な範囲は明らかにし得ない。

限東令釋迦院登道 限南大宇曾大道 限西枯木尾 限北寃喰谷

しかし、花園町の南側を東西に走っている現在の市道付近が大宇曾大道にあたると考えられる。東限とされた釈迦院道がどの付近にあったものかは明らかでなく惜まれるが、将来の課題としたい。

東限を示す傍証となるかどうか明らかではないが、大曾に暦仁2年(1239)の宝塔があり、それが極めて近接した年代のものであるだけにこの宝塔が佐野寺と何らかの関係があったことが十分予測され、この如来寺付近もこれに関係した地域であると考えてもよからう。花園町佐野の字池ノ口に山王社が現存し、それが天台系寺院であったことを推測させる。

如来寺が建立されたのは文永6年(1269)となっているが、現在の如来寺の釈迦如来像胎内に正元2年(1260)の銘(史料1参照)があって、その解釈にやや複雑さを加えた。^(註7)^(補註)

銘文に現われた如来院と文永6年に開かれたと伝える如来寺が同一であったかどうかは俄には決しがたく、修寧という密教系尼僧の名も初出である。正元2年といえば義尹が初めての渡宋から帰って8年後であり、更にそののち文永元年(1264)には再び入宋し、同4年(1267)に帰朝。帰朝後はそのまま博多の聖福寺に3年間とどまり、同6年には古保里越前守の娘素妙尼の請によって古保里(庄)に如来寺を開いている。これが今回調査を行なうことになった宇土市花園町三日字中島・大門付近であって、本堂があったのは花園町字中島2372番とみられる。

今回の調査によって如来寺跡の伽藍配置を明らかにできなかったのは残念であるが、現在で

も一応の範囲を推定することは可能である。しかも、付近には小寺や尼寺もあった（史料21）と伝えられるところから全体的には、如来寺だけではなく更に広範囲に寺域を考える必要があらうし、このうちの尼寺が報恩寺であったとみられる。

報恩寺が古（小）保里村にあったと伝える記録もみられるが、古保里にその形跡がないところから、おそらく古保里庄と伝えられていたのがいつのまにか古保里村と誤認されたのであらう。報恩寺が開かれたのは文永2年（1265）のことと伝えられ、その開基にも素妙尼が関わっている。この時はまだ如来寺はできていないのであるから、報恩寺が4年早いということになる。開山は大慈寺5世仁叟浄熙となっているが、初期の報恩寺にはまだ仁叟は関係がなくやが後になって開山となったものであらう。

仁叟は正平19年（1364）10月18日に亡くなっているが、弘安10年（1287）在銘の大慈寺梵鐘（史料5参照）には、報恩寺法位修惠等尼衆卅余人…とみえるところから、報恩寺の存在の上限は裏付けられる。

如来寺を開いた義尹は、建治2年（1276）5月には大渡橋の勧進を行ない、2年後の弘安元年（1278）7月には完成させている。その後弘安5年（1282）10月8日の大慈寺伽藍の寄進を受け、翌年には如来寺から大慈寺に移ることになる。

それから16年後の永仁7年（1299）に義尹は再び如来寺に帰り隠棲することになるが、翌、正安2年（1300）8月21日に84歳で亡くなっている。

義尹が宇土に如来寺を開いたのは、古保里越前守の娘素妙尼の請によったものであるといわれるが、肥後に入ってくるようになった契機については必ずしも明らかではない。最近、義尹が肥後に来るようになった背景を北條得宗家の肥後進出との関連で把えようとする見解を上田純一氏が出され、さらに井上正氏は古保里荘の歴史の変遷について概観された。

大慈寺の記録によれば寒巖以後は、2世東州義勝・？世浦帆遠・？世玉爛燦・5世先天豫・6世明導心・？世月州聖運・？世海印光などの名がみえる。義尹が大慈寺に移って後には、おそらく後に大慈寺3世ともなる鉄山土安などの義尹の高弟達が残っていたと考えられる。

暦応3年（1340）4月、智勝弾師の折に如来寺塔婆に院宣を仰いだが、正平元年（1346）9月11日少貳頼尚は如来寺に宿営し、守山関所を攻めている。翌、貞和3年（正平2—1347）8月5日には如来寺塔婆を肥後國利生塔となし、一國一寺の通号によって同じ花園町に近接する佐野寿勝寺を肥後國安國寺と改称させた。

応永7年（1400）10月5日開眼の東州佛鑑禅師は如来禅寺北香室菴となっており、銘を書いたのは小弟比丘曾唯である。応永19年（1412）7月11日には厨子形石造物1対（？）の寄進を受け、その願主は宝巖。それでも、応永の頃は如来寺はかなり衰微していたらしく、仏像の一つが尾張常安寺に移っている（史料26）。

戦乱の世となった文明14年（1482）には如来寺大門のすぐ近くの辻に六地藏が建ったが、それから約20年後の永正元年（1504）の竹隠和尚の時、如来寺は上古閑に移り、それとほとんど

かわらぬ時期に報恩寺も熊本の壺井に移っている。その後、16世紀後半頃に善虎・虎山和尚がおり、江戸時代も元禄（1694）の頃に如来寺の中の一庵に禅軒という名の弟子僧がいた。その後は長く、住職ではなく留守居としての看坊がおかれていた程度であったようである。

現在の如来寺（宇土市岩古曾町上古閑）にはいくつかの石造物が現存しているが、それらの大半は恐らく三日から持ち運ばれてきたものであろう。しかし運んでくる時の手違いや、長い年月が経過してから運ばれてきたり、更には上古閑に持ってきてから以降の管理の問題などのために、石造物の組みあわせに極めて混乱が生じている。

とはいえ、釈迦・阿弥陀・薬師の三如来像（県指定文化財）をはじめとして、前に列記した（44頁参照）数多くの貴重な文化財を今に伝える。

（高木）

註

1. 梅原末治「肥後國橋崎の古墳に就て」『歴史と地理』第12巻第6号、1923年、京都。
2. 高木恭二「肥後南部の石棺資料（1）」『宇土市史研究』第2号、1981年、宇土。
3. 富樫卯三郎「女塚古墳」『宇土市の文化財』第1集、1972年、宇土。
4. 富樫卯三郎「三日大曾の宝塔残欠」『宇土市の文化財』第3集、1977年、宇土。
5. 製作年代については次の文献を参照した。大倉隆二ほか『県内主要寺院歴史資料調査報告書（2）熊本市～城南地区 資料篇』熊本県立美術館、1983年、熊本。
6. 井上正「肥後國安國寺利生塔考」『熊本史学』第42号、1973年、熊本。
7. 高木恭二「如来寺仏像の胎内銘について」『宇土市史研究』創刊号、1980年、宇土。
8. 上田純一「寒巖義尹、肥後進出の背景—北條氏得宗勢力と木原・河尻氏—」『熊本史学』第57・58合併号、1982年、熊本。
9. 井上正「古保里荘」『宇土市史研究』第3号、1982年、宇土。
10. 小山正『大慈寺記』大慈寺、1968年、熊本。
11. 註6書に同じ。

補註

布目順郎「如来寺仏像胎内から出た絹製品について」『宇土市史研究』第2号、1981年、宇土。

出土遺物観察表

第 4 表 瓦 類

番号	出土地	器種	法量 (厚さ) (cm)	形態・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	T 4	平瓦	1.8	側縁は垂直に切り落としている。 凹面はていねいなナデを施す。 凸面には離れ砂が付着。	精緻	不良 土師質	灰白色	
2	T 4	平瓦	1.9	側縁は垂直。 凹面は円滑に仕上げている。 凸面には離れ砂が付着。 いぶしが行なわれているようで表面は 黒色を呈する。	精緻	不良 土師質	黒色	
3	堂地表採	丸瓦 I 類	2.1	側縁は深い面取りが行なわれている。 凸面は、右捻りの縄目叩き痕を板状工 具約 2 cm 幅でナデ消している。 凹面には、細かい布目痕が残る。	白色砂粒 を含む	良好 須恵質	青灰色	
4	堂地表採	丸瓦 I 類	2.1	側縁は 2.3 cm 程度の面取り。 凸面は右捻りの縄目叩き痕が明確に残 り、部分的にナデを施している。 凸面には細かい布目痕が残る。	白色砂を 多く含む	良好 須恵質	青灰色	
5	堂地表採	丸瓦 玉縁 I 類	玉縁長 5.0	筒部との段差 1 cm。 筒部に対してやや斜に付けられてい る。 玉縁端・凹面のケズリは施されていない。	白色砂粒 を含む	不良 土師質	浅黄橙色	
6	堂地表採	丸瓦 先端部 I 類	先端部 1.1	先端部凹面は 3.5~4 cm の面取り。 凸面先端には、指頭庄痕が残る。	白色砂粒 を含む	良好 須恵質	青灰色	
7	堂地表採	丸瓦 II 類	2.1	径が大きい。 側縁は分割時の面。 凹面横方向のハケ目。	層をなす	須恵質	灰白色	
8	5 区 遺構面直 上	丸瓦 II 類	1.6	筒部の径が大きい。 側縁は小さく面取りを数回行なってい る。 凸面は縦方向のハケ目の上からナデを 施す。 凹面は縦方向に浅いハケ目が残る。	層をなす	良 須恵質	灰色	
9	5 区 盛土	丸瓦 II 類	1.8	凸面 格子目叩き痕。 凹面 ていねいなナデ調整。	層をなす	良 須恵質	褐灰色	

10	5 区 盛土	丸瓦 先端部 Ⅱ 類	1.5	側縁・先端とも直角に切り落されている。 凸面はわずかに格子目叩き痕を残す。 凹面は、斜め方向、端部は横方向の板状のナデ。 径が大きい。	層をなす	良 須恵質	灰色	
11	5 区 旧表土	伏間瓦	平瓦部 2.2 丸瓦部 2.4	丸瓦部から平瓦部にかけてはなめらかなカーブを描く。 凸面平瓦部から丸瓦にかけて、細かな布目痕が残り、丸瓦部を中心に縄目叩きが施されている。 凹面は無調整。	白色砂を含む	良 土師質	にぶい 橙色	
12	5 区 盛土層	塼 Ⅰ 類	2.2	縁部は直角に切られている。 表面には糸切り痕を残す。 裏面は、凸凹がある。	精緻	良 土師質	にぶい黄 橙色	
13	5 区 遺構面直上	塼 Ⅰ 類	2.3	縁部は直角。 表面の調整は不明。 裏面縦方向の板状ナデ。	精緻	良 土師質	にぶい黄 橙色	
14	5 区	塼 Ⅱ 類	2.3	縁部はていねいにごくわずかに斜に切られている。 表裏ともナデ調整と思われる。	精緻 うすく層をなす	不良	浅黄色	
15	5 区 SB-01 P 8	塼 Ⅱ 類	2.6	縁部はごくわずかに斜に切られている。 表裏ともなめらか。調整は不明。	精緻 砂を含む	不良	オリーブ 黒色	
16	5 区 旧表土	塼 Ⅱ 類	2.6	縁部はごくわずかに斜めに切られている。 表面はなめらか、裏面は凹凸がある。 調整は不明。	砂を含む	不良	オリーブ 黒色	
17	5 区 遺構面直上	目板瓦	1.7	側・表面はナデ。 裏面はかたわくのあとをのこす。	精緻	瓦質 良	灰色	
18	T 4	目板瓦	2.0	表面はヘラナデ。 裏面は貼付のための条痕が残る。	砂を含む	不良 瓦質	灰黄色	
19	5 区 遺構面直上	目板瓦	1.6	表 ナデ？。 裏 貼付の刺突。	精緻	不良	灰褐色	

20	5 区 盛 土	軒平瓦	1.9	表面はなめらか。 文様の一部が残るが全体は不明。 側縁は垂直に切られている。 垂れ貼付の刺突。	精 緻	良	暗灰色	いぶし瓦
21	T 4	平瓦?	1.9	端部面取り。 両面に、はなれ砂が付着。	砂多し	不 良 須恵質	灰オリーブ 色	

第 5 表 土 師 器

番号	出土地	器 種	法 量 (口径) (器高) 底径 (cm)	形 態 ・ 手 法	胎 土	焼 成	色 調 (外面) (内面)	備 考
22	5 区 SB-01 P 8	坏	11.1 3.2 5.9	体部やや外反、口縁端部丸味をもつ。 わずかな上げ底。底部回転糸切り。 磨減が著しい。	粗 い 石英粒含	やや甘い	黄褐色 暗褐色	
23	5 区 SB-01 P 8	皿	10.4 1.3 7.1	体部・口縁端部共に丸味を持つ。 やや上げ底気味。回転糸切り底。 磨減がひどい。	密 わずかに 砂粒含む	普 通	茶褐色	器壁厚い
24	5 区	皿	10.8 1.5 9.4	体部・口縁端部共に丸味をもつ。 底部回転糸切り。板目を残す。	粗 い	普 通	褐 色	器壁厚い
25	5 区	坏	12.8 3.1 7.0	体部外反、口縁端部尖り気味。 回転糸切り底、磨減ひどく小さなヒビ われ生じる。	やや粗い 石英粒等 含む	普 通	黄褐色	
26	5 区	甗	推24.8 — —	口縁部片、ゆるやかに「く」の字状に 外反。口縁端部丸味帯。 外面一ナデ。磨減著しい。	粗 い 雲母・角 閃石等多 く含む	普 通	淡い黄褐色 暗褐色	

第 6 表 須 恵 器

番号	出土地	器 種	法 量 (口径) (器高) 底径 (cm)	形 態 ・ 手 法	胎 土	焼 成	色 調 (外面) (内面)	備 考
27	T 4	甗		外面一格子叩き、内面一ハケ目(ヨコ)	密	やや甘い	赤味ある 茶褐色 灰黒色	

28	T 4	甕		外面—格子叩き、内面—ハケ目(ヨコ)	やや粗い 砂粒含む	普通	茶灰色 暗茶灰色
29	T 4	甕		「く」の字状に外反する口縁部片。 外面—格子叩き後ナデ。 内面—板によるヨコナデ、その後斜め ナデ。	粗い 砂粒含む	やや甘い	暗灰色 灰褐色
30	5 区 SB-02 P 3	甕		外面—縦横の平行叩き。 内面—同心円文。	密	良好	青灰色
31	5 区 SB-01 P 16	甕		外面—縦横の平行叩き。 内面—同心円文?	密	良好	青灰色
32	5 区 SB-02 P 7	高台付 坏	推15.3 3.2 推11.4	体部丸味もつ、ナデ。	普通	良好	赤味おび た茶灰色 青灰色
33	T 6	甕		口縁部片。強く外弯し、端部丸味も つ。 外面—口縁から頸部にかけてヨコナデ、 肩部は叩き。内面—ハケ目	普通	甘い	白灰色 黒灰色
34	T 6	甕		口縁部片、強く外弯し、端部は角ば る。 外面—ヨコナデ、内面—ヨコハケ。	普通	普通	赤味がかる 黒灰色
35	T 8	甕		胴部片。外面—格子叩き。 内面—同心円文。	やや粗い 砂・石英 粒含む	普通	やや赤味 おびた黒 灰色 黒灰色
36	堂地表採	甕		頸部片。沈線・櫛描波状文によって施 文。 内面はナデ。	やや粗い 砂粒含む	良好	灰黒色 暗灰色
37	堂地表採	高 坏		脚部欠く、体部丸味をもち外弯。 内外面共にヨコナデ。	密	良好	灰褐色 灰 色

38	堂地表採	蓋		上面にヘラ記号、ナデ。	密	良好	黄灰色 茶灰色	上面に自然釉
39	堂地表採			外反する頸部片。 外面一叩きのあとナデ。内面一ナデ。	やや粗い	普通	黒灰色	
40	堂地表採	坏	推 6.1	高台付底部片。高台はりつけ。 内面一ナデ、ロクロ整形。	普通	良好	黒っぽい灰色	

第 7 表 摺 鉢

番号	出土地	器種	法 量 (口径) (器高) 底径 (cm)	形 態 ・ 手 法	胎 土	焼 成	色 調 (外 面) (内 面)	備 考
41	T 4	片口の 摺鉢		口縁外反、端部やや肥厚し、丸味をもつ。 外面ナデ、内面4～5本単位のカキ目を下から上へ施す。	やや粗い、 細かい砂粒を含む	やや甘い	黒灰色 灰褐色	土師質
42	T 4	片口の 摺鉢		口縁端は、やや内傾する。 外面は部分的に縦ハケ、後ヨコハケ、 内面は、ヨコ・ナナメ方向のハケ目、 その後7本単位以上のカキ目。	密	普通	暗灰褐色	
43	T 4			底部から胴部へ外斜し立ち上がる。 底部が極端に薄い。 外面の胴部下半は、ヘラ削り。 内面は、ほぼ3mm間隔で縦方向の条痕。	粗い 砂粒含む	やや甘い	赤っぽい 茶灰色 黒灰色	
44	5 区			口縁部直立。外面はナデ。 内面はハケ目。	やや粗い	普通	暗灰色	
45	T 5 盛土		11.4	外面は部分的に縦ハケ、その後ナデ。 全体的に指痕が残る。 内面はヨコ、ナナメ方向のハケ目、 その後11本単位のカキ目を、内面見込み から施す。	普通	普通	灰色がかる 黒色 灰黒色	
46	5 区	片口の 摺鉢		口縁部わずかに肥厚。 外面は、部分的に縦ハケ、その後全体的 にヨコナデ。 内面は、片口部を除き、ヨコ・ナナメ のハケ目。 片口部は、指押えか？	やや粗い 1～2mm の砂粒含 む	良	灰茶褐色	

47	6 区	播 鉢	25.4	口縁端部やや肥厚、体部直線的、底部やや上げ底。 外面は部分的に縦ハケ、その後ヨコナデ、底部付近ヘラケズリ。 内面は、ヨコ・ナナメの櫛状のハケ目その後カキ目を11本単位で、内面見込みから施す。	密	普通	白灰色	
			9.6				茶灰色	
			11.8					

第 8 表 火 鉢

番号	出土地	器 種	法 量 (口径/器高/底径) (cm)	形 態 ・ 手 法	胎 土	焼 成	色 調 (内 面) (外 面)	備 考
48	T 7	火 鉢	19.8	体部外反し、底部に4個の脚、胴部に突帯を有す。 器面の剝離がひどく、調整等不明。	粗 い 砂粒多い	甘 い	白褐色 黒灰色	
49	T 4	鉢		口縁下に二条の貼り付凸帯。 凸帯間に縦方向の平行線文。 3重の階円文のスタンプを施す。 外面—ヘラナデ、内面—ハケ。	やや粗い 石英粒含む	普通	淡茶褐色	
50	T 4	鉢		口縁部内傾、口縁下に貼り付突帯。 突帯上に菊花文のスタンプ。 内・外面ともにヨコナデ。	粗 い	普通	青灰色 白灰色	
51	T 4	鉢		口縁端部内面つまみだし上面を平坦に成形。 内・外面共にヨコナデ。	粗 い	普通	茶褐色	
52	5 区	鉢	推14.4	底部片、磨滅ひどく調整不明。	普通 砂粒・雲母片を含む	甘 い	黄褐色 暗褐色	

第 9 表 陶 器

番号	出土地	器 種	法 量 (口径/器高/底径) (cm)	形 態 ・ 手 法	胎 土	焼 成	色 調 (内 面) (外 面)	備 考
53	T 4	壺	10.3 26.8 18.6	肩張り、口縁外反。幅の広い平底。 外面—全面に光沢ある黒釉（一部無釉、または釉がわれ、クレーター状になった部分あり。） 内面—胴部上半は叩きのあとナデ一部暗茶色の釉がかかる。	密	良 好	黒 色 赤味のある暗茶色	
54	T 4	壺	推10.5	口縁部片、縁味おびた黒茶色の釉かかる。 肩部以下に部分的に釉かかる。 内面—叩き。	密	良 好	赤味ある暗茶褐色	

55	T 4			常滑? 外面—一部格子目状の叩き目、下部縦方向のハケ目。 内面—横方向のナデ、一部に指頭圧痕あり。	粗い かなりの砂粒・石英含む	良	濃い茶褐色 茶褐色	
56	T 4	壺		胴部片。 外面—黒色の釉がかかる。 内面—ロクロ痕。	黒灰色 緻密	良	黒色の釉 茶褐色	
57	T 4	燈明皿	(5.6) (8.0) 3.4 45	ロクロ整形、回転糸切底。	密 砂粒含む	良	暗褐色	
58	T 4			外面—下部に2条の沈線。 内面—ヨコナデ、一部指の圧痕。	やや粗い	良	黒褐色 赤味ある茶褐色	
59	T 4		10.3	底部から胴への立ちあがり部分。 外面—上部に茶褐色の釉。 内面—ロクロ痕、全面釉。	緻密	良好	赤っぽい茶褐色 深緑色の釉	
60	T 7	羽釜		口縁部直立。口縁下にツバをめぐらせ、口縁部から外耳をつける。 ヨコナデ。	砂・雲母粒含む	良好	黒灰色	

第10表 陶磁器

番号	出土地	器種	法量 (口径 器高 底径 cm)	形態・手法	胎土	焼成	色調 (外面 内面)	備考
61	5区 旧表土	碗		青磁蓮弁文碗口縁部片。 体部やや外反して立ちあがる。 口縁端部もわずかに外反。	緻密 灰白色	良好	深緑色の釉	口縁—くちはげ
62	5区 盛土最下層	甗?		胴部片。器面全体に黄緑色の釉。 外面は、さらに白色釉を上半にかける。	緻密 赤味おびた茶褐色	良好	茶味がかかる黄緑色の釉	
63	T 7 崖面	碗	10.6 5.1 4.1	網目状文を内外にもつ染付碗。 伊万里焼と思われる。	緻密 白色	良好	薄い緑白色の釉	高台内部にも文様

64	堂地2372 表採	碗	5.4	高台付青磁碗。見込みに「福」という文字をヘラ描き。 高台内は露胎。	緻密	良好	深緑色の釉	
65	堂地2372 表採	碗		青磁碗口縁部片。 体部は丸味をもち、口縁部やや外反。	緻密 茶灰おびた白色	良好	灰緑色の釉	

第 11 表 石 製 品

番号	出土地	器種	法 量 (いすれ も現状) 長・幅・厚	形 態 ・ 手 法	石 材	備 考
66	T 4		10.2 9.6 5.4	折損部以外は、全面磨いて面取り。使用により一方が傾斜。	天草陶石	
67	T 7		16.7 10.5 4.5	折損部と端部以外は全面磨いて面取り。 使用により傾斜生じている。	砂岩製	

第 12 表 周辺地域分布調査関連遺物

番号	出土地	器種	法 量 (口径・器高・ 底径) (cm)	形 態 ・ 手 法	胎 土	焼 成	色 調 (外 内 面)	備 考
75	女塚 表採	鉢		突帯文付縄文土器口縁部片。	粗い 砂粒等多く含む	普通	暗茶褐色	
76	女塚 表採	甕		須恵・胴部片。 外面—格子叩き残るが自然釉のため不明瞭。 内面—同心円文。	緻密	良好	黒茶色 暗灰色	同一個体と思われるもの1点あり
77	女塚 表採	甕		須恵胴部片。 外面—格子叩き。 内面—同心円文。	密	やや甘い	淡茶灰色	
78	下宮 神社 表採	甕		須恵胴部片。 外面—格子叩き。 内面—同心円文。	密 砂粒わずかに含む	普通	黒灰色	

79	花岡町 宇土ゴルフ場	甕		須恵、肩の部分か？ 外面—格子叩き。 内面—同心円文、ヨコナデ。	普通 わずかに 砂粒含む	良好	白っぽい 灰色 (一部) (黒灰色) 黒味おび た灰色	
80	下宮神社 表採	皿？	9.5	須恵底部片。 底部はヘラ切りのためやや上げ底となる。	緻密 砂粒含	やや甘い	茶褐色	自然釉か かる。
81	寺の前 表採	壺	8 6.6 6.6	口縁部短く外反、胴部丸味をおびる。	密 砂粒多し	良好	黄褐色 赤褐色	土師器
82	三日大門 2535番	蔵骨器	12.3 19.7 12.7	高台付の短頸壺。胴部最大径22.4cm。 口縁部短かくやや外反。 口縁端部は丸くおさめる。 外面—ヨコナデ、底部付近ヘラケズリ。 内面—ナデ。	やや甘い	良好	明るい灰 色	蓋は土師 器の坏
83	三角町 波多内 756番	蔵骨器	11.1+ α 20+ α 14.1	外面—タタキのあとヨコナデ。 底部付近ヘラケズリ痕残る。 内面—上半部ヨコナデ。 下半はタテ方向ナデ。	緻密	良好	灰色	S24年 出土

第 4 章 総 括

如来寺跡をはじめとする今回の発掘調査、及び周辺地域分布調査の内容については上文で述べたごとくである。調査によって得られた成果と問題点を以下に述べて結びにかえたい。

寺 域

発掘調査を行なったのは数箇所、極めて限られた範囲であり、これによって寺域や伽藍について語るにはやや資料不足であるといわざるを得ない。そのため発掘調査以外の周辺地域石造物調査や現況表面観察、史料調査等を行ない、漠然とではあるが寺域を推定することが可能となった。

それによると、南には大門^{だいもん}があつてその前面に寺前の名が残る。西側には何らの地名や地上標識は残っていないが、北から延びてきた丘陵が一段高くなって西北側を劃しており、その更に西には小さい谷が入っている。北側も同様に丘陵によって劃され、東北隅には小さい溜め池がある。東側も一段高く丘陵が延び、その外側は急崖となって谷になる。

この内側が如来寺の四至となろうが、その内部が全て如来寺の寺域であつたとすることには無理がある。『古今肥後見聞雑記』^(註1)(史料21)に、大門の近くには小寺や尼寺の跡があつたと記されているところからみても、この門は如来寺の門というより、如来寺を含めたいくつかの寺の総門であつた可能性がある。このうちの尼寺がおそらく報恩寺とみてよからうから、報恩寺は六地藏が建っている付近にあつたと考えるのが最も有力である。そして如来寺は、その北東側にあたるところで、三方を丘陵によって取り囲まれた通称堂地^{どうじ}付近にあつたとみられる。

伽 藍

如来寺跡の位置が明らかにでき、その範囲をかなり限定できるようになったものの、伽藍を推定する材料は極めて乏しいといわざるを得ない。それでも現状から推定できる平面形として主軸は南北を通らず東に偏った長方形プランが想定できる。

禅宗寺院の伽藍^(註2)として考えられる一般的な配置は、山門を入れて正面に仏殿がありその手前の東に庫裡、西に僧堂をおき、仏殿の奥に法堂(本堂)、この法堂と仏殿の間の左右に鐘楼・鼓楼をおき、法堂のうしろに方丈がくる。

ここで思い出されるものに、如来寺の開山である寒巖義尹が如来寺を開いて14年後に建立した大慈寺(現在、熊本市野田町)の伽藍がある。大慈寺は、現在でも有数の曹洞宗寺院でありその伽藍配置を参考にすることが可能である。即ち、鐘楼、山門から入って正面に仏殿^(註3)があり、その奥に本堂がある。参道の東に経堂があつて仏殿の東には庫裡・後堂がつづき、東北側

の奥まった位置に方丈がある。この方丈のうしろには池が掘られ、東には歴代の住職の墓地がある。その範囲は、南北約190m・東西約100mをはかり、長方形をなす。如来寺伽藍推定地の規模は、南北約150m・東西約80mをはかり大慈寺のそれよりやや狭くなる。

如来寺跡の中心部分の発掘を全く行なっておらず、また数年前に大幅な地形改変が実施されているということもあって、現状での類推は不可能である。なお、堂地の東に位置する丘陵上には、ミタビザクラと呼ばれるところがあり、そこが寒徹義尹を火葬したときの灰を集めたところと伝えられるが、この付近に歴代住職の墓地があった可能性^(註4)がある。

掘立柱建物跡・土壙墓群

今回の発掘調査において如来寺伽藍の一部をなす掘立柱建物跡が検出できた。堂地の東南隅第5トレンチSB-01がそれで桁行5間+α、梁行3間の柱間で総柱となる。西側は、近年削平が行なわれているため、これ以上どの程度延びるかは明らかではないが、東は高さ4mの急崖でありさほど延びるとは考えられず、南も一段低くなってこの部分は基壇状を呈する。しかもこの一段低くなった部分の基底部に瓦磚が検出でき、この基壇が磚積基壇であった可能性がある。原位置に残っていたのは1点であり断定的なことはいえないが、調査区内ではいくつか検出できたので恐らく間違いなからう。建物主軸はN-42°-Wであり、伽藍全体での各建物の向きが、これに平行ないしは直交するものであろう。

限られた範囲内での遺構検出であり、伴出遺物も極めて少なかったことによっても、この建物の性格を論じることは不可能であるが時期的には中世の古い段階である可能性が高く、如来寺に関連した遺構であることは疑い得ないであろう。位置的には如来寺伽藍の東南隅にあたる。

掘立柱建物跡の検出された地区に、その柱穴を切るような形で、10基の土壙墓も検出できた。土壙墓群には何らの標石も用いておらず伴出遺物もないことから時期推定の根拠を欠くが、この土壙墓は、当地が廃寺となって以後この付近に墓石使用の風が普遍化ようになる江戸中期までの中世後半～近世初期にかけて形成されたものであろう。

如来寺の変遷

寒徹義尹入滅後の如来寺についてはあまり史料もなく、その実体は不明な点が多い。しかし、貞和3年(1347)に足利直義が如来寺塔婆を肥後國利生塔となしているところからみても、このころはまだかなり大きな寺であったことがわかる。この塔がどのようなものであったかは、全国の利生塔遺存の例が全くなく知る術を持たないが、その多くが五重塔ないしは三重塔であったといわれることから、その様を彷彿とさせる。

如来寺の西約1kmに位置する寿勝寺を肥後國安國寺となし、如来寺と寿勝寺を含めた地域、いいかえれば古保里庄が足利室町政権の統治下にあったことを明示する。つまり、後醍醐天皇

以下の戦没者の菩提を弔う目的で建てられたものが実際には支配のための政治的意図にもとづくものであったことが明らかである。^(註5)

実際、こののちに古保里庄は厩所となり、正平11年(1356)には宇土壱岐守の領地となって当地の政治的中心地が宇土方面に移って如来寺の存在も影がうすくなり、むしろ意図的に潰された可能性がある。愛知県常安寺縁記(史料26)によれば、応永の頃(1394~1428)の如来寺は頽廢して随侍の僧なしといい、その折に如来寺にあった仏像のひとつとその脇土ふたつを共に、永樂錢百貫文で招請したのが現在の常安寺の本尊であるという。これによっても当時の如来寺の状態がどうであったかが想像されるであろう。

その後の如来寺・報恩寺が辿った道については既に前章で述べたとおりであり、その跡地は特に目立った活用はなされなかったようで、現在は桑畑の中に静かに眠っている。

(高木・木下)

(註)

1. 寺本直廉『古今肥後見聞雜記』1784年。(『肥後国地誌集』収録、新潮社、1980年、熊本)。
2. 石田茂作「伽藍配置の変遷」『日本考古学講座』6、河出書房、1956年、東京。
3. 小山正『大慈寺記』大慈寺記刊行会、1968年、熊本。
4. 現在では何も残っていないが、宇土市岩古曾町の如来寺境内に存する石造物の多くはこの地から運ばれたと考えられる。
5. 今枝愛真『中世禅宗史の研究』東京大学出版会、1970年、東京。

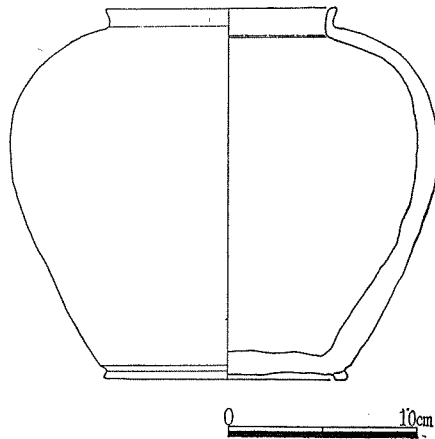
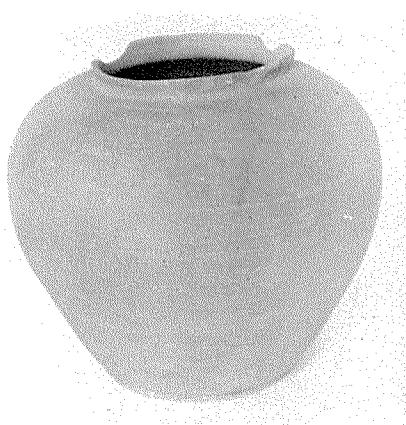
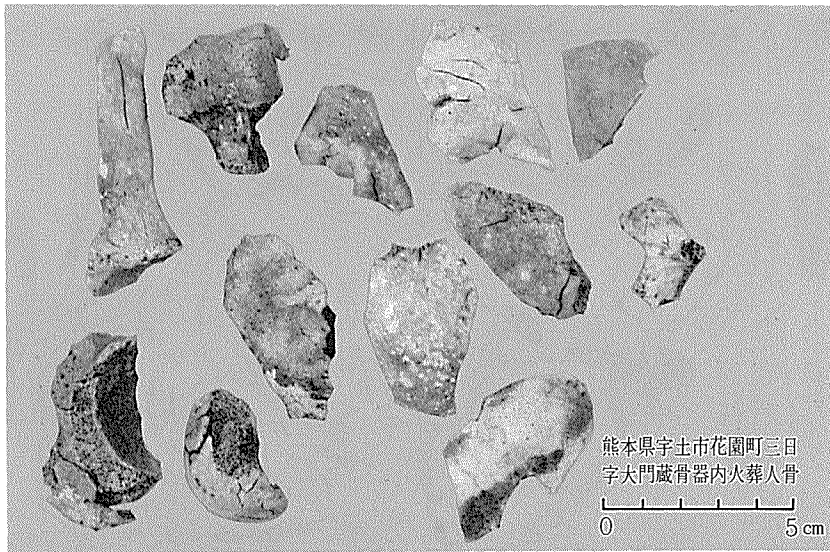
付 論

1. 熊本県宇土市花園町三日字大門出土蔵骨器内火葬人骨

産業医科大学教授（解剖学） 北條 暉 幸

ほぼ1体分の全身骨格を含むと推定される。骨格の破片の形態から、以下の所見が得られた。

1. 左側前頭骨の眼窩上の隆起が著明である。左側距骨滑車は幅広い。寛骨臼の残存部が大きい。右側橈骨の遠位端は大きい。これらの特徴から、本人骨は男性の可能性が強い。
2. 年齢を推定するためには、骨格のさまざまな部位の形態が用いられる。本人骨の場合、頭蓋の縫合以外には年齢推定のために役立つ部位が残存していない。残存して観察できた縫合は、いずれも断片的で、しかも外板において観察することができたもので、内板はほとんど癒合していた。このことから本人骨は熟年に達しているものと推定される。



2. 熊本県宇土郡不知火町大字浦上字迫出土蔵骨器内火葬人骨

産業医科大学教授（解剖学） 北條 暉 幸

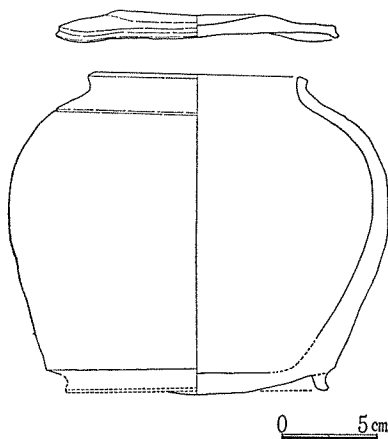
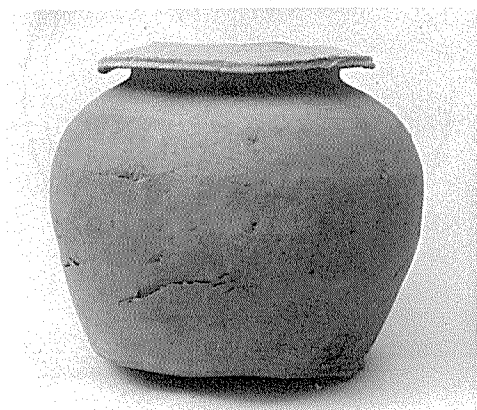
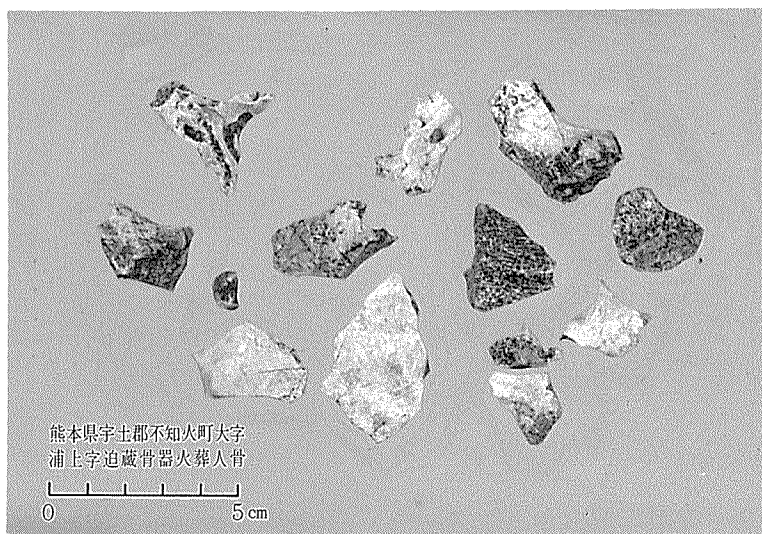
ほぼ1体分の全身骨格の破片と推定される。以下に、その観察所見を記す。

1. 左側大腿骨の近位端、即ち大腿骨頭は同骨頸と未だ癒合せず、両者は遊離し、明らかに生存中は骨端軟骨が存在していたことを示す。大腿骨遠位端にも、未だ骨端軟骨の存在を証明する、ギザギザの結合面が存在する。さらに、右側の第1大臼歯（上顎）と推定される歯の咬合面には、ほとんど磨耗が認められない。これらのことから、本人骨は10歳前後の子供の骨格と推定される。

2. 性別は、キメ手の骨格を欠き、推定不能である。

※蔵骨器についての所見は、下記文献に収録。

高木恭二・古城史雄「肥後の蔵骨器(1)―宇土郡不知火町浦上出土の蔵骨器―」『肥後考古』第4号、肥後考古学会、1983年、熊本。



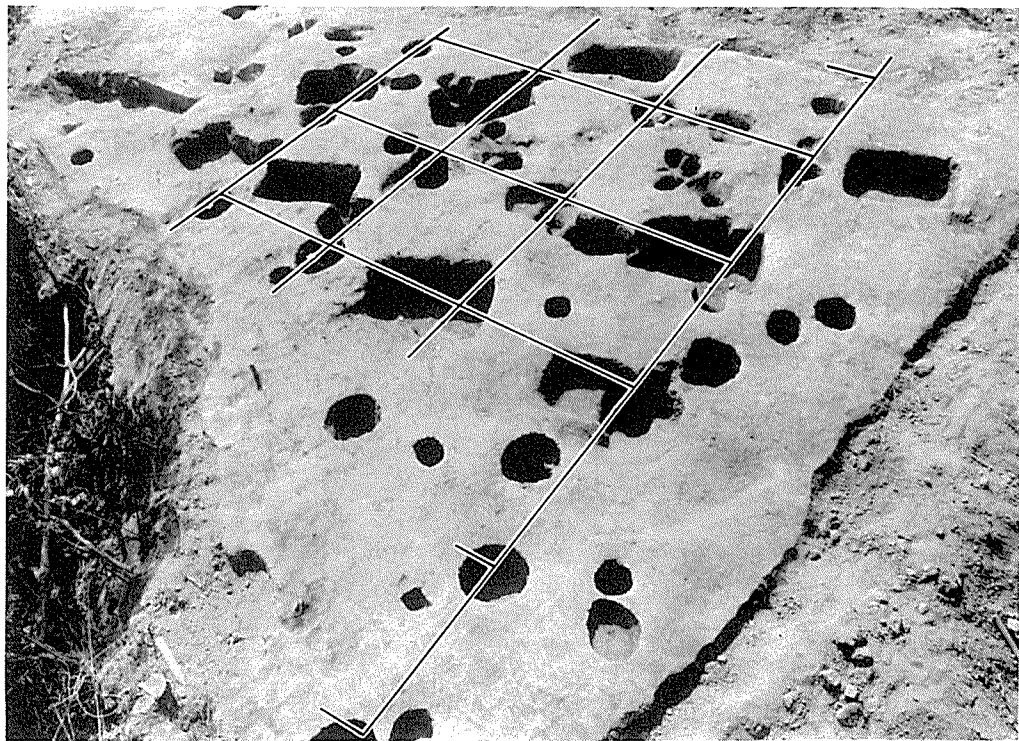
圖

版



空中写真





SB-01



SB-01



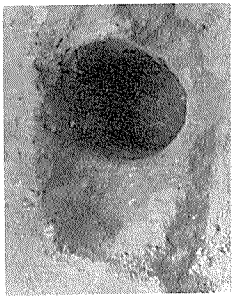
遺物出土状態



遺物出土状態



遺物出土状態



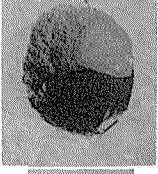
P 1



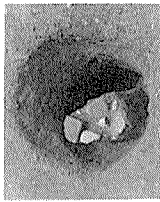
P 2



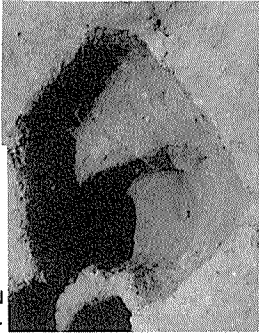
P 4 P 5



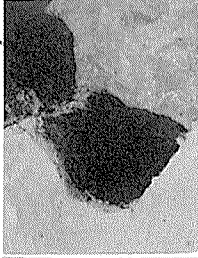
P 6



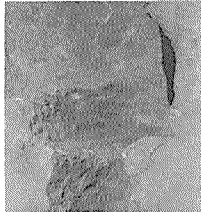
P 8



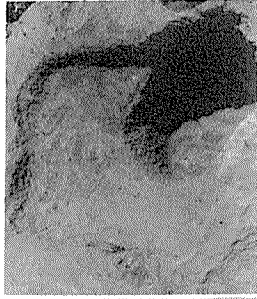
P 9



P 10



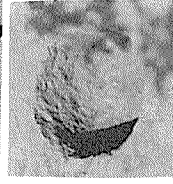
P 14



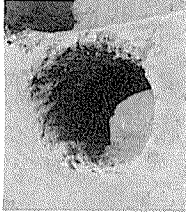
P 15



P 16

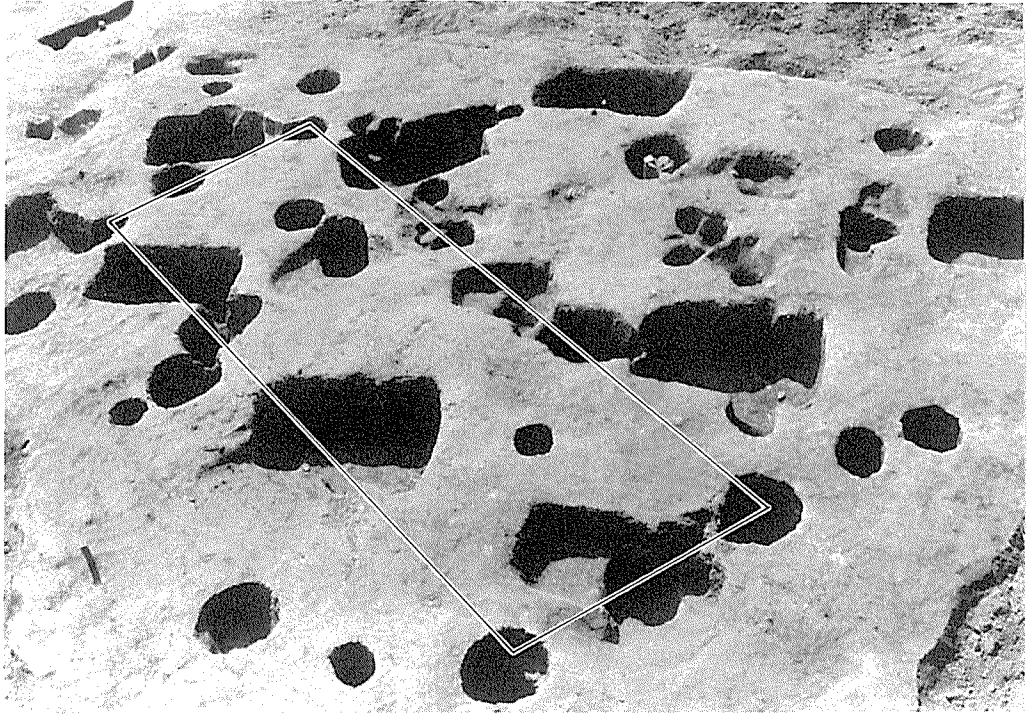


P 20



P 21

P 22



SB-02



土壌墓検出状態



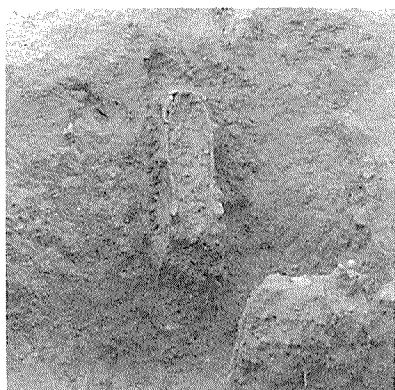
SK-01



SK-02



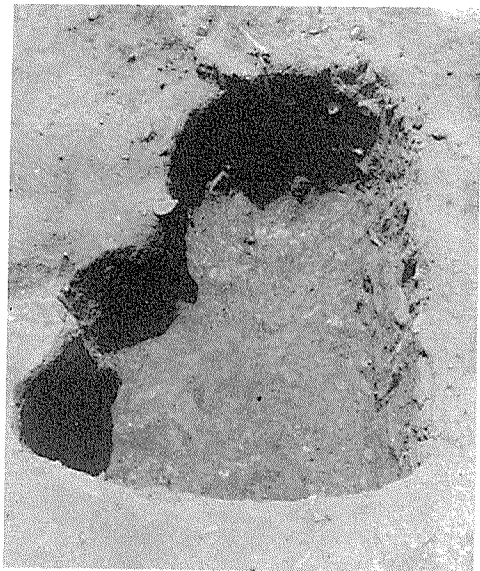
SK-03



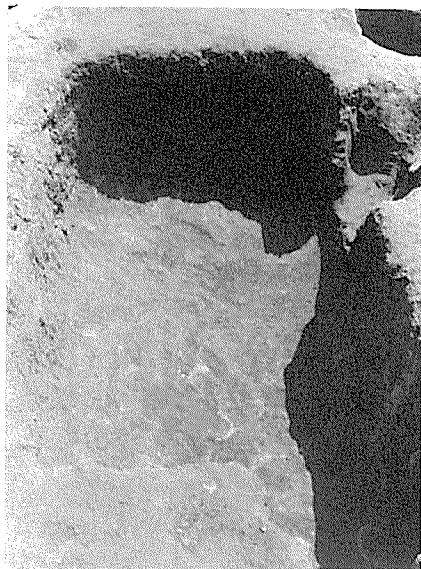
鉄製品出土状態



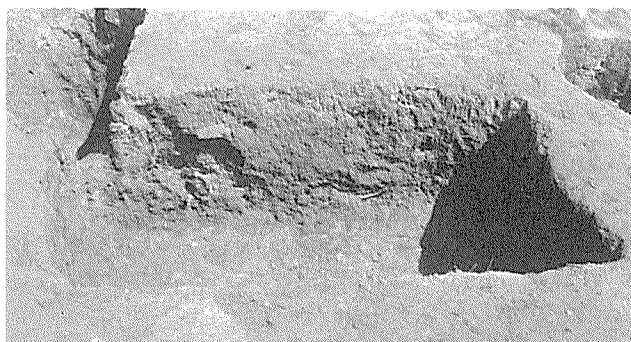
鉄製品出土状態



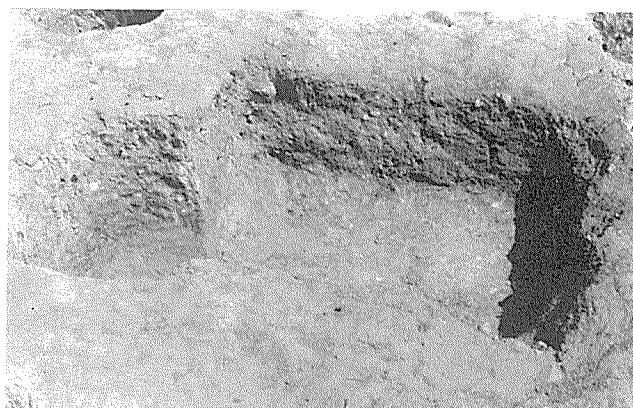
SK-04



SK-05



SK-06



SK-07



SK - 09



SK - 10



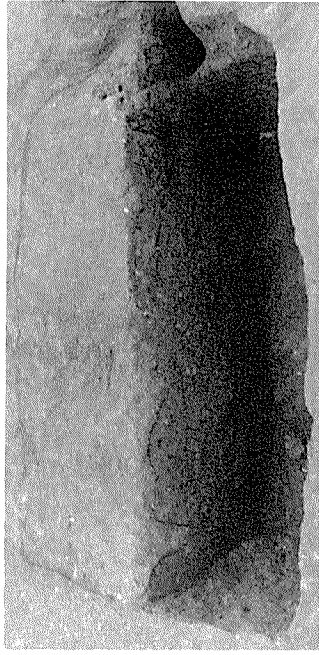
SK - 08



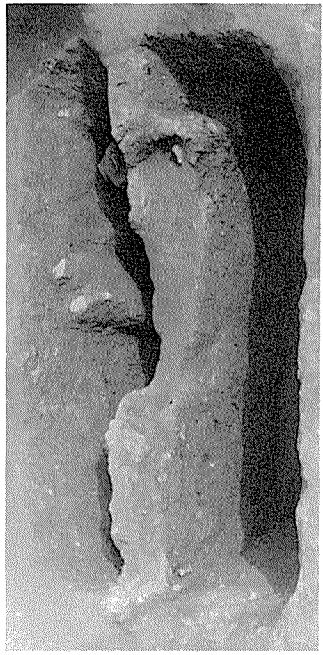
SK - 11



SK - 01



SK - 02



SK - 03



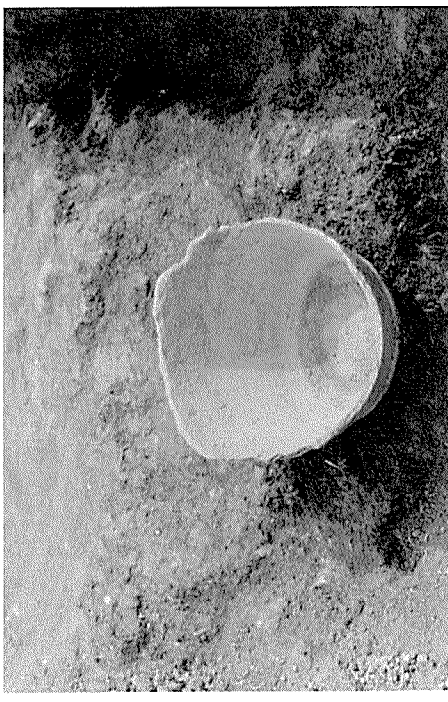
SK - 05



SK - 06



SK - 07



T-7 トレンチ遺物出土状態



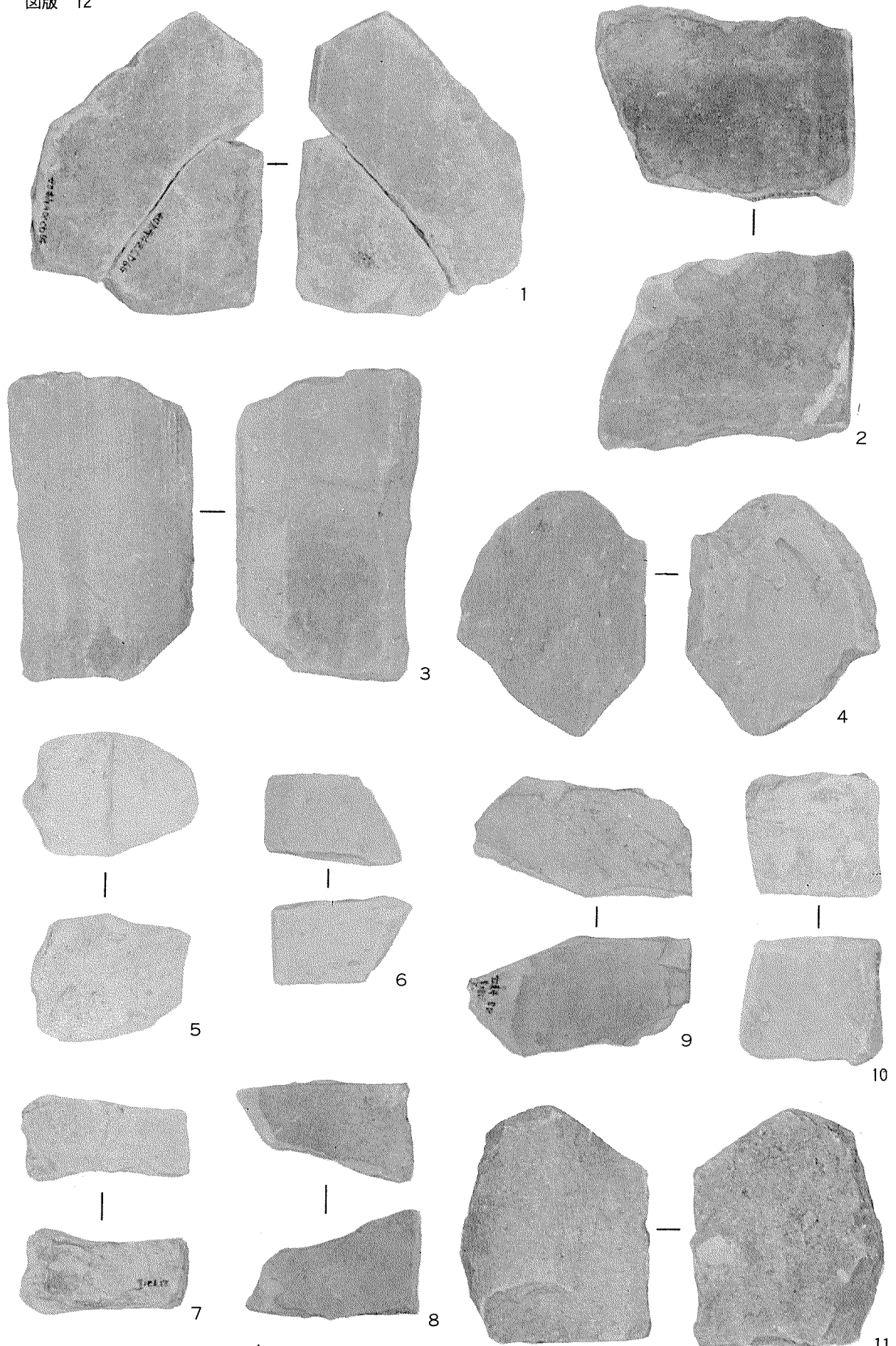
SK-13



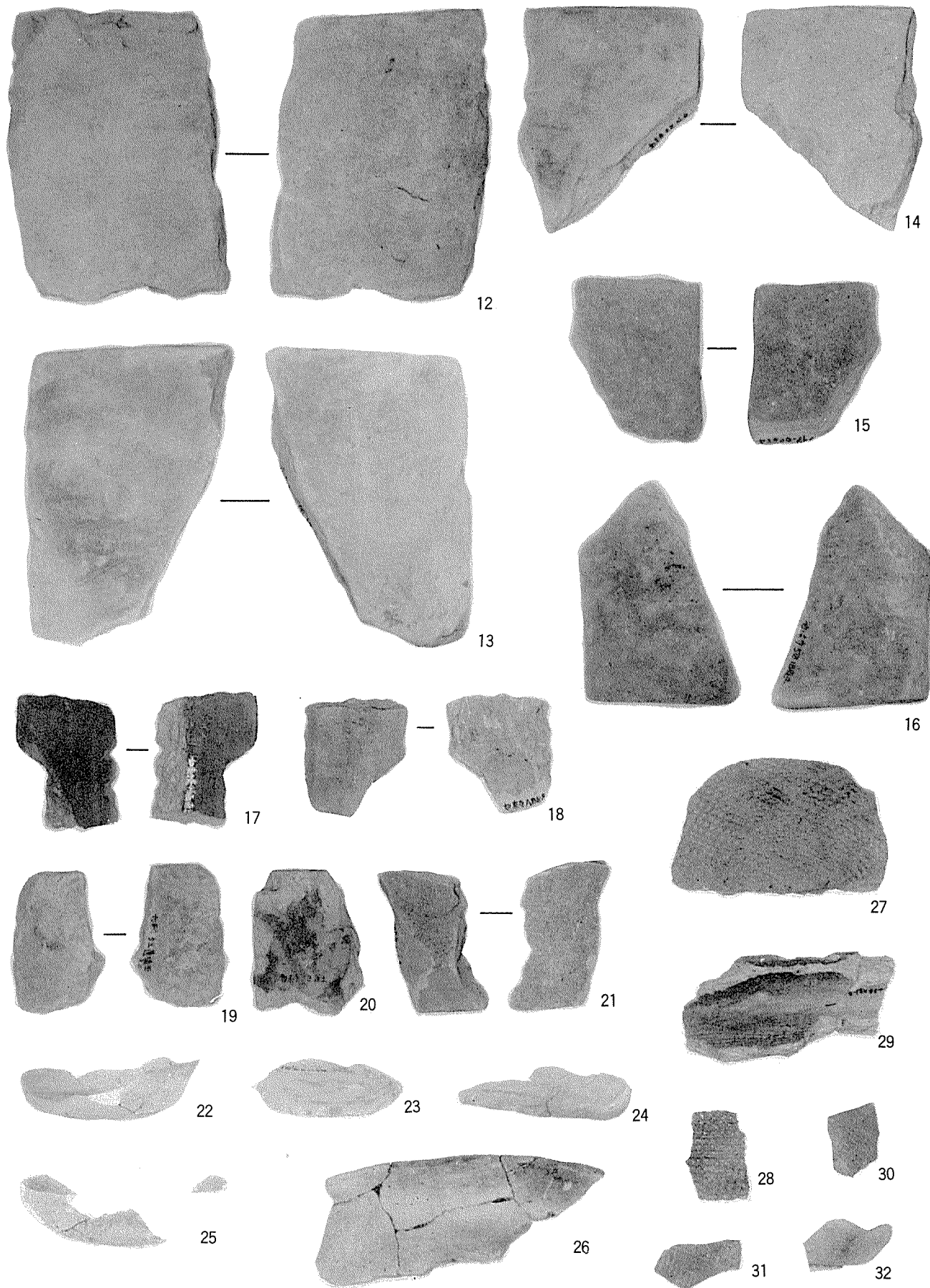
SK-12



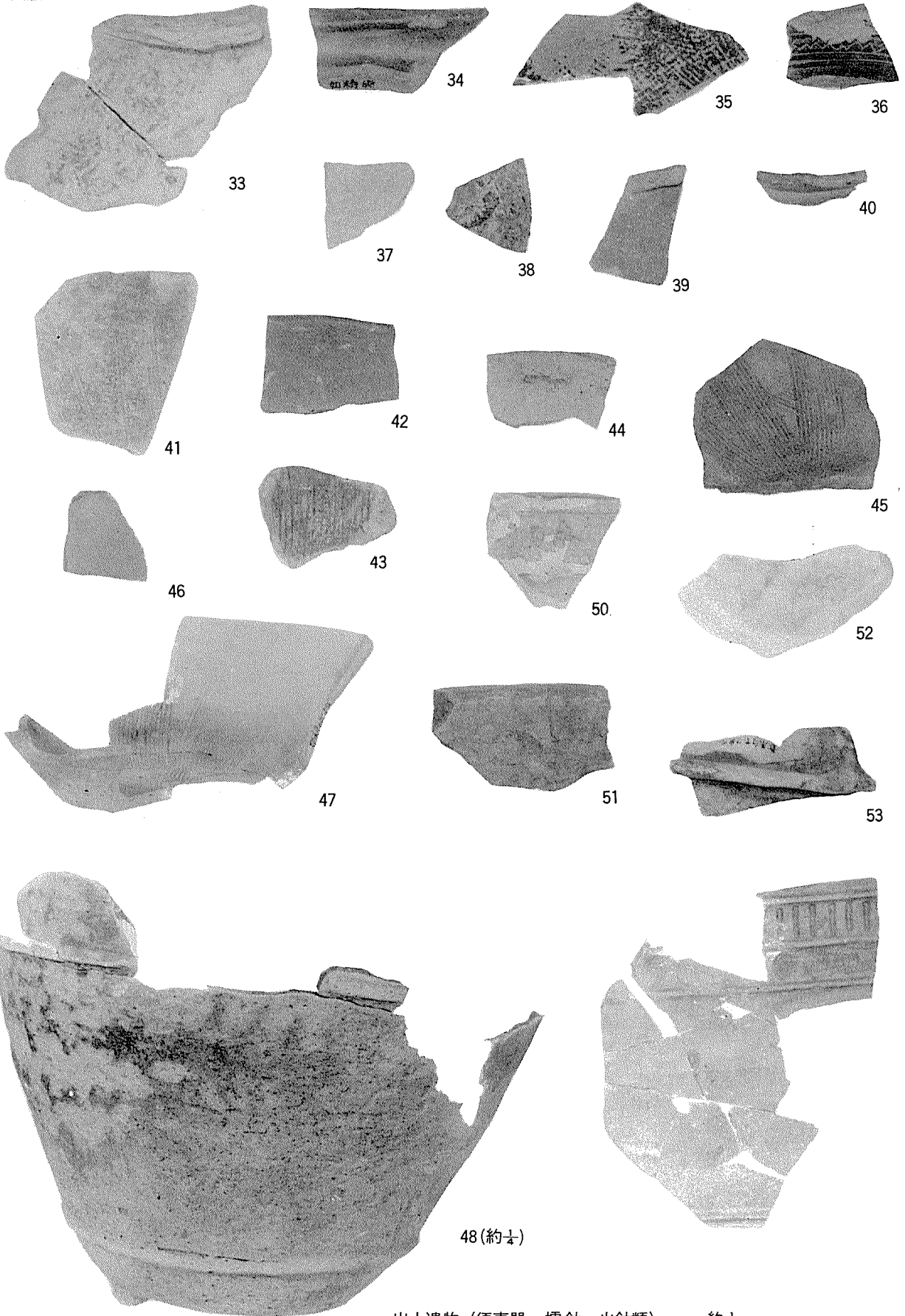
SK-12 馬歯出土状態



出土遺物 (瓦) 約 1/3



出土遺物 (瓦類・土師器・須恵器) 約 $\frac{1}{3}$

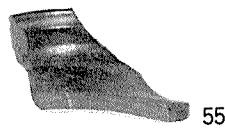


出土遺物 (須恵器・播鉢・火鉢類)

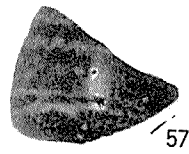
約 $\frac{1}{3}$



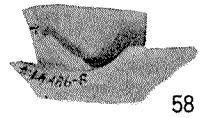
54



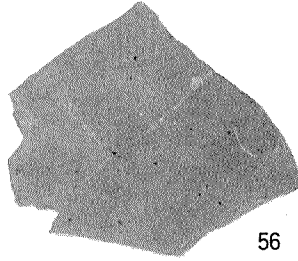
55



57



58



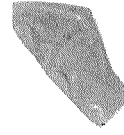
56



59



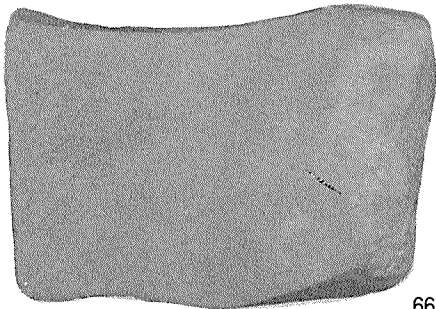
60



61



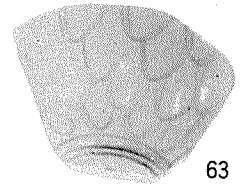
65



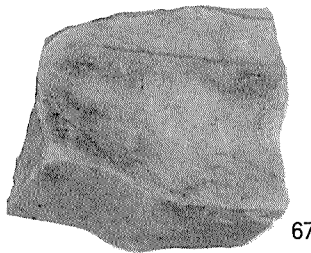
66



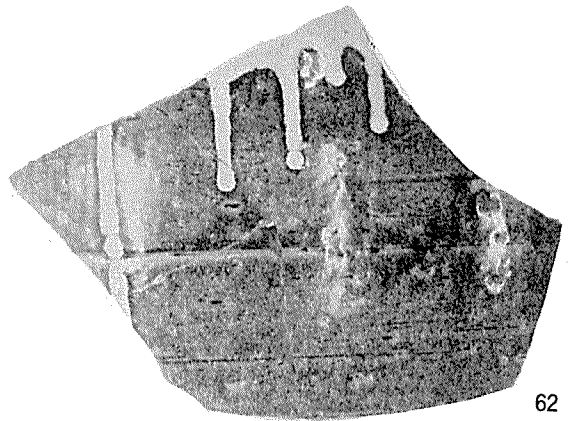
64



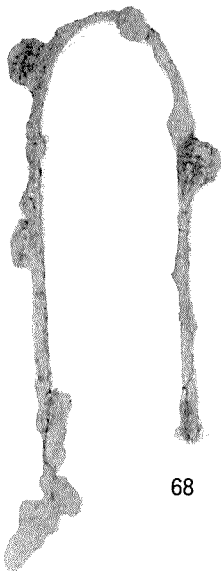
63



67



62



68



69



70



72



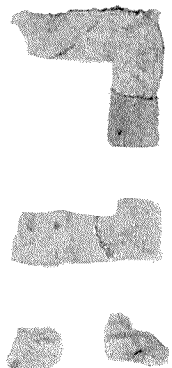
74

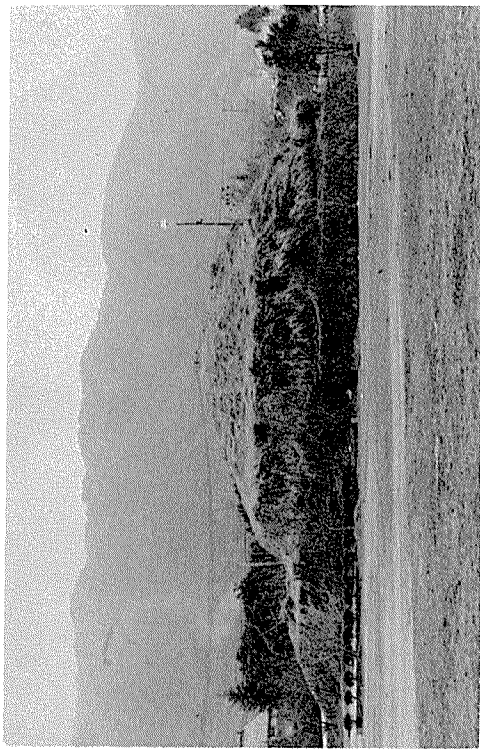


71

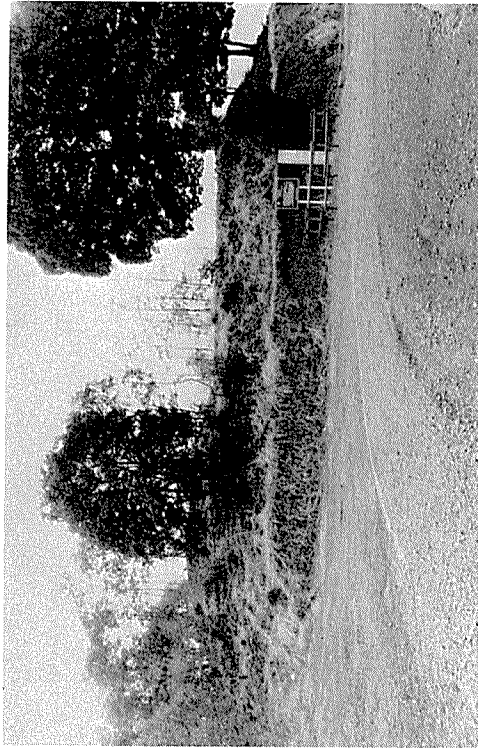


73





女夫塚古墳 (男塚)



楯崎古墳



女夫塚古墳 (女塚)



鬼の窟古墳



宝塔



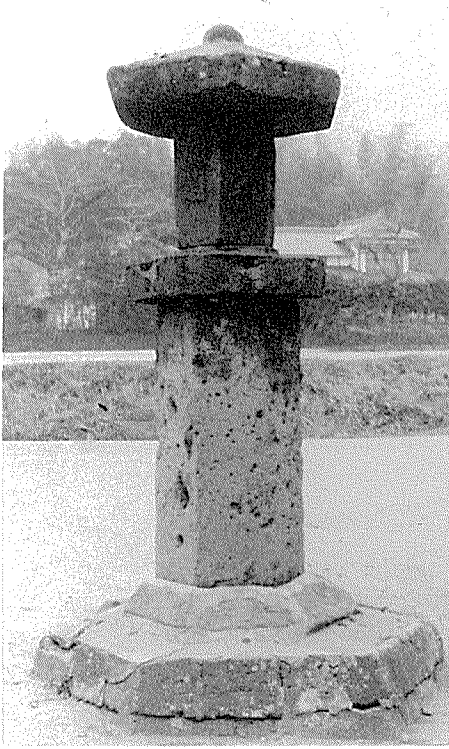
台座



三日天満宮厨子形石造物



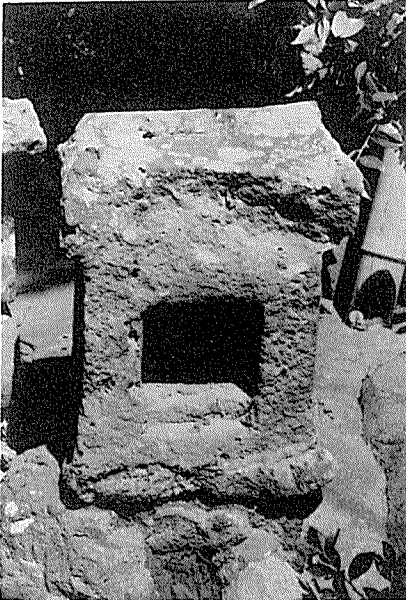
三日天満宮厨子形石造物銘文



三日六地藏



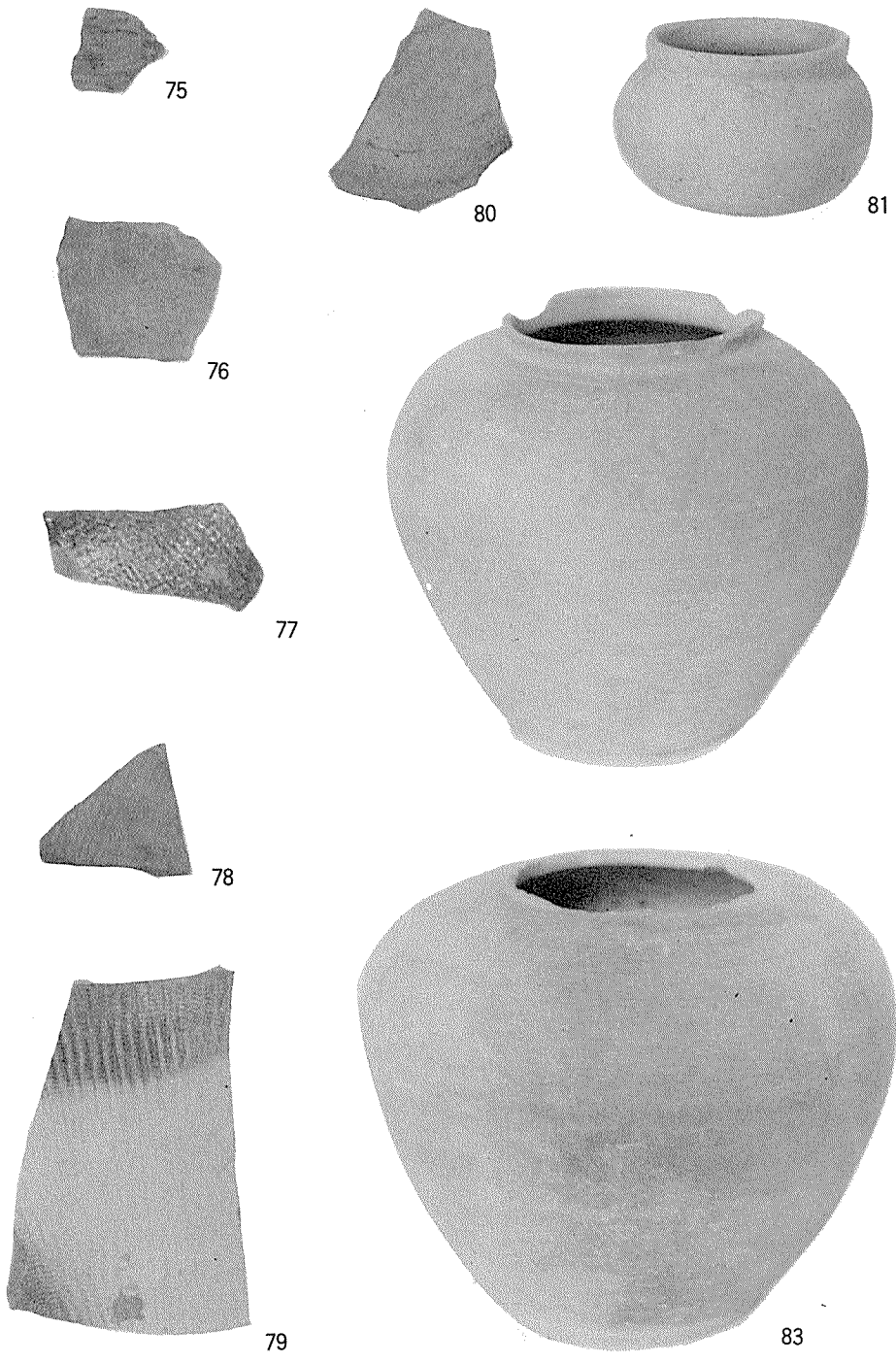
古保山六地藏龕部



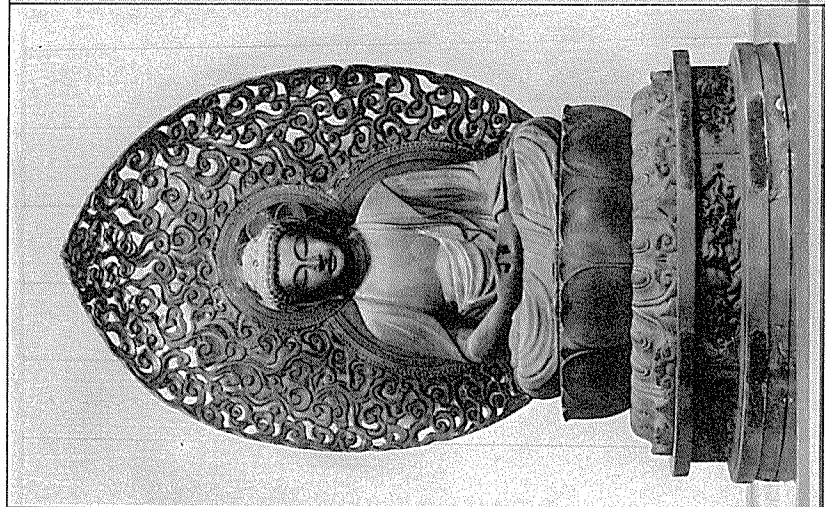
如来寺厨子形石造物



三日板碑



周辺地域分布調査関連遺物



1 阿弥陀如来坐像



2 釈迦如来坐像

(宇土市岩古曾町上古閑、如来寺所在)



3 藁師如来坐像

如來寺跡

宇土半島基部古墳群分布調査報告（Ⅲ）
宇土市埋蔵文化財調査報告書 第 9 集

昭和59年 3 月31日

編集・発行 宇土市教育委員会
熊本県宇土市浦田町51番地

印 刷 株式会社 秀 巧 社

依而略記以布世尔云

27 熊本縣社寺圖録

大日本肥後國熊本市東外坪井町 壺井根本千躰佛

曹洞宗德輝山報恩寺境内略圖

當寺ハ文永二年肥後國宇土郡古保里城主古保里越前守息女素妙尼ノ開基ニシテ本尊十一面觀世音ハ大慈寺開山寒巖法皇禪師ノ御自作也而シテ禪師ノ法嗣仁叟禪師開山藁一祖トス中頃鑿谷和尚現在ノ地ニ移シ中興ス實ニ永正元年凡ソ四百六年ノ往事タリ寺内ニ鑿谷和尚落雷ヲ降伏セシト云ヒ傳フル雷井アリ其形狀壺形ニ似タルヲ以テ加藤清正公熊本城ヲ築キ附近ニ字スル際寺境ヲ元壺井ト稱シ延テ地名トナルニ至レリ事績肥後國志ニ詳ナリ亦旧千躰佛ハ往古堀某氏ノ勸請ス所ナリシモ明治十年ノ兵火ニ焼失シタルヲ明治四十二年復興再勸請ニ着手シ漸ヤク旧觀ノ半ニ及ブト云々

明治四十二年孟冬

現住紫洲手記

28 如來寺墓石銘 (明治以前)

「安永三 甲午 天 五月朔

孝 岳 益 順 上 座

如來寺看坊

「天明八 戊申 年三月廿一日

果 山 大 日 上 座

如來寺兵知事兼監院

「寛政十一 癸未 年八月廿八日

禪 座 德 瑞 庵 主

如來知事

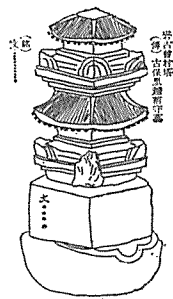
「天保二年

玉 山 太 珉

卯四月四日

明妹願ニ依テ三日村ニ當寺ヲ建立シ寒巖ノ自刻ナル釋迦阿彌陀藥師ノ
ト云安置シ三日山如來寺ト号スト云已上

土俗此越前守ト云ルハ是ニヨレハ文永年間ノ人ナレハ墓碑ニ文明ノ如
ク見タレ氏支干始石ノ面雨露雪霜ニイト損シテ定カニモ難見ケレハ文
永ナルモ知ルヘカラス然ル井ハ上人ノ傳ニモ能ク附合セリ



25 如來寺木造素妙尼像背面銘

明治十七年 甲申 旧六月廿六日ヨリ

再敷致

御脇立様 佛師

宇土郡宇土石之瀬町

屋号 四百二十五番

麦屋 内尾利平

々 悴長次郎

26 尾州春日井郡豊場

萬松山常安寺本尊略縁記

抑當寺の本尊釈迦如來は往昔西天竺優闍國の大王深く如來を恭敬供養
の餘り謂らく佛滅後末世の衆生仏經をきゝ奉るともいかんしてか如來
の尊容を見奉らんや願くはわれ尊容を剷刻奉り末代濁惡の衆生の為に
せんとはを大弟子迦葉尊者に相議し幸に摩利山の名木あり赤栴檀と称
す善根力の所感にして一たびその香をきくものは億劫生死のつみを脱
るゝときく即ち神通第一目連尊者をしてこれを得せしめ毘首羯摩天に
命じて如來の尊容三十二相八十種好を彫刻し奉れりこれ佛身を木像に
移し奉る最初なり實に生身の如來に異ならんや雨天にましまし衆生を
濟度したまふこと千二百餘年震旦ニ渡らせたまひて六百餘年を経たま
へり我朝一條院の御宇永延年中東大寺齋然法師入宋して拝請し奉り帰
朝後肥後國に伽藍を建立し安置し奉る如來寺と号するは是なり京北嵯
峨清凉寺の本尊和州法隆寺の本尊同木同作なり然るに應永年中當寺開
基家藤原朝臣溝口侯事ニ因て九州に下向す其頃如來寺大に頽廢して如
是の異像隨侍の僧なし故に俟永樂錢百貫文を寄附し此如來を招請即ち
當寺の本尊と仰奉る三国に三体の尊容不殘我朝に渡り玉ふ事佛法東漸
の佛敎あに疑ふべけんやよりて一たび恭敬禮拜の衆生生老病死の苦を
解脱し速に無上正等菩提を証せん現當兩益今猶右のことし委くは本縁
起に著明なり

毎年二月十五日國中貴賤當寺に群集して尊容を拜すること今猶如昔

聞_レ尹_ノ之_レ道_レ德_一下_レ詔_レ賜_二宸_ノ翰_ノ額_一及_二紫_ノ衣_一又_レ舉_二爲_二官_ノ寺_一一_レ世_レ稱_二法_ノ皇_ノ長_ノ老_一蓋_二以_二皇_ノ子_一也_一以下_レ略_二而_レ不_レ書_二詳_二寺_ノ記_一此_レ寺_ニ有_二泰_ノ明_ノ之_レ四_ノ至_ノ界_ノ證_ノ文_ノ境_ノ內_ノ方_一也_一又_レ正_レ安_一年_レ條_レ載_レ之_一
四_ノ町_ノ海_ノ邊_ノ牟_ノ田_ノ三_ノ十_ノ町_ノ寄_ノ附_ノ之_レ狀_一又_レ繪_二旨_ノ教_ノ書_ノ等_ノ有_二二_ノ七_ノ通_一寫_二其_一一_レ二_レ餘_レ略_レ之_一

大慈寺并大渡橋事薩摩入道尊覺注進狀別申狀 如此給令申沙汰可候
歎恐々謹言

弘安九年閏十二月二十三日

果園判

矢野豊後權尊殿

肥後國飽田南郷河尻大渡大慈寺長老義尹申地頭泰明寄進地并橋修造事薩摩入道尊覺注進狀披露候之處聞食之由被仰下候仍執達如件

弘安十年正月二十三日

陸奥守判

謹上相模守殿

肥後國飽田南郷河尻大渡大慈寺長老義尹申地頭泰明寄進地并橋修造事今年正月二十三日關東御教書令拜見候事且任御教書之旨可存知候恐々謹言

弘安十年三月九日

沙彌判

大慈禪寺長老

當寺ノ鐘銘ハ寒巖ノ作ナリ銘ハ略ス 弘安十年四月七日造伽藍檀主左金吾源泰明開闢當山住持傳法比丘義尹謹題

23 石瀨漫錄 卷之六

〔松岡肇氏藏〕

義尹字寒岩顯德帝第三子、建保五年誕矣、天性諄懿、不_レ膠_二世_ノ故_一、脫_二屣_ノ榮_ノ位_一披_二荆_ノ簞_ノ山_一、始_レ謁_二道_ノ元_一、後_レ師_二徹_ノ通_一孤_ニ爲_二心_ノ法_一兩_レ浮_二滄_ノ溟_一、宋_ノ諸_ノ名_ノ德_一、各_レ加_二器_ノ重_一、跨_二船_ノ歸_レ國_一、三_レ祀_二寓_二于_ノ博_ノ多_一、又_レ游_二肥_ノ之_レ後_ノ州_一樓_二止_一小_レ保_二里_一、建_レ治_二年_一、募_レ化_二而_レ架_二大_ノ渡_ノ長_ノ橋_一、甚_レ極_二壯_ノ麗_一、人_ノ民_ノ頌_レ德_一、又_レ創_二大_ノ慈_ノ於_二此_ノ所_一、其_レ山_ノ名_二大_ノ梁_一者_一、以_レ有_二長_ノ橋_一故_レ也、龜_ノ山_ノ法_ノ皇_ノ下_レ詔_一、特_レ賜_二紫_ノ伽_ノ梨_一乃_レ宸_ノ翰_一、額_レ榜_二存_二於_レ今_一、四_レ方_レ尊_二其_ノ德_一、而_レ不_レ敢_二名_一、止_レ稱_二法_ノ皇_ノ長_ノ老_一、蓋_二以_二皇_ノ太_ノ子_一也、正_レ安_二年_一八_ノ月_ノ廿_ノ一_ノ日_一、淨_レ髮_二沐_レ浴_一、索_レ葦_二書_一、偈_レ云、八_ノ十_ノ四_ノ年_一、動_レ靜_レ得_レ禪_一、末_レ后_一句_一、感_レ音_二已_レ前_一、置_レ筆_二遷_レ化_一、庶_レ民_二大_ノ哭_一、

24 續肥後國古塔調查錄

(三) 宇土郡岩古曾村三百四十四番地 古墳

- 一、古保里越前守墓
 - 一、文□紀年
 - 一、民有地第一種寺敷反別壹反七畝拾八步、如來寺境内
 - 一、県庁マテ距離五里
- 備考

該墓ハ如來寺ノ境内ニアリ号三日山如來寺ト禪洞家大慈禪寺末寺寒巖義尹禪師ノ開基也義尹歸朝後筑前博多聖福寺大慈禪寺等ノ條可合考
文永六年宇土郡ニ來リ大旦那古保里越前守名缺娘素妙尼_{大慈禪寺記ニハ河尻左衛門佐泰}

寺も有りし由、又尼寺之跡等有と云々、此尼寺之跡トテ候ハ按ルニ、素妙尼之庵跡由

又村之西之方ニゆる木之森とて有も如来寺有時之記有シ所と里俗云へり如何、

同上古閑村ニ今也三日山如来禪寺有り、初メ三日村ニありしに永正元年に此所ニ移せし由、今讒之寺地也、本尊如来之三尊長サ四尺斗同様ニ有之、釈迦・弥陀・葉師也と云、共ニ寒巖和尚之作と云、所々損ス、又次之間ニ伊駄天長サ二尺四寸斗成ルがづしニ入て有り、寺僧云是も寒巖之作と云至て上作と見へたり、又座敷と見へたる所ニ開山寒巖之木像并ニ鉄山之木像□□之木像あり、寒巖之像ハ自作也と云り、余之二像ハ甚タ損シ木地斗ニ成たり、開山寒巖之像ハ近來京師ニ登せ修覆さいしき有シと云、此施主立岡村之某寄進也と云り、寒巖和尚像之脇ニしゆ杖あり、いぼ之如キほし甚タ多ク附たる物也、寺僧云開山所持之シユ杖也ト云り、至テ古物也、境内ニ寒巖和尚之塔有り、高サ六尺斗無銘也、寺僧説ニ寒巖ハ於大慈寺遷化也、大慈寺ニ有る所之墓実ニ骨を納みし塔也と云、予按るニ大慈寺ニ有る塔骨を葬シ墓と云ハさも有べし、然ニ大慈寺ニて寒巖遷化有しと云事如何、予及見処之諸書ニ出る処ハ於如来寺遷化と見へたり、猶可尋也、又堂之右脇ニ念之入たる塔有り、高六尺斗寺僧ニ尋ネしに不知と云り、予按るに古保里越前守娘素妙尼之塔なるべし猶可尋之、墓之函石碑考ニ出、今按ルニ寒巖モ余程ノ細工人ナリ

22 新撰事蹟通考 卷之六

〔肥後文献叢書三〕

編年考微四

弘安元年戊寅 九日改元 此歳河尻泰明建ニ精舎テラツ於大渡橋ノ北一延ニ僧寒巖ニ爲ニ開祖ニ號ニ大慈寺一

洞上諸祖傳及寺記略曰開山禪師名義尹號ニ寒巖ニ後鳥羽天皇又稱ニ顯徳院

第三皇子母皇后修明門院重子贈左大臣藤原範季女也建保五年生天性

淳懿不レ膠ニ世故ニ終辭ニ榮於ニ叡山楞巖院ニ剃ニ髮習ニ台教ニ已而又改レ衣

從ニ越前永平開山道元禪師ニ學ニ禪法ニ建長五年三十七歳渡ニ宋國ニ參ニ

見天童山如淨禪師ニ未レ究ニ奔馳ニ而還其間依ニ道元遷化ニ受ニ法ニ鐵通義

价ニ文永元年甲子再入ニ宋首謁ニ無外於瑞巖ニ繼見ニ退耕ニ於靈隱ニ學ニ虛

堂於淨慈ニ將且徧禮ニ拜祖塔ニ歷ニ遊名山ニ四年丁卯歸ニ朝寓ニ筑前博多

聖福寺ニ三歳六年己巳來ニ肥後ニ居ニ宇土郡古保里莊ニ因ニ素妙尼之請ニ

素妙尼一爲ニ河尻素明之妹ニ又爲ニ營ニ構三日山如来寺ニ河尻左衛門佐泰

古保里越前守之女ニ未レ知ニ孰是一

明欽ニ其道風ニ爲ニ法場之外護ニ弘安元年創ニ大慈寺於大渡ニ不ニ期年ニ

而寶殿法堂僧舎庫院丈室山門盡備成矣尹自刻ニ釋迦文殊普賢三像ニ

安ニ之於寶殿ニ佛殿建立勸進帳序多寶塔建立勸進寺名ニ大慈ニ者尹南ニ遊明

州ニ之日愛ニ大慈山之佳境ニ不レ忘ニ於懷ニ今此大渡津偶ニ似ニ明州之地

景ニ故以名レ之其山號ニ大梁ニ者以レ有ニ長橋ニ也其時大渡在ニ大龜山法皇

慈寺山門之前

高好草鞋他未識知圖老體賸還添筆豈按排贖一作剩

永仁己亥季春月半日

如來禪師尹自畫讚

正安二年八月二十一日寒巖如來寺ニ於テ示寂八十四歳其塔ヲ靈根ト

云四神足アリ一記高弟 淨熙大慈 四人アリ斯道土安同 愚谷常質同 仁叟齊希同寺二世 三世 四世 五世

ト云各一方ノ宗主トナル大智祖繼ハ寒巖ニ背キ不和ニナル正慶元年

義尹三十三回忌ノ時何クヨリ來ルモ知レス僧一人來リ香花薪水ノ勞

ヲ助ク供養終テ偈ヲ門柱ニ題シ去ル其偈ニ曰

三十三年如一日 古今無滅又無生 西風八月夜闌後 月在梧桐枝

上明

寒巖和尚ノ讀東明錄ニ出ルモノ左ノ如シ

秋清霽空寒巖勁松道運刼外智照寰中亦窮新活計清白舊家風不離語

默大永平之旨不肆籠絡起洞上之宗竹篋三尺顯誰似其似拍首一味肖

長翁之翁

當寺始ハ三日村ニアリ永正元年今ノ所ニ移ス天正十六年小西領ノ時

寺院及退轉慶長五年清正侯ノ領國ニナリ一字ヲ再興シテ迹ヲ残ス境

内一反七畝年貢免許ナリ

寒巖和尚塔 如來寺中ニアリ寒巖義尹正安二年八月廿一日於如來寺

示寂八十四歳偈ニ曰

八十四年動靜得禪 末期一句威音以前

(補) 古塔調査録云如來寺境内ニ伽藍塔アリ俚俗古保里越前守

墓ト云リ銘文ナク紀年ハ文ノ字ノ下磨滅シテ不分明土俗ノ説

本書ノ記ニ古保里越前守ト云ルハ文永年間ノ人ナルヘシ墓碑ニ

ヲ云フ 文明ノ如ク見ヘタレト支干始メ石面雨露雪霜ニ多ク損シテ定カ

ニモ見ヘ難ケレハ文永ナルモ知ルヘカラス然ルトキハ土人ノ傳

ニモヨク符合セリ云々

翁巷云本書ニ寒巖和尚墓ハ如來寺中ニアリ云々按ニ寒巖ノ墳

墓ハ大慈寺ニアリテ靈根ト云大慈寺ノ條 參考スヘシ本寺ハ示寂ノ地ナレ

ハ跡ニテ墳墓ヲ築シモ知ルヘカラス古塔調査録ニ云ル古保里

越前守墓ヲ寒巖ノ墓ト謬傳ヘシニハ非スヤ

21 古今肥後見聞雜記

宇土

一字土郡三日村ニ三日山如來禪寺之跡有り、村之東之方民家之上老

丁余も登り次第ニ高き所ニ堂床とて有り、今ハ迫田ニなれり、其

上之方ニ堤あり寒巖和尚火葬之灰寄せし跡ニ桜之古木有、此桜三

度桜とて一歳ニ三度宛花咲し由、近年ニ至而古木と成其ひこはへ

之桜有し、村之者近時はを庭中ニ直し植置しも枯シと云、又村老

之説ニ村之東之入口右之方寺跡之下田之端ニ井あり、簡井と云、

釈迦之井ト云、寺有ル時佛ニ備ル飯ヲバ此水ニテたきしと云り、

此井底迄樟ノ木之筒有ヲ今ニ昔之儘ニ而有之由、如何成旱歳ニも

絶ざる水と云、又村中ニ六地藏あり、銘ニ文明□年とあり、又大

門と云所村之南入口ニ有、寺有時之惣門成りし所と云、其辺ニ小

堂。庫院。丈室。三門。全備焉。師躬刻釋迦文殊普賢之像。安之寶殿。山名大梁者。以有長橋也。寺稱大慈者。師嘗遊明州。日愛大慈山奇絕。不忘於懷。今此地偶似之。故以名之。龜山法皇聆名。特賜紫伽梨及宸翰額。陞爲官寺。繇是四方崇尚其德。而不敢名。止稱法皇長老。蓋以皇子也。永仁六年戊戌付席斯道。佚老如來寺。一日俄聚徒衆。告曰。吾將歸矣。左右請留。偈。師便書曰。八十四年。動靜得禪。末後一句。威音以前。置。願。而化。正安二年八月廿一日也。門徒奉全體。之。大慈。塔曰靈根。

19 中興報恩瑩谷和尚略傳

〔主要寺院調査〕

中興報恩瑩谷和尚略傳

師諱玄珠號瑩谷大慈七十代也 永正八年辛未誕 戊寅年八歲投大慈雲庵和尚 落髮穎異出倫鄉里嘆美 天文四年乙未師年二十五受師移報恩寺於壺井旧在小保里鄉 土木之功膾炙人口 秉拂之後三住大慈說法如雨槌退鼓隱報恩 寬永十七年之冬示微恙十二月初四日寂于寢堂 世寿百三十歲 越和翁頗十歲 古今唯一人而已 其所艱可觀焉 元文四年十二月初四日及一百年之遠忌 住持報恩素節預於十一月 抽衣資集僧伽作偈以伸一七之供艱 大慈天常隨喜合掌記錄大槩云 元文四年己未冬天常時年七十六

20 肥後國誌

〔上卷〕

報恩寺德輝山坪井 禪宗洞家川尻大慈寺ノ末寺宇土郡古保里村ニアリ 古保里村ニ寺 文永年中古保里領主ノ息女素妙尼 私案宇土郡上古閑村如來迹ノ記ナシ 寺來歴記ニハ古保里越前守娘素妙尼トアリ大慈寺記ニハ河建立ト云傳フ開山ハ大慈寺寒巖ノ高弟 尻左衛門佐泰明妹素妙尼トアリ 仁叟淨熙和尚大慈寺 四世 也 永正年中熊本ヘ引移ス慶長ノ比住僧間斷ニ及ヒ大慈七十世瑩谷珠和尚再興之中興ト稱ス其後燒失亦造立ス寺内松尾社並觀音堂アリ享保年間千鉢佛造立ス二反八畝十二步年貢地也明和六年依願國君額字ヲ賜フ

肥後國誌

〔下卷〕

古保里在 上古閑村 如來寺三日山 或書ニ古保里村ニアリトハ訛ナリ 禪洞家大慈末寺寒巖義尹禪師ノ開基ナリ寬元元年寒巖入唐シテ文永四年歸朝ノ後筑前博多聖福寺ニ居リ同六年當國宇土郡ニ至リ大旦那古保里越前守娘素妙尼 大慈寺記ニハ河尻左兵衛佐泰明カ娘素妙ニトアリ 願ニ依リテ三日村ニ當寺ヲ建立シ寒巖自ラ刻メル釋迦彌陀藥師ノ像ヲ安シ三日山如來寺ト號シ七堂伽藍ノ禪刹寺領七十五町寄附有シト云傳フ其後寒巖大慈寺ヲ開基シ晚年又當寺ニ隱栖ス此時寒巖自畫自贊アリ今ハ山鹿郡日輪寺ニアリ其贊曰 額皺眉霜頗本懷百醜千拙具形骸手中一脚傳來尚脚下低

鐵額眉霜頗本懷 百醜千拙具形骸

手中一脚傳來尚 脚下低高好草鞋

他未識知圖老體 瞻還添筆豈安排

永仁己亥季春月半日 如來禪寺義尹自畫贊

尹和尚四神足有、斯道淨潔、鉄山土安、常賢 仁叟齊希也各一方の宗師と成、然るに大智は第一の高弟と聞へしがいかなるや事にや、寒巖に背きて不和になれり、正慶元年八月寒巖和尚三十三回忌大慈寺にて法会の時、いつくより来れるともしらぬ老僧一人来て、法会の中香火薪水爨炊等の勞をなして、供養終て偈を門上に題して、一説には龜行方知れず、定ては大智和尚なるへしと云。其偈に曰

三十三年如二一日一 古今無滅又無生

西風八月夜闌後 月在梧桐枝上明

寒巖和尚贊 東明和尚

秋清霽空 寒巖勁松 道運劫外 智照寰中 赤窮新活計 清白旧家風 不離證默 大永平之旨 不肆籠絡 起洞上之才 竹篔三尺 顧誰似 其似拍盲一味 肖長翁之風

18 日本洞上聯燈錄 卷第二

〔大日本仏教全書〕

永平下第三世

萬年嗣祖沙門 秀恕輯

大乘徹通義介禪師法嗣

肥後州大梁山大慈寺寒巖義尹禪師。顯德帝子。順德之弟也。母贈左丞相藤範秀女。建保五年誕焉。師龍章鳳質。聰敏過人。志在塵表。自二弟入睿山一學台教。十六鐘槩受具。徧游講肆。三藏聖教無不該諫。二十五歲俄聞元禪師唱道興聖。忻然慕之。更服參叩。元喜其俊邁。執巾瓶。諭之曰。汝有逸群氣貌。宜敦意斯道。他日期子與教扶宗也。師聞之孳孳參祥。不隔晝夜。時徹通居侍司。師每從之咨叩。獲啓發者甚多。後元遷永平。師亦侍從焉。建長癸丑師三十七。南遊支那。未究其奔馳。翌年損友促還。元順世。孤雲據席。師就受菩薩戒。又隨徹通講明終日。至文永元年。重入宋。首謁無外遠於瑞巖。繼見退耕寧於靈隱。虛堂愚於淨慈。俱有機緣。徧尋名山靈蹟。登育王山。禮佛塔一八萬三千拜。躋天台石橋。供茶於五百應真。宋咸淳三年駕商舶歸國。寓筑之聖福。歷三祀。往肥後。居小保里。時有尼大師素妙者。越前守小保左金吾源泰。營構禪刹。以其殿裏底三如來。名曰如來寺。講師爲開山始祖。入院開堂。爲徹通之嗣。建治二年丙子於益城郡。建極樂寺。爲悲母一薦福。又募諸檀。造大渡長橋。甚極壯麗。人民頌德。刺史源泰明欽其道風。爲法外護。弘安六年創大慈寺。不期年而寶殿。法堂。僧

能ノ一ツヨト被仰候故ニ不思議ニ存ジ面ヲアゲテ奉レバレ見殊勝ナル古佛也驚キ謹デ申候ハ愚ガ破草屋見苦敷如何ト存候エヒ宜ク貴命ニ隨ヒ奉ント申ト覺ヘテ夢醒ノ申候事翌朝弟子衆ニ夢ノ事語りテ今夜ノ夢ノ如來ハ慥ニ彼古佛ナリト覺ユ兼テ心ニ何トゾト存候ニヨリ見申タル夢ニテ御座候半ト申打捨テ置申候

然処ニ二三日過候テ弟子ノ僧來リ頃ロ不思議ノ夢ヲ見申故此義可申ト存候テ罷越候トテ則夢物語リ申候キ

右ノ弟子ノ名ハ禪軒 宇都三日山如來寺ノ中ニ庵アリ

(後略)

16 本朝高僧伝 卷第二十

[大日本仏教全書]

肥後大慈寺沙門義尹傳

肥後州大慈寺開山寒岩禪師略傳
延寶傳燈錄第七 日本洞上聯燈錄第二

釋義尹。號寒巖。順德帝第三子也。自少登睿山。爲必薊。學一心三觀之旨。俄慕教外宗。謁道元和尚於興聖。易衣參究。遂得契悟。建長癸丑秋。元公戡化。尹卽卷被遊函夏。列准洞上錄翌年歸還時年三十七。徧歷諸山。謁無外遠。虛堂愚。退耕寧等諸老。皆蒙優稱。又躋熊耳峰。禮初祖塔三千五百拜。時舍利三粒現於坐具上。光彩燿燿。見聞莫不驚歎之。在宋十餘年而歸。首寓博多聖福寺。繼往肥後州。創如來寺。建治年中。尹募衆緣。造大渡長橋。人民皆被其利濟。刺史源泰明嚮仰

道風。誓爲外護。弘安六年勸諸檀信。復建一寺於大渡。設梵像空堵。勝曰大慈。金碧焜燿。飛出林梢。參玄之徒。鳥立鸞振。龜山上皇特齋。宸翰賜額。正安二年八月某日。洞上錄云廿一日謝世。壽齡八十有四。塔曰靈根焉。出得法弟子五人。

系曰。世人言。尹公初參永平道元禪師。後入大宋。嗣法天童山如淨和尚。無與今之傳相違耶。通曰。此庸僧之靈言也。元師語錄其寂之後。尹公持入宋。無外遠。虛堂愚。題語稱美。釋見其文。爲元師之嗣。分明也。又義堂信公日工集中。壁山鐵公宗派圖。俱以尹公爲元師之資。頃世或者作尹公傳。爲顯德帝子。復言入宋謁如淨。殊不知元師在日淨和尚已遷化。故永平錄中。有值長翁忌日拈香。此時淨和尚過去而久矣。考索不至。而信筆妄作。今其本在在令入疑惑半也。或書爲徹通介嗣亦非也。

17 肥後地志略

宇土郡

三日山如來禪寺 上古閑村にあり

寒巖和尚扁朝の時筑前博多に着岸し、夫より肥後國小保里村に寓居の時、寿妙尼と云もの一字の禪院を營構して、寒巖和尚を開山として、和尚を居せしむ、文永六年なり、寒巖和尚みすから釈迦弥陀葉師を彫刻して安置す、後に寒巖和尚大慈寺に移り、晩年にまた如來寺に住す、此時和尚自画自贊の像有、今は日輪寺に有、贊に云、

大慈寺寒巖尹禪師傳

師諱義尹。字寒巖。顯德帝第三子。母贈左大臣範季之女也。建保五年誕矣。天性淳懿。不膠世故。遂辭榮。披剃于叡嶽習台教。已而捨其所業。到興聖禮謁道元禪師。元以其氣宇不凡。撫愛之。苦垂耳提。年二十七航海。入宋參見太白長翁和尚。翁一見特加器重。師未究奔馳。損友促還。厥後至文永元年。重入宋域。首謁無外於瑞巖。繼見退耕於靈隱。參虛堂於淨慈。各有機緣。咸敬異之。將且徧禮祖塔。浮遊名山。大宋咸淳三年。駕商舶歸國。寓博多聖福寺三祀。又之肥之後州。居小保里。時有尼大師素妙者。營構禪刹。以其殿裏底。如來名曰如來寺。請師為始祖。師入院開堂。為徹通之嗣。建治二年。募諸檀造大渡長橋。甚極壯麗。人民頌德。刺史泰明欽其道風。為法外護。弘安六年。創大慈寺於大渡。不期年而寶殿。法堂。僧堂。庫院。丈室。三門。盡全備矣。且師親刻釋迦文殊普賢之像。安之於寶殿。寺名大慈者。師南遊明州。日愛大慈山之奇絕。不忘於懷。今此地偶似之。故以名之。其山名大梁者。以有長橋故也。龜山法皇聞師德音。下詔褒寵。特賜紫伽梨及宸翰額。又舉為官寺。得有司監護。佛日於是流暉。法雲山。斯不絕。四方尊其德。而不敢名。止稱法皇長老。蓋以皇子也。正安二年。庚子八月二十一日。淨髮澡浴。素筆書偈曰。八十四年動靜得禪。末後一句威音已前。置筆而化。門弟子奉全身。芝于本山。塔曰靈

根。牧衆餘三十年。有二四神足。曰斯道。曰鐵山。曰愚谷。曰仁叟。各為一方宗主。轉化無窮。

15 天福寺阿弥陀像胎内文書

〔熊本市花園町〕

〔木下喜作氏校〕

〔前略〕

肥州鉄堂方ヨリ当庵ノ白縁方エ来タスノ状 白ハ鉄堂弟子ナリ
一先年南方ニ拙僧弟子ノ庵エ其方召連候テ参候節彼ノ辺境ニ毘沙門堂
御座候エ参詣申タル事アリ彼佛壇ノ角ニ御座候古佛ノ事其方是非取り
候テ飯り申ント御顔バカリ取り候テ堂外迄出候ヲ取り候テモ再興成マ
ジクト存候故 無理ニ留置申候事其方存知ノ通りニ候又其後参詣申候
ニ草堂大破ノ次第絶言語候 フキガヤ落チ板敷一枚モ無之候故多ノ
佛像皆損シ申候殊ニ彼一佛朽チ損シ申ニ付誠ニ何トゾ再興仕度念願許
リニテ無力又空ク飯り候 其後 些不思議ノ夢ヲ見申候テ請待仕り候
事

靈夢

元禄七年九月十日ノ夜何レノ所ニ不覺又誰人ト云事ヲ不知老僧一人来
リテ被申レ候ハ 我久敷無縁ノ地ニ居リ多日衰廢ス何方エゾ立越濟度
利生セント思フ處ニ我幸ニ汝ニ縁アリ殊ニ汝ガ弟子等又ハ法類ニ因縁
アリ唯願ハ汝ガ舎ニ至ン若少ク我ヲタスケバ我又大ニ汝ヲ化セント
某夢中ニ申候ハ無縁ノ者ヲ御捨候事如何ト申候ヘバ 夫コソ吾ガ三不

12 扶桑禪林僧寶傳 卷第二 [大日本仏教全書]

大慈寺寒巖禪師傳

禪師名義尹。號寒巖。顯德帝第三子也。出家登三台山。學一心三觀之旨。捨之參永平元禪師。猶恐未盡洞上之道。特航海入宋。謁天童淨和尚。問四載告歸。寓博多聖福寺。繼遷肥後州。建治二年。造大渡長橋。人民頌德。刺史泰明源公。重其道價。為法外護。弘安六年。募諸檀信。復創梵刹於大渡。榜曰大慈。設梵像窣堵。極其嚴麗。為一方之福田。云龜山上皇聞之。每賜宸翰。以旌獎之。正安二年八月謝世。報齡八十四。塔曰靈根焉。

贊曰。捨儲君之榮貴。志出世而度生。古有龍湖。今再見矣。

13 延寶傳燈錄 卷第七 [大日本仏教全書]

相州沙門 師登 撰

曹洞宗

永平道元禪師法嗣

越前州永平二世孤雲懷奘禪師。姓藤氏。初依横川圓能僧都。第聚。登壇受具。修顯密及淨業。嘗嘆曰。直饒究三藏。畢竟非出離法。丈夫豈可匏瓜。乘參多武峯覺晏禪師。大口忍嗣。晏示以首楞嚴頌伽餅之譬。師即知無死之去來。明無識之生滅。晏曰。汝曠劫無明。今日冰消。依附道元于建仁興聖。參叩急於救然。聞元舉一毫穿衆穴。因緣言下契入。首

衆分座スル二十餘年。每有法規。必命師行シム。師曰。和尚號令不自行。何命某甲。元曰。此山他日。俾佛法流傳無窮者在。子。元病退休。令師補永平。文永四年。退居東堂。弘安二年初夏示疾。垂誠曰。我滅後火浴収骨。瘞先師之塔旁。勿別立塔。八月二十四日。[弘安二年。總持寺文書乾。永平寺初祖法衣相傳書作同三年八月二日。永平寺三祖行業記。日域洞上諸祖傳卷上。日本洞上聯燈錄第一。弘化系譜傳第一。本朝高僧傳第二十。永平寺記俱作同三。沐浴入室。待接如常。及哺謂左右曰。先師夜半還化。我當微之。時至鳴鐘集衆。書偈擲筆。願視大衆曰。珍重。溘然而化。世壽八十三。蠟年六十三。停龕七日。顔色如生。肥後州大梁山大慈寺寒巖義尹禪師。順德帝第三子。幼上叡山。學圓頓教。依道元禪師于與聖。久之得旨。建長末年。年垂四十二。南詢宋地。謁無外遠。虛堂愚。

退耕寧諸老。躋熊耳峯。禮初祖塔二千五百拜。時佛舍利五粒現於坐具上。師在宋十餘霜而歸。寓筑之聖福。歷三禪。往肥後小保里。素妙尼。創如來寺。延師為開祖。弘安六年。就飽田郡。開大慈寺。龜山皇特賜紫衣并宸書額。陞為官寺。正安二年八月二十一日。書辭世偈曰。八十四年動靜得禪。末後一句威音已前。拗筆坐化。出法嗣五人。斯道。鐵山安。愚谷賢。仁叟己。東舟勝。

11 國郡一統志

三日山如来禅寺

三日山如来禅寺者、寒巖尹和尚歸朝之後、因素妙尼之請到此鄉、文永六年乃建此寺、七堂伽藍大成、塑釋迦·阿彌陀·彌勒寶像、故有三日如来名職此之由也、和泉守道惠承遠江守平朝臣某、命以定疆界、御教書等載在冊中、可謂紫陽最初大道場也、後建治二年丙子造大渡長橋、弘安六年構一寺於大渡云云、道惠頌云、如来家法超諸方、券契分明定域疆、祖父田園依舊者、俊機妙用逐時揚、當山第二世者鉄山、諱士安、為尹上人高第、先是斯道由早化無嗣、故師始居三日山、後住大慈寺繼上人遺席、寺有寒巖尹上人像、上人自作頂相、每刀三拜成、左右安佛鑑和尚鉄山師像、弘安九年八月十一日、前遠江守平朝臣定如来寺制條、德治二年八月士安上書云、當國者九州之奧區、無依之邊境也、因茲先師義尹長老文永中尋國中之靈場、闢最初之禪院、叢林之軌範始興行、別傳之、宗旨偏流通、思此遠邦之利益、可謂超世之志願者歟、三十餘輩之僧侶雲水繼跡、五十年來之寒煥香灯惟新、若有隨分之内德盍預威權之外護、况是領主北條修理亮殿後室御筆狀既分明也、不及御不審歟、就中當國大慈寺者先師長老當寺建立以後之草創也、忝預御教書被定御願寺了、一人建立之寺何可有用捨哉、加之肥前高城寺大光寺等近年之間各蒙恩裁畢、此皆九州之勝例也、餘於州者不遑注進、當寺獨漏尤容尤以不便也、所望別無、委曲只是為誠、甲乙人之狼籍也、愁鬱不涉多端、只是為全未來際之勤行也、然則早被下御願寺之御教書、

弥固一寺之龜鑑奉祈万年之鶴壽、同二年辛未十月十六日、有鎌倉公命、陸奥守平朝臣相模守平朝臣狀、為御祈禱所且停止、甲乙人亂入、花園院正和五年丙辰四月二十三日士安長老任先例領古保里寺供田、正平三年九月十八日肥後守武光任武重國衙年貢免狀、曆應三年庚辰正月一日左兵衛督源朝臣直義安置肥後國如来寺塔婆佛舍利二粒一粒、右於東寺六十六州之寺社建一國一基之塔婆、忝任申請既為勅願、仍奉請東寺佛舍利各奉納之、伏冀、皇祚悠久、衆心悅怡、佛法紹隆、利益平等、同三年庚辰四月五日有院宣、按察使經預執達、如来寺塔婆為勅願、遂修造之功、祈天下泰平者、時嗣席者智勝禪師也、貞和三年丁亥八月五日左兵衛督狀、建武以來建立諸國寺塔事、院宣案如比所被下通號也、當寺塔婆者可被称肥後國利生塔、貞和六年六月庚子正月二十五日直冬狀有、如来雜掌法泉利生塔寺領任先例事、

寒巖義尹和尚嗣脉

菩提達磨 慧可 僧璨 道信 弘忍

慧能 行思 希遷 惟儼 曇成 良价

道膺 道丕 觀志 綠觀 警玄 義青

道楷 子淳 清了 宝珪 智監 如淨

道元 懷煥 義价 義尹 鉄山

5 大慈寺鐘銘 [熊本県史料中世二]

大慈禪寺鐘銘

日本國鎮西肥後州飽田郷大渡津 始草薊大慈禪寺 新鑄造青銅洪鐘

其銘曰

開金剛眼 振鐵酸拳 塵點五百 界淨三千 扶桑國裏 瀋溟海邊
 州之肥後 郷之飽田 撰地勝地 崇天中天 興大慈寺 著大梁便
 拘留孫様 釋迦文傳 梵鐘瓶作 寶器新研 撞斯鴻韻 驚彼聖賢
 佛宗弘世 法子集筵 清曉鳴也 黃昏打焉 堆曹溪道 靜少林禪
 龍角峙聳 法乳並連 鬼畜嘗味 那落覺眠 皇帝萬歲 大將千年
 聞音安樂 見政公然 伽藍壇主 施財齋肩 福比須達 壽等神僊
 歸依合掌 參詣續躔 耳門入理 身後生蓮
 弘安十年歲次丁亥四月七日造之
 十方檀那一百余人
 四輩合力結緣三百余人

幹縁僧都寺宗驤行如智光惠秀可良妙智禪勝崇智僧願覺道等十余輩也

兩寺比丘衆三十余人 報恩寺法位修惠等尼衆卅余人

鑄冶大工四郎大夫大春日國正

鐘高都合六尺一寸 口廣三尺二寸 小工一十八人
 用錢三百余十貫文 雜用米廿六石六舛八合也

伽藍壇主左金吾源泰明

開關當山住持傳法比丘義尹謹題

6 寒殿義尹畫像自贊 [熊本県史料中世二]

額 皺 眉 霜 頗 本 懷
 百 醜 千 拙 具 形 骸
 手 中 一 拂 傳 來 尚
 脚 下 低 高 好 草 鞋
 他 未 識 知 鬚 老 髯
 剩 還 添 筆 豈 按 排

永仁己亥季春月半日
 如來禪寺 義尹自贊

7 中院義定書狀写 [阿蘇文書二一〇三頁]

何事候乎、さしたる事なく候程ニ、そのうち申さず候、

(中略)

一凶徒頼尚、(少貳) (肥後) 三日寺一昨日十一日(到)當着云々、 なき程ニよを來候はん

3 大渡橋供養記〔熊本県史料中世二〕

鎮西肥後州大渡橋供養草記來九月中

一、奉懸渡大橋梁一條長百尋餘、廣一丈六尺也、

一、兼三箇日不斷御讀經并三時法華懺法

經者所謂

華嚴經八十卷 大集經三十卷 日藏月藏分二十卷

大品般若經三十卷 大般若經六百卷

法華經八卷 涅槃經等四十二卷

一、當日奉唄請一千口僧侶敬奉仰聖應故也、每手擎五部大乘妙典各一卷

開題之、轉讀之、

一、御布施物者每僧布袈裟一條可奉施之、

一、奉為護橋善神法樂舞樂一會可在之、

右設此大會之大旨者、偏奉為
國家御泰平也、仍粗注進草記如件、

弘安元年戊寅七月晦日

勸進比丘義尹謹狀

4 大慈寺重書案〔熊本県史料中世二〕

奉寄進

大慈寺伽藍界壹所事

在

肥後國飽田南郷河尻内大渡橋号大慈橋北

四至

東限白河 西限滿善寺西堀通至于大河

南限大河 北限滿善寺南堀通至于白河

右當伽藍地寄進元者、當國三日寺尹長老在於大渡水路、始被構造大橋梁既早、尋又建立一伽藍、而請住僧侶、敢令致向後之勸化云々、然就為便宜、被所望此地之間、泰明適由在於興隆伽藍之素願、今以早所奉寄進件地壹所於梵宇之砌也、四至内始自僧侶至于在家、不可有其煩、地利物并檢斷一向可為寺内進止、但河尻者、不論大小犯、其身一人出守護方之外、妻子所從田宅雜具者地頭進退也、然者任先例、犯人其身一人雖出守護、留于所地頭進止之分者、為寺内之沙汰、可令成于佛物、又權門沙汰出來者、院内評議、不落居事者、相觸地頭、可隨惣之理非、此外者素此所無其儀之上、或稱恒例重事、或号臨時課役、公事雜事之催役一向可停止之、都者限永代不可有万雜事之煩、然則捨却不法懈怠之輩、招居法器勇猛之僧、莫倦晝夜恒時勤行、為後々將來、載細々狀、所奉寄進之狀如件、

弘安伍年壬午十月八日

源泰明在判

1 如来寺木造釋迦如来坐像胎内銘

(舍利収納蓋表銘)

〔宇土市史研究一〕

如来院本尊

釋迦如来

正元二年^{庚申}正月十日建立

同二月九日収之

開山住持比丘義尹

同開山尼修寧

如来寺木造釋迦如来坐像胎内銘

(舍利収納蓋裏銘)

正元二年^{庚申}正月十日

建立

如来院本尊釋迦如来

同二月九日収之

開山比丘義尹

密壇尼修寧

2 義尹大渡橋勸進疏

〔熊本県史料中世二〕

鎮西肥後州大渡者、九州第一難處之也、尋其源流者、遙出阿蘇神池之南北、而激浪如漿、謂之白河也、遠廻甲佐靈嶽之西東、而碧潭似藍、謂之綠河也、終其雙流一合、今見海陸都津而已、貴賤襲集兩岸、喧靜前後、人馬競上、扁舟沒、失身命、爰義尹屢見此事、獨廻思慮、但昔未有橋梁之跡、暫省涯分、如今何無濟人之思、惟憑他力、盖俗云、聖人常善救人、故無弃人焉、佛言未度者令度云、誠夫聖主之撫黎元也、顯危必安、佛陀愍衆生也、見苦與樂者乎、伏望、文武兩官縉素四輩、若在同心之儀、運砂石而塞急流也猶不難、適在合力之操、聚金銀而梯碧雲也、其可易哉、經曰若種樹園林造井橋梁等、是人所爲福晝夜常增長云々、既是域中之福業、併爲國家之德政、所以所仰十力無畏、永鎮四夷之凶乱、奉憑三念大悲、偏祝一天之泰平、佛日帝日照遐年、慈風德風扇萬世、依之捨財諸壇富貴並乎、須達施願良友、壽運齊乎彭祖者哉、於戲昔日行基僧正也、曾認舊柱而構山崎之橋也、今時德薄野衲也、將企新條而掛河尻之梁、聖凡雖隔甲乙、性智能通慈濟、欲被乾坤、理致豈妨乎、所以清水映徹湛月光童子之禪室中、靈木無朽橫持地菩薩之平路上、凡厥之南之北也、人畜僅踏此梁、自東自西也、賢愚皆到彼岸者也哉、幹縁如上謹疏、

建治二年丙子五月日如来寺比丘 義尹 謹疏

弘安元戊寅十月八日造畢、供養一千僧事既了、

例言

- 一、本編は如来寺および報恩寺を明示する史料を収録したものである。寒巖義尹に関する史料については、その全てを収録するにはかなりの紙数を要することになるので、如来寺在任時、およびそれを明示するものに限って収録した。
- 二、史料は、文書・記録・彫刻等に表われているものから収録し、原則的には年代順に配列した。
- 三、史料の校訂は、井上正氏の助言を得て高木があたった。

目

1	如来寺木造釋迦如来坐像胎内銘	1
2	義尹大渡橋勸進疏	1
3	大渡橋供養記	2
4	大慈寺重書案	2
5	大慈寺鐘銘	3
6	寒巖義尹畫像自贊	3
7	中院義定書狀写	3
8	如来寺木造素妙尼像胎内背面銘	4
9	如来寺木造東州至遼弘鑑禪師像胎内腹部銘	4
10	大慈寺宗瑛・如来寺善虎連署狀	4
11	國郡一統志	5
12	扶桑禪林僧寶傳	6
13	延寶傳燈錄	6
14	日域洞上諸祖傳	7
15	天福寺阿弥陀像胎内文書	7
16	本朝高僧傳	8
17	肥後地志略	8
18	日本洞上聯燈錄	9
19	中興報恩瑩谷和尚略傳	10

次

20	肥後國誌	10
21	古今肥後見聞雜記	11
22	新撰事蹟通考	12
23	石瀨漫錄	13
24	續肥後國古塔調查録(付図、岩古曾村塔)	13
25	如来寺木造素妙尼像背面銘	14
26	萬松山常安寺本尊略縁記	14
27	熊本県社寺圖録	15
28	如来寺墓石銘	15

如來奔跡

— 史料編 —

